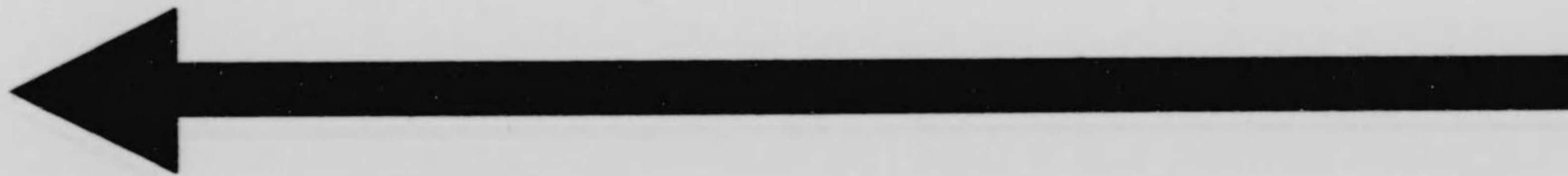


364
300



始



364
300

陸軍省檢閱濟

鞍
工
教
程

鞍工教程正誤表

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
十六	二	立	立	三十三	六	黄鞆革	黄鞆革
十八	五	小錐菱	小菱錐	三十六	八	鞍囊、臺革	鞍囊臺革
二十	一	穹木	穹木	三十八	十	茶褐包	茶褐色
二十	六	麻製腹帶	麻製腹帶	三十九	外	麻類粉殼	麻類
二十三	一	一枝篋	一枚篋	四十	七	櫛皮	櫛皮
二十三	六	墳毛子	墳毛子(第一八圖)	四十一	五	具ノ	其ノ
三十一	三	褐色多脂	褐色多脂	四十三	四	繰復ス	繰返ス
三十一	三	牛革	牛革	四十六	四	在リテハ地	在リテハ通
三十三	三	緒締	緒締	四十六	上	常地上	常地上

附表「革條寸度表」備考第二項中長徑ノ文字ハ何レモ削除

陸普第二五一四號

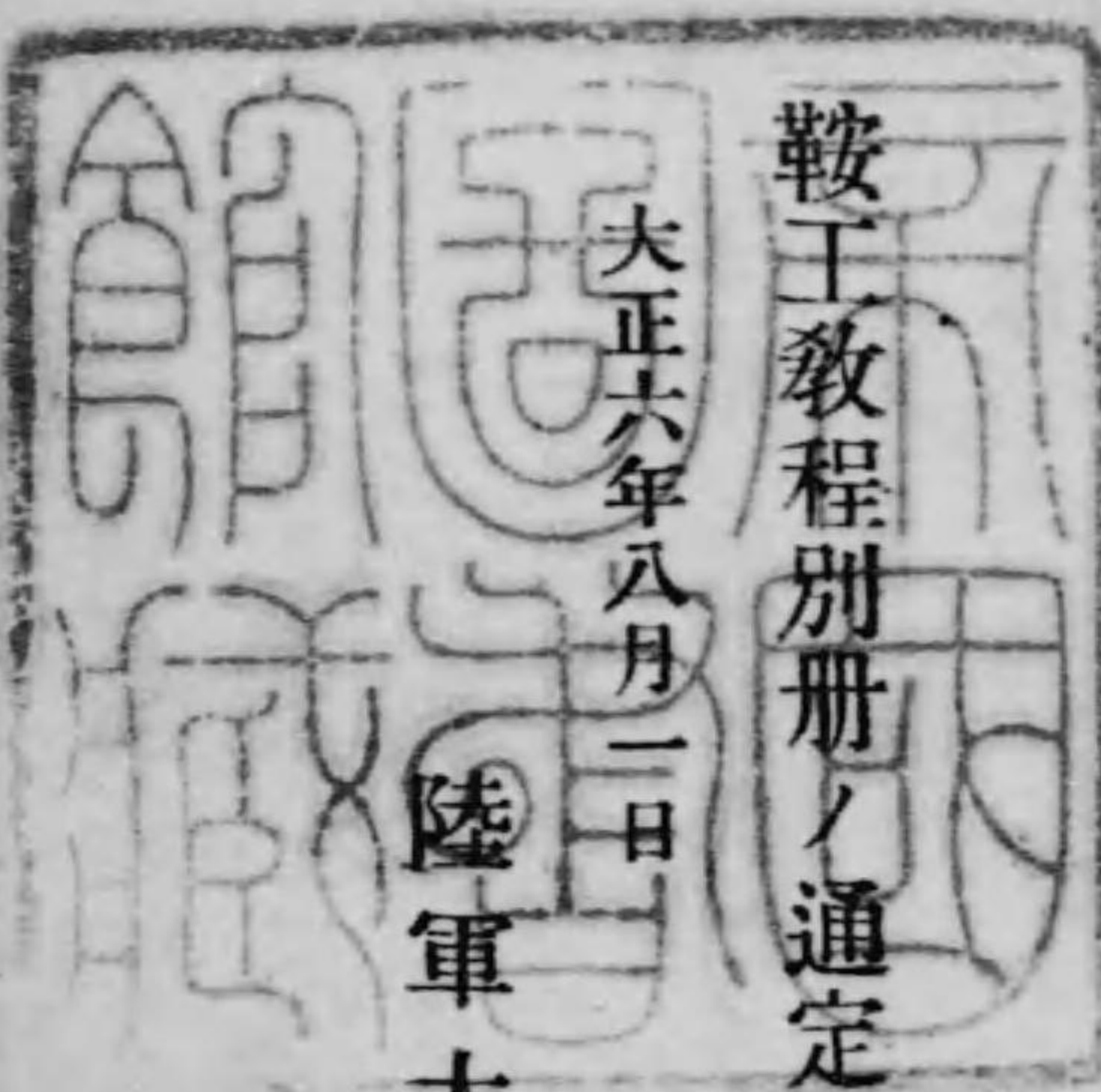
鞍工教程規定ノ件達

陸軍一

鞍工教程別冊ノ通定ム

大正六年八月二日

陸軍大臣 大島 健



大正 6. 10 12 内交

鞍工教程目次

總則	一頁
第一篇 工具	五
第一章 通則	五
第二章 測度器類	五
一 遊標尺	六
二 曲尺	七
三 二米卷尺	八
四 兩脚規	九

目次

一



第三章 鞍工具類

一	截革盤	九
二	截革刀	十
三	鞍工小刀	十一
四	革鉋	十一
五	面取鉋	十二
六	削稜子	十三
七	木口盤	十三
八	擊木	十四
九	菱目打、角目打	十四

十	單鉋目打	十五
十一	小判目打	十六
十二	鳩目打拔	十六
十三	鳩目拔	十七
十四	菱錐	十八
十五	掬錐	十八
十六	圓錐	十九
十七	繩工圓錐	十九
十八	縫臺	十九
十九	針	二十

二十	鞍工鉗	二十一
二十一	齒鉗	二十一
二十二	鋏、布鋏、絲鋏	二十二
二十三	畫線籠	二十二
二十四	畫線錘	二十三
二十五	填毛子	二十三
二十六	壓扣木型	二十三
二十七	鋏拔	二十四
第四章	一般工具類	二十五
一	八耗柄附螺廻	二十五

二	小仕上鏈	二十五
第五章	砥類	二十六
一	荒砥	二十六
二	青砥	二十六
三	合砥	二十七
四	鋼砥	二十七
第六章	檢查	二十八
第二篇	材料	三十一
第一章	革	三十一
一	褐色多脂牛革	三十一

二	褐色堅牛革	三十二
三	褐色牝牛革	三十二
四	黄鞞革	三十三
五	白鞞革	三十四
六	「セーム」革	三十四
七	「クローム」革	三十五
八	革ノ選定	三十五
第二章	麻類	三十七
一	麻布	三十七
二	麻帶地(杉織地)	三十八

三	麻	三十九
四	縫絲	三十九
第三章	獸毛、初殻	四十
一	鹿毛	四十一
二	牛毛	四十一
三	初殻	四十二
第四章	糊類	四十三
一	布海苔液	四十三
二	磐石糊	四十三
三	蕨糊	四十四

第五章 塗抹材料	四十五
一 軟松瀝	四十五
二 蠟	四十七
三 上塗塗料	四十七
四 下塗塗料	四十八
五 漆	四十九
六 假漆	五十
イ 酒精製假漆(「ベルニー」)	五十一
ロ 油製假漆	五十二
第六章 脂油其ノ他	五十二

一 格納用礦油	五十二
二 「ワセリン」	五十三
三 「パラフィン」	五十三
四 常用礦油	五十四
五 鯨油	五十四
六 牛脂	五十五
七 「テレピン」油	五十五
八 石油	五十六
九 揮發油	五十六
十 生(煮)亞麻仁油	五十七

十一 「ナフタリン」	五十八
十二 炭酸曹達(洗濯曹達)	五十九
十三 苛性曹達	五十九
第三篇 作業	六十一
第一章 基本作業	六十一
一 通則	六十一
二 截革法	六十二
三 削革法	六十三
四 軟革法	六十五
五 糊著法	六十六

イ 布海苔液ノ糊著法	六十七
ロ 磐石糊ノ糊著法	六十七
六 穿孔法	六十八
七 縫綴法	七十
イ 革ノ縫綴法	七十
ロ 麻布ノ縫綴法	七十三
八 仕上法	七十六
九 染色法	七十七
イ 麻布ノ茶褐色染	七十八
ロ 麻ノ茶褐色染	八十

十	綯綱法	八
十一	塗抹法、剝脫法	八十三
イ	上塗塗料及下塗塗料ノ塗抹法	八十三
ロ	上塗塗料及下塗塗料ノ剝脫法	八十五
ハ	假漆ノ塗抹及剝脫法	八十七
第二章 修理作業		
一	通則	八十八
二	三十年式乘馬具	九十三
イ	乘鞍	九十三
ロ	頭絡	九十七

ハ	大勒韁、小勒韁	九十七
ニ	鍙革	九十八
ホ	腹帶	九十八
ヘ	鞍囊	九十九
ト	鞍下毛布	百
チ	膝覆	百
リ	旅囊	百
ヌ	野繫韁	百
ル	野繫頭絡	百
三	砲兵輓馬具	百四

イ 首革	百四
ロ 緩喉革	百五
ハ 平長革	百五
ニ 輓革	百六
ホ 袴革	百六
四 三十二年式軍刀	百六
五 三十年式銃劍	百七
第四篇 圖面ノ見解	百十一
第一章 圖面及線	百十一
第二章 註記	百十二

第三章 見解上ノ注意	百十三
第五篇 兵器保存法	百十五
第一章 手入	百十五
一 金屬部	百十五
二 革具	百十八
三 麻製品及毛類	百二十三
四 木部	百二十四
五 手入上ノ注意	百二十五
第二章 格納	百二十七
第三章 分解及結合	百三十一

附表

革條寸度表

鞍工教程目次終

鞍工教程

總則

第一 本教程ハ陸軍工卒教育規則ニ據リ軍隊ニ於テ鞍工卒ノ教育ヲ行フニ方リ實施スヘキ一般ノ標準ヲ示シ工卒教育ノ齊一進歩ヲ期スルヲ以テ目的トス

第二 本教程ノ主トシテ鞍工ニ關スル各兵科共通ノ事項ヲ記述シ其ノ一兵科ニ關スル事項ハ單ニ主要ナルモノヲ例記セルニ止ム而シテ各隊ハ教育ノ實施ニ方リ所屬工卒ノ種別竝保管兵器ノ種類ニ應シ其ノ教育スヘキ事項ヲ適宜斟酌スヘキモノ

總則

一

トス

第二 工卒ノ教育ハ實技ニ重キヲ置キ學科ハ勉メテ術科ト併セ行フヘキモノトス又兵器ニ對スル尊重心ヲ養成スルハ兵器ノ保存並修理作業ヲ完全ナラシムル爲最緊要ナルヲ以テ之カ涵養ニ意ヲ用ウルヲ要ス

第四 工卒ノ任務ハ主トシテ兵器ノ修理ニ從事スルニ在リ而シテ技術ノ巧拙及作業ノ精粗ハ兵器ノ價值ニ影響スルコト大ナルヲ以テ常ニ技術ヲ練磨シ且作業ノ正確ヲ期セサルヘカラス

第五 工場ノ軍紀ハ作業ノ性質上動モスレハ弛緩ニ陥リ易シ故ニ作業ノ指導監督ニ任スル者ハ勿論各工卒ハ常ニ作業軍紀

ノ緊張ニ遺憾ナキヲ期セサルヘカラス

作業軍紀トハ如何ナル場合ヲ問ハス作業間命令ヲ確實ニ實行シ作業ニ關スル諸規定ヲ嚴守スルヲ謂フ

第六 工具ノ整否ハ作業ノ成果ニ大ナル關係アルヲ以テ常ニ其ノ整備ヲ怠ルヘカラス之カ爲屢工具ヲ檢查シ適時研磨修正ヲ行ヒ使用終ラハ手入ノ後所定ノ位置ニ整頓スヘシ殊ニ共同使用ノモノニ在リテハ動モスレハ其ノ取扱粗雜ニ流レ易キヲ以テ一層注意スヘシ又工具ハ必ス其ノ用途ニ從ヒ之ヲ使用シ苟モ煩ヲ厭ヒテ其ノ使用ヲ誤ルカ如キコトアルヘカラス

第七 材料ハ其ノ目的ニ應シ必要ノモノヲ用キサルヘカラ

スト雖勉メテ之カ節約ヲ圖リ徒費廢棄ノ弊ニ陷ルコトナキヲ要ス

第八 修理品ハ其ノ取扱ヲ鄭重ニシ完成品ト未成品トニ區分シ品目毎ニ整置シ要スレハ手入ヲ行ヒ其ノ保存ヲ全カラシムヘシ

第一篇 工具

第一章 通則

第九 鞍工卒ノ用ウル工具ハ其ノ使途ニ依リ大別シテ屯營用鞍工具、携行鞍工具、携帶鞍工具トシ其ノ他銃工具、携行輜重車工具竝修理所用諸工具中ニモ鞍工ニ必要ナル工具ヲ收容セラレ

本篇ハ主トシテ屯營用鞍工具竝携行鞍工具中主要ナルモノニ就キ記述ス

第二章 測度器類

一 遊標尺 (第一圖)

第十 寸度ヲ精密ニ測ルニ用ウ
 桿ノ一面ニハ 耗 寸度、他面ニハ吋寸度 (一吋ノ八分ノ一迄ヲ
 現ハス)ヲ刻ミ又遊標ノ一面ニハ一耗ノ十分ノ一、他面ニハ一吋
 ノ六十四分ノ一迄ヲ測リ得ル如ク分畫ヲ刻メリ
 使用法 啄被ヲ起シ駐螺ヲ緩メ遊標ヲ動カシテ下嘴ヲ適宜ニ開
 キ物體ヲ兩嘴ノ間ニ挾ミ駐螺ヲ緊メ徐カニ物體ヨリ離シ遊標ノ
 零位ニ對向スル桿ノ分畫ヲ讀ムヘシ若正シク對向セサルトキハ
 少キ方ノ分畫ヲ讀ミ又一耗以下若ハ一吋ノ八分ノ一以下ハ桿ノ
 分畫ト一致スル遊標ノ分畫ヲ讀ムモノトス

孔ノ 徑ヲ測ルニハ兩嘴尖端ノ外側ヲ孔ノ内側ニ當テ又二點間
 ノ距離ヲ測ルニハ兩嘴ノ尖端ヲ之ニ合セテ前ト同様ニ分畫ヲ讀
 ムモノトス
 使用後ハ遊標ヲ零位ニ復シ輕ク駐螺ヲ緊メタル後啄被ヲ以テ嘴
 尖部ヲ被ヒ置クヘシ

二 曲尺 (第二圖)

第十一 寸度ヲ測リ線ヲ畫キ面ノ平坦或ハ直角ヲ檢スル等
 ニ用ウ
 長手及横手ノ外縁ニハ角頂ヲ起點トシ一面ニハ曲尺寸度、他面
 ニハ耗寸度 (此ノ兩寸度ヲ俗ニ表目ト謂フ)ヲ刻ミ又長手ノ内

縁ニハ特別ノ分畫（俗ニ裏目ト謂フ）ヲ刻メリ
使用法 寸度ヲ測ルニハ表目ヲ以テシ線ヲ畫クニハ縁ヲ定規ト
ス

面ノ平坦ヲ檢スルニハ種種ノ方向ニ縁ヲ當テ透視シテ間隙ナキ
トキハ平坦ナリ又面ノ直角ヲ檢スルニハ隅角部ヲ當テ之ヲ透視
スルモノトス

三 二米卷尺（第三圖）

第十二 長キ物體ノ寸度或ハ物體ノ外周ヲ測ルニ用ウ
尺布ノ一面ニハ曲尺寸度、他面ニハ耗寸度ヲ表ス
使用法 尺布ヲ引出シ之ヲ物體ニ接シテ測ルモノトス使用後ハ

轉把ヲ起シ之ヲ右ニ廻シテ尺布ヲ其ノ室ニ收ムヘシ

四 兩脚規

第十二 圓弧ヲ畫キ又ハ二點間ノ距離ヲ測リ或ハ之ヲ等分
スル等ニ用ウ

使用上ノ注意 寸度ヲ定ムルニハ曲尺等ト併セ用キ又兩脚開閉
ノ工合ヲ調節スルニハ樞鉸ノ緊定ヲ加減スヘシ

第二章 鞍工具類

一 截革盤

第十四 主トシテ革ヲ截チ若ハ削ルトキノ臺ニ用ウ大截革

盤及小截革盤ノ二種アリ

二 截革刀

第十五 革ヲ截ツニ用ウ又革ヲ削ルニ用ウルコトアリ

使用法 革ヲ截革盤上ニ置キ左手ニテ之ヲ押ヘ右手ニ截革刀ノ柄ヲ握リ刃裏ヲ左方ニシ拳ヲ僅ニ左前ニ傾ケ畫線若ハ模型ニ準ヒ刀ヲ前方ヨリ後方ニ引キテ截ツモノトス若刃裏ヲ右方ニ向ケテ截ツトキハ拳ヲ僅ニ右前ニ傾クルヲ要ス
大ナル革ニ在リテハ之ヲ床上ニ置キ右足ニテ畫線ノ右側ヲ押ヘ左手ニテ其ノ左側ヲ浮カシテ保チ刃ヲ前方ニ向ケ刃裏ヲ左方ノ切目ニ接シツツ前方ニ進メテ截ツコトアリ

革ヲ削ル場合ニハ刃裏ヲ上方ニシ削ラムトスル厚サニ應シ適宜ニ刀ヲ傾ケ前方ニ進ムルモノトス

三 鞍工小刀

第十六 截革刀ヲ用ウル能ハサル場合ニ於テ革ヲ截チ或ハ

削ルニ用ウ

四 革 鉋

第十七 革ヲ削ルニ用ウ大革鉋、中革鉋及小革鉋ノ三種

アリ

大革鉋及中革鉋ハ臺面平坦ニシテ小革鉋ハ船底形ヲ成ス

使用法 大革鉋及中革鉋ヲ用ウルニハ革ヲ截革盤上ニ置キ通常

足ヲ以テ其ノ一端ヲ押ヘ鉋ノ頭部ヲ後方ニシ右手ニ之ヲ持チ左手ヲ中央部ニ添ヘ僅ニ壓シツツ速ニ前方ニ進メテ削ルモノトス
小革鉋ニテ小ナル革ヲ削ルニハ革ヲ左手ニテ支ヘ右手ニ鉋ヲ持チ僅ニ壓シツツ後方ヨリ前方ニ進メ或ハ前方ヨリ後方ニ引クモノトス

鉋身ヲ鉋臺ヨリ脱スニハ片手ニテ鉋身ト共ニ鉋臺ノ兩側ヲ握リセウシ アゲツチ小仕上鍵ウチギ或ハ擊木ヲ以テ鉋臺頭部ヲ上方ノ稜角ニ近ク輕ク打ツモノトス

注意 一般ニ鉋ノ刃ハ適宜兩隅ヲ斜ニ研落シアルヲ要ス

五 面取鉋

第十八 小革鉋ノ更ニ小ナルモノニシテ主トシテ革ノ稜角或ハ断面ヲ削ルニ用ウ
使用法 革ヲ截革盤ノ一側ニ置キ左手ニテ之ヲ支ヘ右手ニ鉋ヲ持チ僅ニ壓シツツ前方ヨリ後方ニ引キテ削ルモノトス

六 削稜子 (第四圖)

第十九 革ノ稜角ヲ削ルニ用ウ
使用法 革ヲ截革盤上ニ置キ左手ニテ之ヲ支ヘ右手ニ柄ヲ握リ刃ヲ革ノ稜角ニ當テ僅ニ壓シツツ前方ニ進メテ削ルモノトス

七 木口盤

第二十 革、布類ニ目打或ハ鳩目打拔ニテ孔ヲ穿ツトキノ

臺ニ用ウ大木口盤及小木口盤ノ二種アリ

八 擊木 ウチギ

第二十一 革、布類ニ孔ヲ穿ツトキ目打或ハ鳩目打拔ノ頭部ヲ打ツニ用ウ

使用上ノ注意 擊木ヲ用ウルニハ其ノ廣キ面ニテ目打或ハ鳩目打拔ノ頭部ヲ平ニ打ツヘシ

九 菱目打、角目打 (第五圖)

第二十二 馬具其ノ他革具ノ縫目ヲ穿ツニ用ウ但シ一般ニ菱目打ヲ用キ携帶兵器ノ革具又ハ三十年式乘馬具乘鞍ノ連接革或ハ鞍囊ノ連綴革ノ如キ幅狭キ革ノ縫目ニハ通常角目打ヲ

用ウ

使用法 長短兩鍼ヲ所望ノ縫目間隔ニ開キ硬キ革片ヲ適宜ニ其ノ間ニ挾ミ縫絲ヲ以テ固ク縛リ次ニ左手ヲ以テ其ノ下部ヲ保チ指ヲ革ニ接シ長鍼ヲ第一ノ縫目ニ相當スル位置ニ眞直ニ立テ擊木ヲ以テ第一ノ目打ヲ爲ス次ニ之ヲ拔キ長鍼ヲ短鍼ニテ穿チタル孔ニ立テ前ト同様ニ第二ノ目打ヲ爲ス逐次此ノ如ク目打ヲ進メテ縫目ヲ穿ツモノトス

十 單鍼目打 (第六圖)

第二十三 主トシテ厚ク重ネタル革具ノ縫目ヲ穿ツニ用

使用法 豫メ菱目打ヲ用キテ縫目ノ位置ヲ定メタル後之ニ單鉞目打ヲ眞直ニ立テ更ニ深ク縫目ヲ穿ツモノトス

十一 小判目打コバンメウチ(第七圖)

第二十四 革、布類ニ簪サンクワンヲ取附クル孔等ヲ穿ツニ用ウニ耗小判目打、三耗小判目打、四耗小判目打、五耗小判目打、六耗小判目打及七耗小判目打ノ六種アリ

使用法 革ニ孔ノ位置ヲ印シルシ之ニ準ヒ眞直ニ目打ヲ立テ擊木ニテ打ツモノトス

十二 鳩目打ハトメウチヌキ拔ヒキ(第八圖)

第二十五 革、布類ニ鳩目孔ヲ穿ツニ用ウニ耗鳩目打拔、

三耗鳩目打拔、四耗鳩目打拔、五耗鳩目打拔、六耗鳩目打拔、七耗鳩目打拔及九耗鳩目打拔ノ七種アリ

使用法 小判目打ニ同シ但シ橢圓孔ヲ穿ツニハ其ノ短徑ノ寸度ニ應スル鳩目打拔ヲ以テ長徑ニ準ヒ兩端ノ弧形部ヲ打貫ウチスキタル後鞍工小刀ニテ殘部ヲ截去ルモノトス

十三 鳩目拔ハトメヌキ(第九圖)

第二十六 革、布類ニ鳩目孔ヲ穿ツニ用ウニ耗鳩目拔シムダフ及三耗ノモノ各二箇、四耗及五耗ノモノ各一箇ノ刃アリ

使用法 刃塔ヲ廻シテ所望ノ刃ヲ砥面チシメンニ向ハシメ駐鋏チウベンノ端ヲ刃

塔ノ溝ニ鉤シタル後革、布類ヲ礎上ニ載セ孔ヲ穿タムトスル點
ヲ正シク刃尖ニ向ハシメ握柄部ヲ強ク握リテ孔ヲ穿ツモノトス

十四 菱 錐 (第十圖)

第二十七 革具ヲ縫フトキ縫目ヲ開クルニ用ウ大菱錐及
小錐菱ノ二種アリ一般ニ小菱錐ヲ用キ大菱錐ハ主トシテ八番革
「ミシン」絲ニテ厚キ革具ヲ縫フ場合ニ用ウ但シ縫返ヲ行フ爲
縫目ヲ開クルニ方リテハ縫絲ヲ切ル恐アルヲ以テ之ヲ用ウヘカ
ラス

十五 掬 錐 (第十一圖)

第二十八 革具ヲ掬縫スルトキ縫目ヲ開クルニ用ウ

十六 圓 錐

第二十九 大圓錐及小圓錐ノ二種アリ

小圓錐ハ線ヲ畫キ又ハ革、布類ノ縫目ヲ開ケ或ハ縫絲ヲ解クニ
用ウ但シ革ノ縫目ヲ開クルニハ縫絲ヲ止ムル爲縫返ヲ行フトキ
ノミトス此ノ際縫目ヲ過度ニ擴ケサルコトニ注意スヘシ
大圓錐ハ縫絲ヲ解キ或ハ綱類ノ端末ヲ編込ムニ用ウ

十七 繩工圓錐

第二十 綱類ノ端末ヲ編込ムトキ捻ノ間ヲ開クルニ用ウ

十八 縫 臺 (第十二圖)

第三十一 革、布類ヲ縫フトキ之ヲ挾ムニ用ウ

使用法 穹木ヲ開キテ革、布類ヲ挾ミ要スレハ縮械ヲ装ス

十九 針 (第十三圖)

第二十二 一號綴針、二號綴針、三號綴針及四號針ノ四種アリ

一號綴針及二號綴針ハ主トシテ鞍褥、極褥、竝輻重輓、馱馬具ノ麻製腹帶等ヲ綴著クルニ用ウ

三號綴針ハ目打ヲ行ハスシテ革ヲ縫フニ用ウ

四號針ハ目打ヲ以テ縫目ヲ穿チタル革ヲ縫ヒ若ハ布類ヲ縫フニ用ウ

使用上ノ注意 縫絲ヲ三號綴針又ハ四號針ニ附著スルニハ先ツ

絲ノ端末約ネ五糎ヲ解キテ之ヲ細クシニ子ニ燃合セタル後第十
三圖ノ如ク針ヲ絲ニ通シ次ニ絲ノ端ヲ針ニ通シ針ヲ針尖ノ方ニ
引出シテ絲ヲ絞ルモノトス
四號針ニテ革ヲ縫フニ方リテハ其ノ針尖ヲ僅ニ圓クスヘシ

二十 鞍工鉗 (第十四圖)

第三十三 縫絲若ハ針ヲ抜クニ強キ力ヲ要シ或ハ指頭ヲ
用ウル能ハサルカ如キ狭キ場所ヨリ絲若ハ針ヲ引出シ或ハ革、
布類ノ縁若ハ端ヲ緊張シ又ハ簪環附著部ヲ縫フトキ縫絲ヲ十分
ニ縮ムル爲其ノ部ヲ密著セシムル場合等ニ用ウ

二十一 齒鉗 (第十五圖)

第二十四 革、布類ヲ強ク緊張スル場合ニ用ウ

二十二 鉄ハサミ、布鉄スバサミ、絲鉄イトバサミ

第二十五 鉄ハ麻綱類、布鉄ハ麻布類、絲鉄ハ絲類ヲ切
ルニ用ウ

二十三 畫線篋クラクセンベラ (第十六圖)

第二十六 革ニ線ヲ畫キ或ハ布類ノ襞ヒダヲ取ルニ用ウ又腹
帶、野繫頭絡等ノ横編ヨコアミヲ爲スニ用ウルコトアリ
使用法、革ノ縁ニ沿ヒ線ヲ畫クニハ伸縮螺子シンシュクランシヲ廻シテ二枚篋ノ
間隔ヲ定メタル後一方ヲ革ノ側面、他方ヲ其ノ表面ニ當テ拳ヲ
僅ニ側方ニ傾ケツツ革ノ側面ニ沿フテ進退スルモノトス

單ニ線ヲ畫キ或ハ襞ヲ取リ或ハ横編ヲ爲スニハ一枝篋ヲ用ウ

二十四 畫線鋏クラクセンゴテ (第十七圖)

第二十七 革ノ縁ニ沿ヒ線ヲ畫クニ用ウ

使用法 畫線篋ニ同シ但シ溝ノ間隔不變ナルヲ以テ一定ノ線ノ
ミ畫キ得ルヲ異リトス

二十五 填毛子デンマウシ

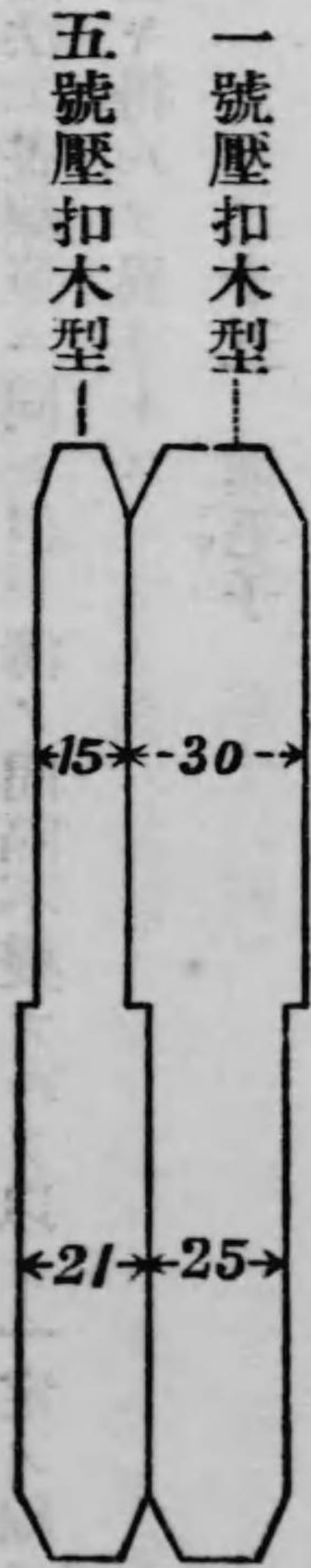
第二十八 鞍褥類ニ毛ヲ填ムルニ用ウ

二十六 壓扣木型アツコウキガタ

第二十九 縫終リタル壓扣ニ嵌メ其ノ形狀ヲ正シ若ハ其
ノ縁ニ線ヲ畫クトキ等ニ用ウ一號乃至六號壓扣木型ノ六種アリ



使用上ノ注意 大ナル壓扣ニ在リテハ適宜壓扣木型ヲ組合シテ
用ウルモノトス例ヘハ三十年式銃劍帶革ノ遊環革ニハ左圖ノ如
ク一號及五號壓扣木型ヲ組合ハスカ如シ



二十七 鋸^{ビヤウ}拔^{ヌキ} (第十九圖)

第四十 鋸ヲ拔取ルニ用ウ

使用法 鋸拔ノ尖端ヲ鋸ニ當テ小仕上鏈ニテ後端ヲ輕ク打チ溝
ニテ鋸ヲ挟ミタル後柄部ヲ壓下ケテ之ヲ抜クモノトス

第四章 一般工具類

一 八耗柄附螺廻^{エツキネジマハシ}

第四十一 螺子ヲ螺著ケ或ハ離脱スニ用ウ

使用上ノ注意 螺廻ヲ用ウルニハ其ノ端ヲ正シク螺子ノ溝ニ嵌
メ且眞直ニ保チ稍壓著ケツツ廻スコトニ注意スヘシ否サレハ螺
廻ノ端脱^{ハツ}レテ溝或ハ他ノ部分ヲ傷ツクルコトアリ

二 小仕上鏈^{セウシアゲツチ}

第四十二 小綴釘ヲ綴著シ縫絲ヲ壓著ケ縁革ヲ貼附ケ或ハ布類ノ縁ヲ折返ストキ等ニ用ウ

第五章 砥類

一 荒砥

第四十三 刃具ノ刃ノ闕ケタルトキ或ハ新ニ刃ヲ附クル場合等刃ヲ多ク研卸スニ用ウ

使用上ノ注意 此ノ砥ニテハ刃ノ裏面ヲ研カサルモノトス

二 青砥

第四十四 荒砥ニテ研キタルモノ或ハ刃ノ鈍リタルモノ

ヲ研クニ用ウ

使用上ノ注意 刃尖ノ稍裏面ニ反ル迄研クヘシ此ノ砥ニテモ亦刃ノ裏面ヲ研カサルモノトス

三 合砥

第四十五 刃具ヲ研キ上クルニ用ウ

四 鋼砥

第四十六 刃具ヲ裏押(刃尖ノ闕損或ハ磨滅シタルトキ其ノ裏面ヲ平坦ナラシムルコトヲ謂フ)スルニ用ウ

使用法 砥面ニ少許ノ細末金剛砂ヲ撒キ僅ニ水ニテ濕シ刃ノ裏面ヲ研キテ平カナラシムルモノトス

第六章 検査

第四十七

工具ノ検査ニ方リテハ概ネ次ノ各號ニ注意ス
ヘシ

- 一 遊標尺ハ上下兩嘴ヲ密著セシメタルトキ間隙ヲ生セサル
ヤ、其ノ尖端ハ磨滅シアラサルヤ、遊標ノ零位ハ桿ノ零位ト
正シク一致スルヤ、駐螺及發條ハ共ニ其ノ機能完全ナルヤ
- 二 曲尺ノ分畫ハ磨滅シアラサルヤ、其ノ長短兩邊ハ互ニ直
交シアルヤ
- 三 二米卷尺ノ尺布ハ磨損シアラサルヤ

四 兩脚規ハ脚ノ尖端磨滅若ハ屈曲シアラサルヤ、樞鉸ノ緊
定適度ナルヤ

五 鉋ハ刃ノ表、裏面ノ研方適當ナルヤ、臺ハ正シキ形ヲ保
チアルヤ

六 鋏類ハ樞軸ノ緊定及兩刃ノ接觸適度ナルヤ

七 一般ニ刃具ノ刃部ハ磨滅若ハ闕損シアラサルヤ

八 鞍工鉗、齒鉗ノ樞軸部ハ緊定適度ナルヤ又脚部ヲ握リタ
ルトキ噬部ハ正シク密著シ且兩脚間ニ適當ノ餘裕アルヤ

九 一定規、截革盤、木口盤、擊木等ハ割裂シアラサルヤ又截
革盤ノ面ニ凹凸ナキヤ

十 柄類ハ正シク且確實ニ裝著セラレアルヤ

十一 砥面ハ平坦ナルヤ、砥ト臺トハ確實ニ接著シアルヤ

十一 砥面ハ平坦ナルヤ、砥ト臺トハ確實ニ接著シアルヤ
十二 刃口ハ鋭利ナルヤ
十三 刃口ハ直ニ切レタルヤ
十四 刃口ハ曲ガレタルヤ
十五 刃口ハ折レタルヤ
十六 刃口ハ欠ケタルヤ
十七 刃口ハ欠ケタルヤ
十八 刃口ハ欠ケタルヤ
十九 刃口ハ欠ケタルヤ
二十 刃口ハ欠ケタルヤ

第二篇 材料

第一章 革

一 褐色多脂牛革 カウシヨクタン、ゼウカク

第四十八

牡牛皮ヲ「タンニシ」ニテ鞣シ脂油ヲ加ヘ仕

上ケタルモノニシテ品質良好ナルモノハ傷痕少ク稍強ク裏面ニ

曲クルモ龜裂ヲ生セス断面ハ一樣ニ褐色ヲ呈シ纖維能ク緊リ表

面（銀面トモ謂フ）ハ色相等齊ニシテ厚サ三耗乃至五耗ヲ有

ス

兵器ノ革具類ニハ主トシテ此ノ革ヲ用ウ

二 褐色堅牛革 カツシヨクケンゼウカク

第四十九

牡牛皮ヲ濃キ「タンニン」ニテ鞣シ強ク壓シテ革質ヲ堅クシ少量ノ脂油ヲ加ヘ仕上ケタルモノニシテ品質良好ナルモノハ堅クシテ傷痕少ク暫ク水ニ浸シ置クモ甚シク軟ラカクナラス断面ハ一樣ニ褐色ヲ呈シ厚サ三耗以上ヲ有ス
二十六年式拳銃囊ノ蓋革、三八式騎銃彈藥盒ノ裏革及隔板等ニ用ウ

三 褐色牝牛革 カツシヨクケンゼウカク

第五十

牝牛皮ヲ淡キ「タンニン」ニテ鞣シ脂油ヲ加ヘ揉ミテ子母ヲ現ハシ軟ラカニ仕上ケタルモノニシテ品質良好ナルモノ

ハ傷痕少ク裏面ヲ内ニシ四ツ折ト爲シ輕ク壓スモ龜裂ヲ生セス厚サ二耗乃至二耗半ヲ有ス

三十二年式軍刀ノ切羽、指貫、刀緒（緒締及總頭ヲ除ク）二十

六年式拳銃囊ノ彈插革、三十年式乘馬具鞍囊ノ囊革及蓋革其ノ

他紐類ニ用ウ

四 黃鞞革 キナメシカワ

第五十一 牡牛皮ノ表面ヲ削リ鯨油ニテ鞣シタルモノニシテ品質良好ナルモノハ軟ラカニシテ容易ニ硬クナルコトナク断面ハ一樣ニ黃色ヲ呈シ各部著キ厚薄ナク厚サ三耗乃至四耗ヲ有ス

洗桿刷帽ノ締紐、四一式山砲駄馬具鞞褥ノ細革條、輜重車ノ螺
鑰縛革等ニ用ウ

五 白鞞革

第五十二 牛皮ヲ種油ニテ鞞シ僅ニ子母ヲ現ハシタルモ
ノニシテ品質良好ナルモノハ傷痕少ク白色ニシテ黄色ヲ帶ヒス
又裏面ニ曲ケテ龜裂ヲ生セス厚サ一耗半乃至三耗ヲ有ス
四一式山砲駄馬勒及三八式機關銃駄馬勒(甲)ノ頭絡縛革、三
八式輜重鞍馬具袴革釣革ノ鞞連綴革、手轆轤ノ力革等ニ用ウ

六 「セーム」革

第五十三 羊皮ノ表面ヲ削リ魚油ニテ鞞シタルモノニシ

テ黄色ヲ呈シ厚サ薄ク他ノ革ニ比シ一層軟ラカナリ
象限儀匣ノ内貼等ニ用ウ

七 「クローム」革

第五十四 牛皮若ハ水牛皮ヲ「クローム」明礬ニテ鞞シ
脂油ヲ加ヘ仕上ケタルモノニシテ青色ヲ呈ス品質良好ナルモノ
ハ傷痕少ク稍強ク裏面ニ曲クルモ龜裂ヲ生セス断面ハ一様ニ青
色ヲ呈シ厚サ三耗以上ヲ有ス
駐退機ノ緊塞革、革環等ニ用ウ

八 革ノ選定

第五十五 革ハ其ノ部位ニ依リ抗力ヲ異ニスルモノニシ

テ背、横腹、腰等ハ最強ク肩、首等之ニ次キ下腹、腋等ハ最弱シ
 各種部品ニ用ウヘキ革ヲ取ルニハ之ニ適應スル部位ヲ選ヒ其ノ
 表、裏面ノ傷痕ヲ避ケ通常長サヲ背筋ノ方向ニ取り且成ルヘク
 屑ヲ出ササル如クスヘシ褐色多脂牛革ニ就テ其ノ一例ヲ示セハ
 左ノ如シ

- 一 背、横腹、腰等ノ部分ハ刀帶、帶革、騎坐革、鞆革、頭
ラダ、ダツナ、アミカハ、ヒキカハ
 絡、鞆、鞆革、鞆革等ニ用ウ
- 二 肩、首等ノ部分ハ劍差、居木室革、鞍囊、臺革、頸上革、
ケンサン、キギシツカハ、ダイカハ、ケイジャウカク
 鞆褥革等ニ用ウ
- 三 下腹、腋等ノ部分ハ褥ノ表革、縁革、前橋及居木包革等
フチカハ、ベンケウ、キギツツミカハ

ニ用ウ

第二章 麻類

一 麻布

第五十六 亞麻若ハ麻ヲ織リタルモノニシテ地質ノ厚薄
 ニ依リ一號乃至四號厚麻布、一號乃至三號薄麻布並荒目麻布等
 ノ別アリ品質良好ナルモノハ織絲ニ外皮附著セス且撚合平等ニ
 シテ節ナシ通常茶褐色ニ染メテ用ウ其ノ用途ノ一例ヲ示セハ左
 ノ如シ

- 一號厚麻布 水囊、圓匙袋等
スイナロ

二號厚麻布

旅囊、豫備品車ノ雨覆等

三號厚麻布

砲車及彈藥車ノ上被、泥除等

四號厚麻布

麥袋、各種箱ノ蓋上布等

一號薄麻布

鞍褥及板褥ノ裏布、膝覆等

二號薄麻布

蹄鐵囊、挾布等

三號薄麻布

乘鞍ノ騎坐布等

荒目麻布

鞍骨ノ衣布、板體居木ノ衣布等

二

麻帶地アサオビヂ（杉織地スギオリヂ）

第五十七

亞麻及麻ヲ綾アヤニ織リタルモノニシテ力強シ幅

及厚サニ依リ數種アリ通常茶褐包ニ染メ各種駄馬具ノ腹帶、水

囊提布サシメ、各種緣布及紐類等ニ用ウ

三 麻アサ

第五十八

品質良好ナルモノハ通常淡黃色ウスキイロヲ呈シ纖維長

クシテ能ク緊リ外皮附著セス光澤アリテ力強シ麻綱ノ大部ハ此

ノ麻ヲ茶褐色ニ染メテ用ウ

四 縫ヌヒ絲イト

第五十九

白玉絲、革「ミシン」絲及木綿絲ノ三種アリ其

ノ用途概ネ左ノ如シ

白玉絲（一子）

薄麻布及毛布類

木綿絲

革「ミシン」絲

白玉絲 (二子)

麻布類

四番革「ミシン」絲

白玉絲 (二子)

抗力ヲ要セサル革條及革具類

六番革「ミシン」絲

白玉絲 (三子)

抗力ヲ要スル革條及控革類

八番革「ミシン」絲

白玉絲 (四子)

鞍褥、極褥ノ綴絲、大ナル抗力ヲ要スル革具類

第三章 獸毛、初穀

一 鹿^{シカ}毛^ゲ

第六十 鞍褥等ニ用ウルニ適スルモ手入ヲ怠ルトキハ蟲害ヲ受ケ易シ之ヲ用ウルニハ五十度内外ノ曹達液(温湯一斗ニ曹達灰百三十瓦ノ割合ニテ溶カシタルモノ)ニ約ネ四十分間浸シ次ニ之ヲ取出シテ液ヲ搾リ清水ニ入レ熊手^{クマデ}等ニテ絶エス攪拌^{カキマ}シツツ十分之ヲ洗ヒ日ニ乾シタル後防蟲劑^{バウチウザイ}ヲ施スヘシ

三十年式乘馬具乗鞍ノ騎坐及鞍褥、砲兵輓馬具驂馬鞍(舊式)ノ鞍褥、三八式機關銃駄馬具ノ脛當^{スネアデ}等ニ用ウ

二 牛^{ウシ}毛^ゲ

第六十一 鹿毛ニ比シ蟲害ヲ受クルコト少シ之ヲ用ウル

ニハ鹿毛ト同方法ニ依ル
三十年式乘馬具乗鞍ノ騎坐ニ用ウ

三 糶殼

第六十二 獸毛ニ比シ蟲害ヲ受クルコト少シ之ヲ用ウル
ニハ先ツ篩^{フルヒ}ニテ粉末等ヲ除キ五十度内外ノ温湯ニ約ネ一時三十
分間浸シ次ニ之ヲ取出シ清水ニテ洗ヒ日ニ乾シタル後防蟲劑ヲ
施スヘシ
砲兵輓馬具驂馬鞍ノ鞍褥、各種輓駄馬具ノ鞍褥並四一式山砲駄
馬具ノ鞍褥等ニ用ウ

第四章 糊類

一 布海苔液

第六十三 革ノ裏面又ハ断面等ニ塗り其ノ纖維ヲ密著セ
シムルニ用ウ
調製法 布海苔ヲ適宜ニ小サクシ水ト共ニ（布海苔百瓦ニ付水
一升三合ノ割合トス）銅鍋ニ入レ徐カニ攪拌シツツ之ヲ煮テ全
ク溶ケタル後布片等ニテ濾シ残渣ヲ除去ス

二 磐石糊

第六十四

粘氣強ク乾燥速ナルヲ以テ革、布類ヲ貼合ス

ニ用ウ

調製法 小麦粉ヲ桶ニ入レ適度ノ水ヲ加ヘテ生麩シヤウフヲ製シ約ネ三日間暖キ場所ニ置キテ時時攪拌シ次ニ之ヲ淺キ箱ニ移シ日光ニ曝シテ屢攪拌ストキハ漸次粘氣ヲ増シ遂ニ所要ノモノヲ得ヘシ

木板上ニ延ハシテ乾固ホシカマメタル磐石糊ハ之ヲ用ウルニ方リ水或ハ温湯ニテ軟ラカクシ能ク練合ネリアハセ適度ノ粘氣ヲ得セシムヘシ

三 蕨糊ワラビノリ

第六十五 澁ト混シ各種駄鞍ノ居木ニ荒目麻布ヲ貼附クルニ用ウ

調製法 先ツ蕨粉ヲ銅鍋ニ入レ逐次少量ノ水ヲ加ヘテ能ク溶カシ(蕨粉百瓦ニ付水四合五勺ノ割合)攪拌シツツ煮テ糊ト爲シ稍冷エタル後澁(三百瓦)ヲ加ヘ十分練合スモノトス

第五章 塗抹材料

一 軟松瀝チヤンシ

第六十六 縫絲ニ塗り濕氣ヲ防クニ用ウ

調製法 松脂マツヤニヲ適宜ニ碎キ銅鍋ニ入レ文火トロビニテ徐カニ熔カシ次ニ種油ヲ加ヘテ能ク攪拌シ適度ニ軟ラカクナリタルトキ水桶ノ中ニ移シ冷エタル後取出シテ十分練合スモノトス

配合ノ割合概ネ左ノ如シ

品目	區分		
	冬	季	夏
松脂	四百五十瓦		四百五十瓦
種油		五勺	三勺

注意

- 一 松脂ヲ熔カスニ方リ火力強キニ過クルトキハ甚シク白煙ヲ發スルモノナリ
- 二 軟松瀝ノ硬軟ノ度ヲ檢スルニハ其ノ少量ヲ鍋ヨリ取出シ水中ニ入レ冷シタル後指頭ヲ以テ之ヲ壓シ僅ニ指痕ヲ止ム

ル程度ノモノヲ良トス若否サルトキハ更ニ松脂或ハ種油ヲ加フヘシ

- 三 軟松瀝ヲ鍋ヨリ水桶ニ移スニハ桶ニ粘著スルヲ防ク爲先ツ水ヲ攪拌シテ瀉^{ウツ}ヲ生セシメ適度ノ分量ツツ其ノ中ニ入ルヘシ

二 蠟^{ラフ}

第六十七 黃蠟及及白蠟ノ二種アリ共ニ縫絲ニ塗り其ノ通リヲ容易ナラシムルニ用ウ

三 上塗塗料^{ウハヌリトリヤウ}

第六十八 各色ノ固練^{カヌネリ}「ペンキ」ヲ「ドライヤー」ト練

合セ之ニ^ニ煮^ア亞^マ麻^マ仁^ニ油、^ニ「ゴールドサイス」、^ニ「コーバルワニス」等ヲ加ヘテ製シタルモノニシテ數種アルモ最多ク用キラルルモノヲ茶褐色塗料トス

四 下塗塗料

第六十九 鐵部ニ上塗塗料ヲ施スニ先チ防錆^{サレドメ}トシテ用ウ
調製法 先ツ少量ノ生^キ(煮)亞麻仁油ニテ光明丹ヲ餅狀ニ搗混セ
次ニ「ドライヤー」及生(煮)亞麻仁油ヲ少量ツツ加ヘテ練リ更ニ生(煮)亞麻仁油ヲ加ヘ要スレハ「ペンキ」濾器若ハ白木綿ニテ濾スモノトス
配合ノ割合概ネ左ノ如シ

光 明 丹

八百二十瓦

生(煮)亞麻仁油

百二十五

「ドライヤー」

六十瓦

五 漆

第七十

通常灰白色ヲ呈シ乾燥スルトキハ黒褐色ニ變ス日光及普通ノ熱ニテハ乾燥スルコト遲シト雖濕氣ヲ含メル暖キ空氣或ハ高キ熱ニ遇フトキハ乾燥シ易シ瀨縮漆及蠟色漆等アリ
鞭ノ千段卷部ニ塗リ乘鞍ノ鐵具等ニ燒漆ヲ爲シ或ハ^{ヒメノリ}糝糊ト混シ漆糊ヲ製スルニ用ウ

注意 漆ハ皮膚ヲ侵シ易キヲ以テ其ノ取扱ニ注意スヘシ

第七十一

漆糊ハ三十年式乘馬具乗鞍ノ鞍骨、砲兵輓馬

具驂馬鞍ノ鞍骨等ニ荒目麻布ヲ貼附クルニ用ウ

調製法 先ツ糝糊粉ニ逐次少量ノ水ヲ加ヘテ能ク溶カシ攪拌シ
ツツ煮テ糊ト爲シ次ニ瀨締漆ヲ加ヘ篋ニテ十分練合スモノト
ス

配合ノ割合概ネ左ノ如シ

糝糊粉

百 瓦

水

三合五勺

瀨締漆

三百瓦

六假漆

イ 酒精製假漆(「ベルニー」)

第七十二

「セルラツク」ヲ酒精ニ溶カシタルモノニシテ

主トシテ木部等ニ塗り或ハ油煙ト混シ鞭ノ千段巻部ノ下塗ニ用
ウ

調製法

酒精ト「セルラツク」トヲ混シ時時攪拌シテ溶カシ約ネ

八時間(日光ニ曝ストキハ尙速ナリ)ヲ經タル後濾スモノトス

配合ノ割合概ネ左ノ如シ

「セルラツク」

百 瓦

酒 精

二合五勺

但シ鞭ノ千段巻部ニ塗ルモノハ油煙二十五瓦ヲ加フ

ロ 油製假漆

第七十三 「コーバル」ノ如キ樹脂類ヲ通常煮亞麻仁油ニ溶カシ若干ノ顔料ヲ加ヘ色ヲ著ケタルモノニシテ鐵具類ニ塗ルニ用ウ

第六章 脂油其ノ他

第七十四 脂油ニハ引火シ易キモノ多ク又之ヲ含メル布片、雜巾等ヲ堆積シ置クトキハ發火シ易キモノアルヲ以テ其ノ取扱ニハ特ニ注意スヘシ

一 格納用礦油

第七十五 概ネ綠色ヲ帶ヒタル褐色ノ半固體ニシテ永ク防錆ノ效アリ故ニ久ク格納スル鐵具ニ用ウ而シテ之ヲ用ウルニハ通常湯煎鍋ニテ熔カスモノトス

二 「ワセリン」

第七十六 白色ノ軟ラカキ半固體ナルモ熱ニ遇ヘハ融ケ易シ故ニ主トシテ常用若ハ一時格納スル鐵具ノ防錆又ハ齒輪、螺絲部等ノ防擦ニ用キ其ノ他發微豫防ノ爲革具用複合脂ニ混入ス

三 「パラフィン」

第七十七 白色ノ固體ニシテ寒氣ニ遇ヘハ脆クナリ易シ

故ニ多クハ「ワセリン」ト混シテ防錆、防擦ニ用キ又「パラフィン」紙トシテ鐵具ヲ包ミ或ハ不溶解石鹼等ト混シテ防水劑ヲ製スルニ用ウ

四 常用礦油

第七十八 淡黄色又ハ淡赤褐色ノ液體ナリ主トシテ常用

鐵具ノ防錆、防擦ニ用キ又牛脂ト混シテ防擦脂ヲ製ス

五 鯨油

第七十九 粘氣アル無色又ハ淡黄色ノ液體ナリ主トシテ

牛脂ト混シテ革具用複合脂ヲ製ス

鯨油ノ臭味惡キモノ或ハ色相濃キモノハ不良トス又冬季ハ濁リ

易キヲ以テ先ツ之ヲ温メ其ノ澄メルヲ認メタル後用ウヘシ

六 牛脂

第八十 白色又ハ淡黄色ノ固體ニシテ味ナク殆ト臭ナシ鯨

油ト混シテ革具用複合脂、常用礦油ト混シテ防擦脂、白色「ペン

キ」等ト混シテ防錆脂ヲ製ス

注意 牛脂ノ表面黄色ヲ呈シタルモノハ其ノ部分ヲ除キテ用ウ

ヘシ又腐リ易キヲ以テ容器ハ之ヲ密閉スヘシ

七 「テレピン」油

第八十一 無色又ハ淡黄色ノ液體ニシテ特異ノ臭アリ揮

發シ易シ主トシテ塗料ヲ製シ或ハ之ヲ剝カスニ用キ又ハ「ナフ

タリン」ヲ溶カスニ用ウ

石油又ハ揮發油ノ臭ヲ含ムモノハ不良トス

八 石油

第八十二 無色又ハ淡紫色ノ液體ニシテ特異ノ臭アリ甚

シキ油垢、鏽或ハ火藥ノ燼渣ヲ洗フニ用ウ

注意 石油ハ金物ヲ侵スモノナルヲ以テ使用後ハ十分之ヲ拭取
ルヘシ

九 揮發油

第八十三 無色ノ液體ニシテ特異ノ臭アリ揮發シ易シ電

話機ノ如キ精密器械ノ手入ヲ爲シ或ハ油垢、鏽若ハ火藥ノ燼渣

ヲ洗ヒ又ハ「ナフタリン」ヲ溶カスニ用ウ

揮發油ハ之ヲ掌ニ滴ストキハ全部揮發シ去リテ石油又ハ其ノ他
ノ惡臭ヲ止メサルモノヲ良トス

注意

一 揮發油ヲ用キテ金物ヲ手入シタル後ハ十分之ヲ拭取ルヘ

シ否サレハ金物ヲ侵スコトアリ

二 揮發油ハ最引火シ易キヲ以テ特ニ火氣ヲ遠サクルコトニ

注意スヘシ

十 生(養)亞麻仁油

第八十四 生亞麻仁油ハ褐色ヲ帶ヒタル黃色ノ液體ニシ

テ乾キ易ク空氣ニ曝ストキハ漸次濃クナリ粘氣ヲ帶ヒ遂ニハ膜ヲ生ス

煮亞麻仁油ハ生亞麻仁油ヲ熱シ之ニ乾燥劑ヲ加ヘタルモノニシテ生亞麻仁油ニ比シ其ノ色濃ク通常赤褐色ヲ呈シ粘氣大ニシテ一層乾キ易シ

防濕或ハ防錆用トシテ麻布、銃床、鋼索類ニ塗り又ハ各種塗料ヲ製スルニ用ウ

十一 「ナフタリン」

第八十五 粉末ノモノト固形ノモノトアリ白色ニシテ光澤ヲ有シ特異ノ強キ臭アリ主トシテ毛製品、鞍褥及極褥等ノ防

蟲ノ爲其ノ儘又ハ揮發油、「テレピン」油ニ溶カシテ用ウ

十二 炭酸曹達タンサンソウダ（洗濯曹達センタクソウダ）

第八十六 透明ナル固體ニシテ水ニ溶ケ易シ主トシテ垢及油ノ附キタル麻製品等ヲ洗フニ用ウ

注意 炭酸曹達ニテ洗ヒタルモノハ更ニ水ニテ十分洗フヘシ

十三 苛性曹達カセイソウダ

第八十七 白色ノ脆キ固體ニシテ水ニ溶ケ易シ主トシテ「ペンキ」塗料ヲ剥カスニ用ウ

注意 苛性曹達ハ物ヲ侵スコト特ニ強キヲ以テ使用後ハ水ニテ十分洗フヲ要ス又使用者ハ成ルヘク直接ニ手ヲ觸レサル如ク

スヘシ

第八十八 第八十九 第九十 第九十一 第九十二 第九十三 第九十四 第九十五 第九十六 第九十七 第九十八 第九十九 第一百 第一百零一 第一百零二 第一百零三 第一百零四 第一百零五 第一百零六 第一百零七 第一百零八 第一百零九 第一百一十 第一百一十一 第一百一十二 第一百一十三 第一百一十四 第一百一十五 第一百一十六 第一百一十七 第一百一十八 第一百一十九 第一百二十 第一百二十一 第一百二十二 第一百二十三 第一百二十四 第一百二十五 第一百二十六 第一百二十七 第一百二十八 第一百二十九 第一百三十 第一百三十一 第一百三十二 第一百三十三 第一百三十四 第一百三十五 第一百三十六 第一百三十七 第一百三十八 第一百三十九 第一百四十 第一百四十一 第一百四十二 第一百四十三 第一百四十四 第一百四十五 第一百四十六 第一百四十七 第一百四十八 第一百四十九 第一百五十 第一百五十一 第一百五十二 第一百五十三 第一百五十四 第一百五十五 第一百五十六 第一百五十七 第一百五十八 第一百五十九 第一百六十 第一百六十一 第一百六十二 第一百六十三 第一百六十四 第一百六十五 第一百六十六 第一百六十七 第一百六十八 第一百六十九 第一百七十 第一百七十一 第一百七十二 第一百七十三 第一百七十四 第一百七十五 第一百七十六 第一百七十七 第一百七十八 第一百七十九 第一百八十 第一百八十一 第一百八十二 第一百八十三 第一百八十四 第一百八十五 第一百八十六 第一百八十七 第一百八十八 第一百八十九 第一百九十 第一百九十一 第一百九十二 第一百九十三 第一百九十四 第一百九十五 第一百九十六 第一百九十七 第一百九十八 第一百九十九 第二百

第三篇 作業

第一章 基本作業

一 通則

第八十八 本章ハ各種ノ作業法ヲ部分的ニ説明セルモノニシテ第一篇工具ノ使用法ト相俟チテ其ノ要領ヲ會得^{エトク}セシメ以テ修理作業ノ基礎ヲ成スヘキモノトス

第八十九 基本作業ノ要領ヲ會得セスシテ修理作業ヲ行フトキハ良好ナル結果ヲ得ルコト能ハス故ニ本作業ハ綿密ニ意ヲ用キ嚴正ニ實施スルヲ要ス

二 截革法 カハダチカダ

第九十 先ツ圓錐若ハ鉛筆ニテ革ノ表面ニ線ヲ畫キ之ニ準ヒテ截革刀時トシテ鞍工小刀ニテ截ツモノトス而シテ厚キ革ニ在リテハ數回ニ刀ヲ用ウルコトアリ然ルトキハ刀ノ傾キヲ變ヘサルコトニ注意スヘシ又硬キ革ヲ截ツトキハ刀ノ兩面ニ油ヲ塗ルヘシ

畫線圓形ヲ成ストキハ刀ヲ右前ニ置キ多ク其ノ位置ヲ變フルコトナク左手ヲ以テ革ヲ廻シツツ截ツモノトス

注意

一 畫線弧形ヲ成ストキハ刃裏ヲ常ニ弧ノ内方ニ向クヘシ

二 革條類ノ如キ折曲^{オリマ}ケテ縫著クルモノニ在リテハ規定ノ寸

度ニ革ノ厚サタケノ長サヲ増スヲ要ス

三 削革法 カハケツリカダ

第九十一 革ヲ所望ノ厚サニ削ルニハ其ノ大小、長短ニ應シ適宜ノ革鉋ヲ選ヒ革ヲ截革盤上ニ置キ手又ハ足ニテ一端ヲ押ヘ先ツ其ノ一半ヲ削リタル後革ノ方向ヲ反^{カハ}シテ他ノ一半ヲ削ルモノトス

廣キ革ヲ削リテ生シタル鉋^{カシナフト}痕ヲ除クニハ鉋身ヲ鉋臺ヨリ脱シ刃裏ヲ前方ニ向ケ兩手ニテ之ヲ保テ左右ニ動カスコトナク僅ニ前方ニ傾ケツツ推進ムルモノトス

革ノ稜角ハ削稜子又ハ面取鉋ニテ僅ニ削取ルモノトス但シ袴革等ノ如キ強ク馬體ニ接スヘキ革具ニ在リテハ稍多ク削リテ弧形ナラシムルモノトス

革ヲ斜ニ削ルニハ小革鉋、面取鉋若ハ截革刀ヲ用キ又革ノ一部ヲ剝ルニハ截革刀ヲ用ウルモノトス

注意

- 一 柔軟ニシテ纖維粗キ革ヲ削ルニハ鉋ノ刃ヲ稍多ク臺面ヨリ出シ硬キ革ヲ削ルニハ少シク出スヘシ又褐色堅牛革ニハ少量ノ水氣ヲ與ヘテ削ルヲ可トス

- 二 廣キ革ヲ削ルニハ其ノ厚サヲ各部平等ナラシムルコトニ

注意スヘシ

- 三 裏磨ウラミガキ(革ノ裏面ヲ布海苔液ニテ糊著スルヲ謂フ)ヲ爲ストキハ通常革ノ厚サヲ減ス故ニ豫メ仕上寸度ヨリ稍厚ク削

リ置クヲ要ス

四 軟革法カハヤハラゲカタ

第九十二 革ニ形ヲ與ヘ又ハ革ヲ鐵具等ニ卷キテ縫著クルトキ等(例ヘハ三十年式乘馬具乗鞍ノ騎坐革、各種馬具鞞ノ尾插革、砲兵輓馬具輓革ノ轉環及輓鎖ノ被革、三八式機關銃馬具馱鞍ノ被革、砲兵輓馬具驢馬鞭及三八式機關銃馬具鞭ノ卷革等ノ如シ)ニハ作業ヲ容易ニシ且表面ノ龜裂ヲ防ク爲一時

革ヲ軟ラカナラシムルヲ要ス之カ爲革ヲ水又ハ約ネ四十度ノ湯ノ中ニ浸スモノトス其ノ時間ハ革ノ種類、硬サ等ニ依リ差異アリト雖概ネ左ノ如シ

革ノ種類	區分	
	水	湯
褐色堅牛革	二時間以内	三十分以内
褐色多脂牛革	一時間以内	十五分以内

注意 軟ラカサ所望ニ達スルトキハ水(湯)中ニ置クコトナク速ニ作業ヲ施スモノトス

五 糊著法

イ 布海苔液ノ糊著法

第九十三 裏磨ヲ爲スニハ先ツ根刷毛ニテ革ノ裏面ヲ刷キ次ニ布海苔液ヲ塗り再ヒ根刷毛ニテ擦リタル後篋等ヲ以テ刷毛目ヲ平ニシ約ネ三十分間陰乾シ稍白色ヲ呈セハ更ニ適宜ノ研磨具(滑ラカナル石又ハ木片ノ類)ヲ以テ擦リ飴色ノ光澤ヲ現ハサシム但シ褐色牝牛革ニ在リテハ液ヲ薄ク塗り篋ニテ全面ヲ平ニシ研磨具ヲ用ウルコトナク乾カスモノトス

革ノ断面ニ糊著スルニハ液ヲ塗り布片ニテ擦リ光澤ヲ現ハサシム

ロ 磐石糊ノ糊著法

第九十四

革、布類ヲ貼合スニハ先ツ糊篋ヲ以テ貼合スヘキ革ニ磐石糊ヲ薄ク塗り之ニ他ノ革又ハ布ヲ合セ其ノ外面ヲ壓著クルカ或ハ小仕上鍔ニテ輕ク打チテ密著セシム

注意 堅キ革ト軟ラカキ革トヲ貼合スニハ糊ヲ軟ラカキ方ニ塗ルヲ可トス

六 アチアケカ 穿孔法

第九十五

革ニ縫目或ハ簪環ノ孔等ヲ穿ツニハ先ツ孔ノ位置ヲ印シタル後所要ノ工具ヲ用ウルモノトス

縫目ノ間隔ハ通常縫合部^{スヒアヘヒ}ノ厚サ八耗以内ノモノニ在リテハ五耗又ハ六耗、其ノ以上ノモノニ在リテハ六耗又ハ七耗五トス但シ

縫フヘキ長サ短キモノニ在リテハ三耗或ハ四耗ト爲スコトアリ而シテ目打ヲ爲スニハ其ノ終末ヨリ約ネ五十耗ノ點ニ於テ一時作業ヲ中止シ残りノ長サヲ等分スル如ク多少間隔ノ修正ヲ行ヒツツ残りノ目打ヲ爲スヘシ

斜ニ縫著クヘキ革具ハ角目打ニテ淺ク目打ヲ爲シ然ル後更ニ菱錐又ハ掬錐ヲ以テ斜ニ孔ヲ穿ツヘシ

隱^{カクシス}縫ヲ行フモノニ在リテハ截革刀ニテ斜ニ切込ミタル後目打ヲ爲スコトナク掬錐又ハ菱錐ヲ以テ孔ヲ穿ツモノトス

注意 褐色堅革ニ孔ヲ穿ツニハ其ノ表面ノ龜裂ヲ防ク爲僅ニ水氣ヲ與ヘテ行フヲ可トス

七 縫綴法ヌヒカダ

イ 革ノ縫綴法（第二十圖、第二十一圖、第二十二圖）

第九十六 革ヲ縫フニハ豫メ所要ノ目打ヲ爲シタル後通常右手ニ菱錐ト針、左手ニ針（一本針縫ノトキハ用キス）ヲ取り先ツ錐ニテ第一ノ縫目ヲ開ケ針ヲ通シテ縫ヒ次ニ第二ノ縫目ヲ開ケ之ヲ縫ヒ逐次此ノ如ク錐及針ヲ交互ニ用ウルモノトス而シテ一般ニ二本針縫ヲ用キ綴著等特別ノ場合ニハ一本針縫ヲ用ウ

第九十七 一本針縫
第一法 第二十圖ノ如ク革ノ一端ヨリ他端ニ互リ之ヲ縫ヒ再

ヒ縫歸ルモノトス

第九十八 二本針縫
第二法 第二十一圖ノ如ク革ノ一端ヨリ逐次返カヘシヌヒ縫ヲ行ヒツツ他端ニ至ルモノトス三十年式乘馬具乘鞍ノ腹帶托革、カハヒカヘカハタケカケ鞆ヘラオビダケカケ、ヒキ靴ヒキ革控カハヒカヘカハタケカケ革托革等ヲ縫著クルニ用ウ

第九十八 二本針縫
第一法 革具ノ表面ヲ右ニ向ケテ縫臺ニ挾ミ先ツ針ヲ第二縫目ニ通シ絲ヲ左右同長ニシ次ニ第二十二圖ノ如ク左ヨリ始メ針ヲ兩方ヨリ通シテ縫フモノトス
革ヲ平ニツキアハ繼合ス場合ニハ針尖ヲ少シク曲ケ掬錐ニテ縫目ヲ穿チツツ前項ニ準ヒテ縫フモノトス之ヲ掬縫ト謂フ

第二法 針ヲ用ウル能ハサルカ如キ場所ヲ縫フニハ絲ノ端ヲ軟松瀝^{チヤン}及蠟ニテ塗り固メ其ノ一端ヲ縫目ノ外方ヨリ内方ニ通シ鞍工鉗ニテ引抜キ絲ヲ左右同長ニシ次ニ外方ノ絲ノ端ヲ次ノ縫目ノ外方ヨリ内方ニ通シ鞍工鉗ニテ引抜キ其ノ擦ノ間ニ内方ノ絲ノ端ヲ挿込ミ然ル後外方ノ絲ヲ少シク引戻シテ内方ノ絲ヲ外方ニ引出シ其ノ端ヲ擦ノ間ヨリ拔取り左右ノ絲ヲ引縮メ逐次此ノ如クシテ縫フモノトス之ヲ呼出縫ト謂ヒ砲兵輓馬具袴革ノ壓扣ヲ縫著クルニ用ウ

第九十九

革ヲ縫フニ方リ注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

一 縫絲ニハ一様ニ軟松瀝ヲ塗り其ノ上ニ蠟ヲ引キテ用ウヘ

シ

二 縫絲ハ革面ト平カナラシムル如ク十分引縮ムヘシ又八番革「^クミシン」絲ヲ用ウルトキハ豫メ縫目ノ線ヲ畫線篋ニテ少シク^ク凹マシ置クヲ可トス

三 縫絲ノ端末ハ縫終ニ於テ通常二、三孔縫歸リ其ノ端ヲ裏面ニ拔出シテ切ルモノトス之ヲ縫返ト謂フ又縫始ニ於テモ通常一、二孔先ヨリ縫歸ルモノトス

ロ 麻布ノ縫綴法（第二十三圖、第二十四圖、

第二十五圖）

第百

麻布ヲ縫フニハ目打ヲ爲スコトナク小圓錐（一本針

縫ノトキハ麻布ニ革ヲ縫著クル場合ノ外通常用キスニテ縫目ヲ開ケツツ縫フモノトス

第百一 一本針縫

第一法 革ノ一本針縫第二法ト同要領ニシテ修理ノ爲麻布ヲ繼合ス場合或ハ鞍褥、极褥ヲ綴著クル場合(第二十三圖)等ニ用ウ時トシテハ革ノ一本針縫第一法ト同要領ニ依リ縫フコトアリ但シ此ノ場合ニハ縫歸ラサルモノトス

第二法 膝縫カガリスヒ

其ノ一 第二十四圖ノ如ク縁ヲ折返シ縫絲ヲ成ルヘク表面ニ現ハササル如ク縫フモノニシテ修理ノ爲繼合セタル麻

布ノ縁ヲ縫著クル等ニ用ウ

其ノ二 第二十五圖ノ如ク二枚ノ麻布ノ縁ヲ合セ針ヲ其ノ間ヨリ表面ニ通シ次ニ他ノ面ヨリ通シテ環ヲ作り針ヲ之ニ通シテ引締メ逐次此ノ如クシテ縫フモノニシテ麥袋ノ紐孔ノ縁等ヲ縫フニ用ウ

第百二 二本針縫

革ノ二本針縫第一法ニ同シ但シ菱錐ノ代ニ小圓錐ヲ用ウヘシ

第百三 麻布ヲ縫フニ方リ注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

一 麻布ニ革ヲ縫著クル場合若ハ水囊ノ如キ水ヲ取扱フモノヲ縫フニハ縫絲ニ軟松瀝及蠟ヲ塗り其ノ他ノ場合ニ在リテ

ハ麻布ノ色ニ應シ縫絲ヲ茶褐色ニ染メ若ハ生地ノ儘用ウヘシ

二 鞍褥及扱褥ノ綴絲ニハ蠟ノミヲ塗ルヘシ

三 縫絲ノ端末ハ縫始ニ在リテハ通常結ヒテ留メ縫終ニ在リテハ二、三孔縫返シ或ハ結ヒテ留メ絲ヲ裏面ニ抜キテ切ルモノトス

八 仕上法

第四百四

革具ニ形ヲ與ヘ又ハ作業間ニ生シタル歪ヲ正スコトヲ仕上ヲ爲スト謂ヒ概ネ左ノ方法ニ依ル

一 一般ニ縫著部ハ截革盤又ハ木口盤等ノ上ニ於テ小仕上鉋

ニテ輕ク打チ縫絲ヲ壓著ケ要スレハ断面或ハ稜角ヲ削リ布海苔液ニテ糊著ス

二 壓扣類ハ壓扣木型ヲ劍差、彈藥盒類ハ適宜ノ木型ヲ挿込ミ小仕上鉋ニテ形ヲ與ヘ或ハ之ヲ正シ同時ニ接際部ヲ密著セシム但シ革質堅キモノハ先ツ其ノ部ヲ僅ニ濕シ置クヲ可トス

三 以上ノ作業ヲ終ラハ總テ布海苔液ヲ薄ク塗り清潔ナル布片ニテ拭ヒ要スレハ最後ニ畫線鋸ニテ革ノ縁ニ線ヲ附クルモノトス

九 染色法

イ 麻布ノ茶褐色染

第百五 先ツ麻布ヲ約ネ一時間温湯中ニ浸シタル後清水ニテ洗ヒ水滴ヲ去リ其ノ一端ヨリ徐カニ染色液中ニ浸シ數回翻轉シテ良ク染マリタル後乾カシ次ニ止色液中ニ入レ約ネ十分間浸シテ再ヒ乾カシ更ニ清水ニテ洗ヒタル後乾カスモノトス

第百六

染色液及止色液ノ調製法左ノ如シ

- 一 染色液 「タンニンエキス」(檫皮製) 一升ニ付約ネ八升ノ割合ニテ水ヲ加ヘ能ク攪拌シ約ネ六十度ニ温ムルモノトス

「タンニンエキス」ノ代ニ檫皮ヲ用ウルトキハ先ツ之ヲ細

末ニ碎キ三盃ニ付約ネ二斗ノ割合ニテ水ヲ加ヘ鍋ニ入レ一時間以上煮出シ適度ノ濃サヲ得ルニ至レハ之ヲ荒キ布袋ニテ濾スヘシ

注意 染色液ノ取扱ニハ鐵製ノ容器ヲ避クヘシ

- 二 止色液 左ノ配合ニ依リ先ツ甲、乙兩液ヲ各別ニ製シ次ニ乙液ヲ甲液中ニ攪拌シツツ注キ更ニ水約ネ一斗三升ヲ加フヘシ

甲液		區分	名	稱	數	量
水	明		礬			一盃
						六升

乙液	
炭酸曹達	百二十瓦
水	六合

ロ 麻ノ茶褐色染

第百七 麻ヲ緩ク小束コダマト爲シ染色液中ニ浸シ數回翻轉シテ良ク染メタル後乾カスモノトス

第百八 染色液ノ調製法ハ第百六ニ同シ但シ「タンニンエキス」一升ニ對シ水約ネ一斗五升ヲ加ヘ又槲皮ヲ用ウルトキハ稍淡ク煮出スモノトス

十 綯網法ツナナヒカタ

第百九 網ヲ綯ツナフニハ先ツ染色シタル麻ヲ小束ノ儘揉ミ軟

ラケ次ニ所要ノ麻ヲ取り根元ノ一端ヲ支ヘ他端ヲ等分シテ二子ト爲シ兩掌ニテ撚ツナリ(右掌ヲ前方ニ進ムルトキハ右撚網、體ノ方ニ退クルトキハ左撚網トナル)ツツ綯ヒ約ネ三十廻ノ長サニ達スレハ更ニ二、三回撚ヲ掛ケ逐次此ノ如クシテ綯フモノトス而シテ新ニ麻ヲ繼足スニハ根元ヲ僅ニ折返シ一子ノ撚ヲ緩メ具ノ中心ニ撚込ムモノトス

三子撚網ニ在リテハ前項ニ準ヒテ先ツ約ネ五十廻乃至一米ノ二子撚ノモノヲ綯ヒ更ニ一子ヲ撚加フルモノトス

網ノ端末ハ其ノ太サニ應シ適度ニ一子ノ一部ヲ割キテ右撚ニシ之ヲ以テ全體ヲ二卷シテ引締メ其ノ端ヲ撚ノ間ニ通スモノトス

綯ヒ終レハ火ニテ焙^{アテ}リ外面ニ毛立チタル纖維ヲ除去スルモノトス

注意

一 麻綱ハ一般ニ左捻トス但シ野繫頭絡、腹帶等ノ横編絲ハ中心右捻トス

二 腹帶縦紐ノ如ク數條ヨリ成ルモノハ左捻ト右捻トヲ交互

ニ組合スモノトス

三 麻綱ハ其ノ捻合セニ不同ヲ生セス又甚シク堅ク捻ルヘカ

ラス

四 麻ヲ繼足スニハ各子共同シ位置ニテ爲ササル様ニスヘシ

五 火ニテ焙ルニハ各部ニ互リテ速ニ行フヘシ否サレハ往往

綱ヲ燒クコトアリ

十一 塗抹法、剝脫法

イ 上塗塗料及下塗塗料ノ塗抹法

第一百十 上塗塗料ハ通常少クモ二回塗重ヌルモノトス又鐵

部ニ上塗塗料ヲ塗ルニハ先ツ下塗塗料ヲ施シ其ノ乾クヲ待チテ

之ヲ行フモノトス

注意

一 塗抹ニ先チ塵埃、泥土等ヲ拭ヒ又油垢ハ「テレピン」油若

ハ揮發油ニテ拭去ルヘシ

- 二 鐵部ニ錆ヲ生シタルモノハ能ク磨キテ之ヲ除クヘシ否サ
レハ塗料剝ケ易ク又防錆ノ用ヲ爲ササルモノトス
- 三 木部ハ十分乾キタル後塗ルヘシ若木部ニ油氣ヲ帶ヒ十分
乾カサルトキハ先ツ薄ク「ベルニー」若ハ「コーバルワニ
ス」ヲ塗ルヲ可トス
- 四 塗抹ノ順序ハ一般ニ内方、下方等作業困難ナル箇所ヨリ
始ムルヲ可トス
- 五 塗料ハ素地^{キヂ}ヲ被ヒ得ルヲ度トシ一樣ニ成ルヘク薄ク塗ル
ヲ可トス
- 六 刷毛ニ附クル塗料ハ多キニ過キサルヲ可トス

- 七 刷毛ハ成ルヘク傾クルコトナク同シ速サニテ輕ク用キ最
後ニハ同シ方向ニノミ用ウヘシ
- 八 塗料ノ乾カサル前ニ他物ヲ觸レシムヘカラス
- 九 下塗ノ十分乾カサルモノニ上塗ヲ爲スヘカラス又塗落シ
ナキ様注意スヘシ
- 下塗乾キタルトキハ布鑑ニテ擦リタル後上塗ヲ爲スヲ可ト
ス
- 十 刷毛ハ使用後直ニ「テレピン」油等ニテ洗ヒ置クヘシ若
數日間連續用ウル場合ニハ水中ニ浸シ置クモ可ナリ
- ロ 上塗塗料及下塗塗料ノ剝脫法

第百十一 塗料ノ塗換ハ通常全部ニ對シテ行フモノナルモ時トシテ補修塗ニ止ムルコトアリ
 鐵部ノ塗料ヲ塗換フルニハ通常舊塗料ヲ剝カシタル後新ニ塗料ヲ塗ルモノトス

木部ノ塗料ヲ塗換フルニハ通常舊塗料ヲ剝カスコトナク表面ヲ布鑑等ニテ磨キ其ノ上ニ塗重ヌルモノトス

第百十二 鐵部ノ塗料ヲ剝カスニハ通常左ノ方法ニ依ル

一 鐵籠^{カナベラ}ヲ用ウル場合 兵器ヲ傷ツケサル如ク鐵籠ニテ塗料ヲ搔落シタル後布鑑ニテ磨キ雜巾ノ類ニテ拭フモノトス但シ補修塗等ノ爲一部ヲ剝カストキハ舊塗料ノ端ヲ斜ニ擦落

スヘシ

二 藥液ヲ用ウル場合 藥液（揮發油「テレピン」油等）ヲ雜

巾ニ浸シテ之ヲ塗リ塗料ノ軟ラカクナルヲ待チ束藁又ハ鐵籠等ニテ剝カシタル後能ク拭フモノトス又苛性曹達（苛性曹達液ニ常用礦油及鋸屑ヲ加フ）ヲ用ウルコトアリ然ルトキハ剝カシタル後水ニテ十分洗ヒ要スレハ更ニ揮發油ヲ以テ拭フヘシ

假漆ノ塗抹及剝脫法

第百十三 假漆ノ塗抹法ハ晴レタル日ヲ選ヒ上塗塗料ノ塗抹法ニ準ヒ通常二、三回塗重ヌルモノトス

第百十四 假漆ヲ剝カスニハ通常「テレピン」油（「ベル
 ニー」ニ對シテハ酒精）ヲ雜巾ニ浸シテ之ヲ塗り假漆ノ軟ラカ
 クナルヲ待チ雜巾又ハ束藁等ニテ剝カシタル後能ク拭フモノト
 ス

第二章 修理作業

一 通 則（第二十六圖、第二十七圖）

第百十五 軍隊ニ於テ行フ修理ハ兵器取扱規則ニ依リ其
 ノ制限ヲ受クルモノトス

第百十六 一般ニ修理ハ制式寸度ニ合スルヲ勉メ妄ニ之

ヲ變更スルヲ許サス又材料ハ成ルヘク修理品ト同質ノモノヲ用
 ウヘシ

第百十七 工卒ハ工長ノ指示ニ從ヒ修理ニ任スヘキモノ

ニシテ所要ノ工具、材料ヲ準備シタル後作業ニ従事ス而シテ一
 般ニ注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

- 一 革具ノ甚シク汚レタルモノハ先ツ水又ハ軟石^{ナシセキケンスイ}鹼水（水石
 鹼トモ謂フ）ニテ洗ヒ清潔ニスヘシ
- 二 革質硬クナリタルモノハ目打ノ爲龜裂ヲ生シ易キヲ以テ
 複合脂又ハ水ニテ軟ラカナラシムヘシ
- 三 革ヲ繼合ス場合ニハ革條類ニ在リテハ其ノ革幅ノ一倍半

二 乃至二倍ノ長サヲ重合スモノトス而シテ其ノ部ハ第二十六圖(イ)ノ如ク交互ニ表面及裏面ヲ斜ニ削リ端末ニ於テ革ノ厚サノ約ネ半分ト爲シ磐石糊ニテ貼附ケ兩側(幅廣キ革ニ在リテハ兩側及中央)ヲ縫著クヘシ但シ輓革、平長革ヘイチャウカクノ如ク數枚ノ革ヲ重合スモノニ在リテハ第二十六圖(ロ)ノ如ク百耗乃至百五十耗ヲ重合セ其ノ内部ノ革ハ端末ノ厚ミヲ殘スコトナク斜ニ削リ平ニ繼合スモノトス

四 諸托革及小革片ノ破損ハ全部ヲ取換フルヲ可トス

五 革條類ヲ新調スルニ方リ兵器制式圖ニ圖示シアラサル細部ノ寸度ハ革條寸度表(附表)ニ依ルヘシ又簪環ヲ附スル

折曲部オリマツハ第二十七圖ノ如ク其ノ端末ヲ斜ニ削リ隅角ハ僅ニ截去ルモノトス

六 甚シク伸ヒタル革條類ハ全長ヲ制式寸度ニ合ス如ク縫著部若ハ簪環附著部ニ於テ修正スルヲ可トス但シ此ノ修理ヲ行ヒ得ル程度ニ至ラスシテ孔ヲ増ス場合ニハ左ノ規定ニ依リ行フモノトス

イ 新ニ孔ヲ穿ツニハ他ノ孔ト同距離ニ於テスヘシ

ロ 孔數一個ヲ有スルモノニ孔ヲ増ス場合ニ在リテハ其ノ革幅ト同距離ニ於テスヘシ

ハ 孔ノ形狀ハ革條寸度表ニ依ルヘシ

- ニ 縫著部若ハ簪環附著部ニ接シテ孔ヲ穿ツヘカラス
ホ 縫糸ノ位置ニ孔ヲ穿ツヘカラス
- 七 一部ノ縫直ヲ爲スニハ堅固ナル縫目ニ前後約ネ三目ヲ掛
ケテ縫フヘシ但シ全體ノ長サ短キトキハ悉ク縫直スヲ可トス
- 八 縫糸ハ各條毎ニ縫返ヲ行フヲ常トス假令數條相接シテ縫
フトキト雖續ケテ縫フヘカラス
- 九 麻製品ノ染色甚シク褪メタルモノハ更ニ左ノ方法ニ依リ
染色ヲ爲スヘシ
- 十 染色スヘキモノハ豫メ洗濯石鹼ニテ洗ヒ乾カシ置ク
要ス但シ革部ヲ濡ラササルコトニ注意スヘシ又褥ニ

- 在リテハ豫メ填毛若ハ初殻ヲ取出シ置クヘシ
- 馬糧囊、麥袋等ノ如ク革部ヲ有セサルモノハ其ノ全
部ヲ染色液中ニ浸スヘシ
- 鞍褥布及極褥布等ノ如ク革ヲ附著シアルモノハ革部
ニ觸レサル如ク刷毛ニテ染色液ヲ塗ルヘシ
- 修理ヲ行ヒタルトキハ其ノ検査ヲ爲スヘシ
- 修理ヲ終リタルトキハ速ニ所要ノ手入ヲ行フヘシ
- 三十年式乘馬具
- 乘鞍(第二十八圖、第二十九圖)
- 第百十八 鞍ノ騎坐革、鞆革及連接革縫著部ノ綻又ハ破損

セルモノハ先ツ鞍囊駐銀ヲ脱シ鞍張横帶ヨリ腹帶托革ヲ解キ前橋居木及後橋ノ鈺竝韓駐螺ヲ脱シテ鞍被ヲ鞍骨ヨリ離脱シタル後破損部ノ縫糸ヲ解キ綻ニ在リテハ新ニ四番革「ミシン」糸ニテ縫著ケ破損セルモノニ在リテハ其ノ部ヲ除キ第二十八圖(イ)及(ロ)ノ如ク韓革又ハ騎坐革ニ當革(當繼又ハ平繼)ヲ爲シ(平繼ノトキハ裏面ヨリ掬縫ヲ爲ス)其ノ端ヲ内方ニ插込ミ四番革「ミシン」糸ニテ縫著ケ鞍被ヲ鞍骨ニ釘著シ鞍張横帶ニ腹帶托革ヲ六番革「ミシン」糸ニテ縫著ケ最後ニ韓駐螺及鞍囊駐銀ヲ裝著スヘシ

破損部長キトキハ第二十八圖(ロ)ノ如ク連接革ニ沿ヒ一體ニ當

革ヲ爲シ又連接革ノ破損セルモノハ全部ヲ新革(長サ五百二十五耗厚サ二耗ノ褐色多脂牛革)ト取換ヘテ縫著ケ水ニテ濕シ小仕上錠ニテ打チテ連接革、騎坐革及韓革ノ外面ヲ平ニシタル後前項ニ依リ鞍被ヲ裝著スルモノトス

第百十九 騎坐ノ凹陷シタルモノハ先ツ鞍被ヲ離脱シタル後前橋ニ於ケル騎坐布ノ釘著ヲ脱シ鞍張縦帶ヲ緊張シ要スレハ更ニ後橋ニ於ケル騎坐布ノ釘著ヲ脱シ填毛ヲ補ヒタル後鞍被ヲ裝著スヘシ

第百二十 前橋及居木ノ衣布ノ破損セルモノハ破損部ヲ除キ新ニ麻布ヲ漆糊ニテ貼附クヘシ

第二百二十一 鞍褥裏布ノ破損セルモノハ先ツ其ノ部ヲ圓ク截去リ第二十九圖(イ)ノ如ク内方ヨリ麻布ヲ當テ白玉絲若ハ藤縫革「ミシン」絲ニテ周ヲマハリカガリスヒ藤縫スヘシ但シ縁革ニ近キ部分ニ在リテハ先ツ縁革ヲ解キ一側ハ返縫ニテ縫ヒ他側ハ縁革ノ内方ニ縫込ムモノトス

第二百二十二 鞍褥縁革ノ破損セルモノハ破損部ヲ除キ第二十九圖(ロ)ノ如ク新ニ縁革(厚サ一耗)ヲ當テ兩端約ネ二十耗ヲ舊革ニ重ネ四番革「ミシン」絲ニテ縫著クヘシ

第二百二十三 鞍褥填毛ノ甚シク壓縮ラレタルモノハ填毛全部ヲ取出シ(要スレハ之ヲ洗ヒ)日ニ乾シ新ニ鹿毛ヲ補ヒ防蟲

劑ヲ施シ之ヲ填メ八番革「ミシン」絲ニテ綴著クヘシ但シ甚シカラサルモノハ填毛ヲ取出スコトナク鹿毛ヲ補ヒテ修正スルモノトス

第二百二十四 項革ウナジカハエカハ枝革ノ分レ目裂ケタルモノハ其ノ上部ヨリ截去リ新ニ枝革ヲ造リ圖ノ如ク四番革「ミシン」絲ニテ縫著クヘシ

第二百二十五 對控革附近ノ破損セルモノハ其ノ部ヲ截去リ對控革(要スレハ新調)ニ準ヒテ縫目ヲ目打シ之ヲ簪銀ト共

ニ四番革「ミシン」糸ニテ縫著クヘシ但シ之ハ爲輕ノ全長ニ不足ヲ生スルトキハ新ニ革ヲ繼足スモノトスルヘシ其ノ補マシテ

ニ 燈 革 (第三十一圖)

第百二十六 燈ニ接スル屈曲部ノ破損セルモノハ其ノ部ノ前後約ネ百耗ヲ截去リ圖ノ如ク六番革「ミシン」糸ニテ良質ノ革ヲ繼足スヘシ

ホ 腹 帶 (第三十圖)

第百二十七 縦紐ノ擦切^{スリキ}レタルモノハ其ノ二本若ハ三本迄ハ之ヲ横編糸ヨリ十耗附近ニテ切斷シ置クヘシ但シ切斷前縫糸ニテ其ノ根元ヲ堅ク縛リ横編糸ニ掛ケテ縫著ク置クヲ可ト

ス、破、損、部、ニ、補、修、ス、内、式、ノ、當、テ、修、修、ス、然、ル、ト、修、修、手、ニ、マ、シ、テ、
横編糸ノ擦切レタルモノハ舊糸ヲ解キ徑一耗ノ麻綱ニテ編換ワ
ヘシ

靴 囊 (第三十二圖)

第百二十八 綠革ノ破損セルモノハ鞍褥綠革ノ要領ニ準

ヒテ修理スヘシ

第百二十九 蓋革ト蓋側革又ハ囊革ト側革トノ隅角部ノ

破損セルモノハ其ノ部ヲ^{トキハナ}解離シ破損部ヲ截去リ圖ノ如ク當革ヲ爲シ四番革「ミシン」糸ニテ縫著ケ當革ノ端ハ連綴革ノ間ニ挿込ミ四番革「ミシン」糸ニテ縫著クヘシ

鞍下毛布 (第三十三圖)

第二百二十 鞍下毛布ノ破損セルモノハ其ノ部ヲ圓ク截去
リ次ニ同質ノ毛布ヲ同シ形ニ截チ (イ) 圖ノ如ク孰レモ其ノ截口
ニ沿ヒ約ネ五耗内方ノ所ニ一條ノ縫ヲ施シタル後之ヲ箆合セ擲
縫ノ要領ニ依リ表面ヨリ前ノ縫絲ニ掛ケテ縫著クヘシ
又單ニ裂ケタルモノハ (ロ) 圖ノ如ク之ヲ繼合セ前項ニ準ヒテ其
ノ周ニ一條ノ縫ヲ施シテ縫著クヘシ

チ 膝 覆 (第三十四圖)

第二百二十一 布部ノ破損セルモノハ其ノ部ヲ圓ク截去リ
圖ノ如ク新ニ麻布ヲ内方ヨリ當テテ縫著ケ然ル後刷毛ニテ裏亞

麻仁油ヲ塗リ蔭乾スヘシ

旅 囊 (第三十五圖)

第二百二十二 布部ノ破損セルモノハ其ノ部ヲ圓ク截去リ
甲及乙圖ノ如ク内方ヨリ麻布ヲ當テテ縫著クヘシ但シ小ナル破
損ハ單ニ革「ミシン」絲ニテ膝リ置クモ可ナリ

第二百二十三 縁布ノ破損セルモノハ其ノ部ヲ除キ丙圖 (ホ)

ノ如ク新ニ麻帶地ヲ繼足シ次ニ丙圖 (ヘ) ノ如ク縫著クヘシ

野 繫 韁 (第三十六圖、第三十七圖)

第二百二十四 蛇口及其ノ附近ノ破損セルモノハ蛇口ヨリ

約ネ百耗ノ長サヲ解キ先ツ第三十六圖甲ノ如ク其ノ二子ニ麻ヲ

繼足シテ絢ヒ次ニ之ヲ分チテ三子燃ト爲シ蛇口ヲ造リ終レハ之ヲ纏メテ一子ト爲シ前ノ二子燃ニ絢合セ且最初殘シタル一子ヲモ絢ヒ第三十六圖乙ノ如ク互ニ結合セタル後其ノ餘端ヲ適宜細小ニシ各他ノ一子ニ數回卷添ヘタル後第三十六圖丙ノ如ク端ヲ他ノ二子ノ間ニ通シテ切斷スルモノトス

第二百二十五 中央部ヨリ切斷セルモノハ各端ヨリ約ネ百耗ノ長サヲ解キ先ツ第三十七圖甲ノ如ク其ノ二子ニ麻ヲ繼足シテ絢合セ次ニ第三十七圖乙ノ如ク互ニ其ノ一子ヲ結合セ置キ他ノ一子ノ一方ヲ解^{トキモト}戻シツツ更ニ他方ノモノニテ約ネ五十耗絢合セタル後結合セ次ニ第三十七圖丙ノ如ク殘ノ各一子ニ麻ヲ繼足

シテ三子ニ絢合セタル後第一回ノ結目ヨリ約ネ五十耗ヲ隔テテ結合セ最後ニ前條ノ要領ニ依リ各結ノ餘端ヲ燃ノ間ニ絢込ミテ切斷スルモノトス

ル 野繫頭絡 (第三十八圖)

第二百二十六 ^{ウナジヒモ}項紐及^{ヒタヒヒモ}額紐ノ編絲ノ擦切レタルモノハ之ヲ解キ新ニ麻綱ヲ以テ編換フヘシ又單ニ緩ミタルモノハ之ヲ解離シ十分引締メテ編換スルモノトス

第二百二十七 ^{オトガヒヒモ}頤紐ノ破損セルモノハ其ノ部ヲ解キ麻ヲ繼足シテ三子燃ト爲シ或ハ全部ヲ絢換ヘテ甲圖ノ如ク圓形簪銀ニ取附ケタル後繼合セ(繼合セ方ヲ第二百三十五ノ要領ニ依ル)

次ニ左ノ方法ニ依リ結合スルモノトス
 頭絡ノ項紐ヲ下ニ鼻紐ヲ前ニ向ケテ置キ先ツ乙圖ノ如ク(イ)ノ
 環ヲ造リ次ニ丙圖ノ如ク(ロ)ノ部ヲ鼻紐ノ方ニ曲ケテ(ハ)ノ環
 ヲ造リタル後之ヲ丁圖ノ如ク(ハ)ノ環及(イ)ノ環ニ通シテ引締
 メ戊圖ノ如ク結合ス

二百二十三 砲兵鞍馬具

イ 首革ノビカハ(第三十九圖)

第二百二十八 體革ノ擔鉤ト觸接スル部ノ破損セルモノハ
 破損部ヨリ稍廣キ革ヲ外方ヨリ當テ圖ノ如ク四番革「ミシン」
 絲ニテ縫著クヘシ

二百四十四ロ

緩喉革クワンコウカク(第四十圖第四十一圖)

第二百二十九

瓢形環ヘウアイクワン 附著革ノ破損セルモノハ全部ヲ取換

第四十圖ノ如ク八番革「ミシン」絲ニテ縫著クヘシ

第二百四十

載革銅綴釘部附近ノ破損セルモノハ銅綴釘、簪

環革及橢圓形環ヲ除キ破損部ヲ截去リ新ニ二枚ノ革ニ反蹄鐵形

環クワン及橢圓形環ヲ装シ第四十一圖ノ如ク之ヲ重ネテ簪環革ト共ニ

其ノ位置ニ當テ八番革「ミシン」絲ニテ縫著ケタル後新ニ綴釘

ヲ綴著スヘシ

ハ 平長革(第四十二圖)

第二百四十一 擔鉤觸接部ノ破損セルモノハ其ノ部ヲ截去

リ圖ノ如ク新ニ革ヲ繼足シ八番革「ミシン」絲ニテ縫著クヘシ

ニ 靴 革 (第四十三圖)

第四百四十一 鈎環縫著部ノ破損セルモノハ其ノ部ヲ截去
リ良質ノ革二枚ヲ鈎環ニ通シテ圖ノ如ク繼足シ八番革「ミシン」
絲ニテ縫著クヘシ

第四百四十二 圓形簷環縫著部ノ破損セルモノハ其ノ部ヲ

截去リ圖ノ如ク當革ヲ爲シ八番革「ミシン」絲ニテ縫著クヘシ

第四百四十四 三十二年式軍刀 (第四十五圖)

刀帶ノ梯形環縫著部ノ破損セルモノハ其ノ

縫絲ヲ解キ破損部ヲ截去リ圖ノ如ク當革ヲ爲シ舊縫目ニ準ヒテ

縫目ヲ目打シ四番革「ミシン」絲ニテ縫著クヘシ

第四百四十五 鈎革ノ鈎釦ツリカハ カギボタン附近ノ破損セルモノハ簷環縫著

部ヨリ約ネ二百六十耗ノ長サヲ截去リ四番革「ミシン」絲ニテ

新ニ革ヲ繼足シタル後簷環ヲ縫著クヘシ

五 三十年式銃劍 (第四十六圖、第四十七圖、第四

第十八圖)

第四百四十六 劍差ノ表革ヲ取換フルニハ豫メ之ヲ解離シ

先ツ取換フヘキ表革ヲ第四十六圖ノ如ク造リ舊表革ニ準ヒテ縫

目ヲ目打シ次ニ之ニ舊細革條ヲ簷環ト共ニ四番革「ミシン」絲

ニテ縫著ケタル後表革ヲ體ニ縫著ケ新ニ綴釘ヲ綴著スルモノトス

第四百四十七

細革條ヲ取換フルニハ豫メ表革ノ一側ヲ解

離シ細革條ヲ簪銀ト共ニ表革ヨリ除キ先ツ取換フヘキ細革條ヲ第四十七圖ノ如ク造リ舊細革條ニ準ヒテ縫目ヲ目打シ次ニ之ヲ簪銀ト共ニ四番革「ミシン」絲ニテ表革ニ縫著ケタル後更ニ表革ヲ體ニ縫著ケ新ニ綴釘ヲ綴著スルモノトス

第四百四十八

劍差ノ體中央部ニ龜裂ヲ生シタルモノハ先

ツ綴釘ヲ除キ體及表革ノ縫絲ヲ解キ破損部ヲ截去リ新ニ革ヲ貼附ケ體ニ準ヒテ截チ縫目ヲ目打シ表革ト共ニ第四十八圖ノ如ク

四番革「ミシン」絲ニテ縫著ケ新ニ綴釘ヲ綴著スヘシ

四百四十七
四百四十八
四百四十九
四百五十

第四篇 圖面ノ見解

第一章 圖面及線

第四百十九 圖面ヲ以テ物體ヲ現ハスニハ通常全體圖及

分解圖ヲ以テス但シ全體圖ニテ明瞭ナルモノハ分解圖ヲ略スル

コトアリ

構造ヲ明瞭ナラシムル爲全體圖若ハ分解圖ヲ更ニ前面圖(正面


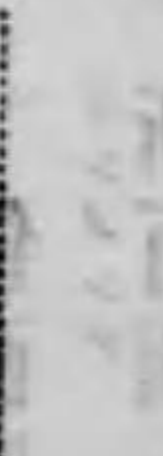

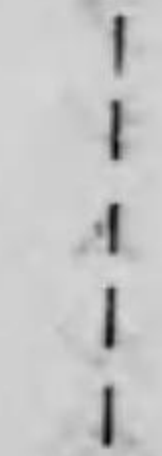
ヨリ視タルモノ)側面圖(側面ヨリ視タルモノ)平面圖(上面ヨ

リ視タルモノ)斷面圖(某部ヲ切リテ現ハレタル部分ヲ示スモ

ノ)等ニ分チテ現ハスコトアリ

第一百五十

圖面ニ用ウル線ハ概ネ左ノ如シ

- 一 實線  物體ノ現ハレタル部分ヲ畫クニ用ウ
- 二 點線  物體ノ隠レタル部分ヲ示スニ用ウ
- 三 虛線  寸度、註記等ヲ記入スルニ用ウ
- 四 交點線  物體ノ中心線若ハ截斷部ヲ示スニ用ウ

第二章 註記

第一百五十一 圖面ニハ通常名稱、品質、寸度、重量、梯尺等必要ナル事項ヲ記シアルモノトス

梯尺トハ圖ト實物ノ大サトノ割合ヲ示スモノニシテ(+)、(2)、(1/2)、(3)等ヲ用ウ(+)トハ圖ノ寸度實物ト同一ナルコトヲ示シ(2)トハ圖

ノ寸度實物ノ二倍ナルコトヲ示シ(1/2)トハ圖ノ寸度實物ノ半ハナルコトヲ示ス其ノ他之ニ準フ

第一百五十一 寸度ハ耗ヲ單位トシテ記入スルヲ例トス例々「1257」「2730.5」等ノ如シ但シ時トシテ「一米二七五」「一米七三〇、五」等ト記スルコトアリ

第一百五十二 重量ハ 庇 ^{キログラム} ヲ單位トシ記入スルヲ例トス然レトモ少量ノ場合ニハ瓦 ^{グラム} ヲ單位トス例ヘハ「五八瓦」「六瓦三四〇」「五〇瓦」等ノ如シ

第三章 見解上ノ注意 (第四十九圖)

第一百五十四 圖面ニ依リ物體ヲ造ルニハ綿密ニ研究シ細

部ニ至ル迄其ノ結構ヲ會得セサルヘカラス若見解ヲ誤リ或ハ其ノ會得不十分ナルトキハ徒ニ材料ヲ費スノミナラス作業ヲ復行セサルヘカラサルニ至ルコトアリ

第百五十五 兵器ノ構造ヲ明瞭ナラシムル爲圖面ヲ用ウ例ヘハ第四十九圖ノ如シ

第五篇 兵器保存法

第一章 手入

第百五十六 手入ノ要旨ハ塵埃、汚垢等ヲ除キ且發錆、磨損及變質等ヲ豫防シ以テ兵器ノ保存ヲ確實ナラシムルニ在リ

一 金屬部

第百五十七 鐵類ハ一般ニ發錆シ易ク又摩擦スル部分ハ自然ニ磨滅スルモノナルヲ以テ適時脂油ヲ施ササルヘカラス
第百五十八 錆染若ハ染烘セル鐵部ニ泥土附著シタルトキハ先ツ濕リタル布片ヲ以テ摩擦スルコトナク之ヲ拭ヒ次ヲ乾

キタル布片ニテ輕ク拭ヒタル後含油布片ニテ薄ク塗油スヘシ
 白色ヲ呈スル鐵部ヲ強ク磨キテ殊更ニ光ヲ發セシムヘカラス又
 此ノ部ニハ常ニ油ヲ薄ク施スヘシ
 鍍金若ハ塗料ヲ施シタル部分ハ強ク摩擦スヘカラス又此ノ部ニ
 ハ塗油セサルモノトス
 鍍染、染烘、鍍金若ハ塗料ノ剝ケタル部分ハ白色部ニ準ヒテ塗
 油スヘシ

第一百五十九 銅、黃銅、青銅及礬素等ノ部分ハ布片ニテ

拭フニ止メ摩擦部ノ外塗油セサルモノトス

第一百六十 鐵部ノ鍍ヲ除クニハ其ノ部ニ石油或ハ揮發油

ヲ注キ暫時ノ後木片、木賊トクサ又ハ絨片ラシヤキレ等ヲ以テ徐カニ磨クヘシ但
 シ寸度ノ精密ヲ要セサルモノニ在リテハ布鑢、磨粉等ヲ用ウル
 コトヲ得

鐵部ニ附著セル舊油、污垢等ニシテ布片ニテ拭去リ難キモノハ
 刷毛又ハ布片ニ揮發油或ハ「テレピン」油ヲ含マシメテ拭フヘ
 シ

石油、揮發油、「テレピン」油等ヲ用キタルトキハ乾キタル布片
 ニテ十分此等ノ油氣ヲ拭去リタル後直ニ塗油スヘシ

第一百六十一 格納品ノ鐵部（鍍金及塗料ヲ施セル部ヲ除
 ク）ハ一般ニ格納用礦油ヲ塗ルモノトス而シテ之ヲ塗ルニハ左

ノ要領ニ依ルヘシ

- 一 塗油ニハ通常刷毛又ハ毛筆ヲ用ウ但シ他ノ油ニ使用シタルモノヲ其ノ儘用ウヘカラス
- 二 此ソ油ハ固マリ易キヲ以テ平等ニ塗ルコトニ注意スヘシ
- 三 塗油ヲ爲ストキハ手套ヲ用キ手ヲ直接ニ鐵部ニ觸レシムヘカラス

二 革具

第百六十一 革具ハ通常自然ニ硬クナリ易キヲ以テ適時

脂油ヲ施ササルヘカラス

第百六十二 革具ハ其ノ革質及用途ニ應シ塗油ノ量ヲ異

ニスルモ一般ニ左ノ要領ニ依ルヘシ

- 一 褐色堅牛革ヨリ成ル部分ハ塗油ノ量ヲ少クシ以テ變形ヲ防クヘシ
- 二 褐色多脂牛革若ハ褐色牝牛革ヨリ成ル部分ハ稍多ク油ヲ施スヘシ(給油適度ナルモノハ之ヲ指大ニ曲クルモ龜裂ヲ生セス一時變色スルモ原形ニ復スレハ革色モ亦舊ニ復スルモノトス)然レトモ多キニ過クルトキハ革質著ク柔軟トナリ爲ニ伸長或ハ變形スルヲ以テ注意セサルヘカラス
- 三 黄鞞革、白鞞革及「セーム」革等ヨリ成ル部分ハ塗油セサルモノトス

第百六十四

革具ニ脂油ヲ施スニハ主トシテ表面ヨリ僅ニ油ヲ含マシメタル布片ヲ以テ平等ニ數回塗り其ノ吸收スルヲ待チ布片ニテ拭込ムヘシ但シ常用品ニシテ馬體若ハ被服ニ接スル部分ハ其ノ反對側ヨリ塗り若反對側ヨリ塗ルコト能ハサル部分ハ脂油ノ量ヲ少クスヘシ

固マリタル複合脂ハ湯煎鍋ニテ溶カシタル後用ウルモノトス

第百六十五

革具ノ手入ニハ酸類及水ヲ用ウヘカラス但シ塵埃、泥土及汗等ニ依リ甚シク汚レタル常用品ハ軟石鹼水又ハ清水ニ浸セル刷毛若ハ布片ニテ徐カニ洗フコトヲ得

第百六十六

雨雪天若ハ手入ノ爲多量ノ水分ヲ吸收シタ

ル革具ハ通風良キ場所ニテ陰乾シ其ノ乾キ終ラサル前ニ稍多量

ニ脂油ヲ施シ要スレハ塗油ヲ繰復スヘシ

第百六十七

寒氣強キ季節ニ於テ革具ニ脂油ヲ施スニハ其ノ吸收ヲ容易ナラシムル爲湯煎鍋ニテ脂油ヲ適度ニ温メタル後塗ルヲ可トス又此ノ季節ニ於テハ手入後革ノ表面ニ脂油ノ浸出シテ白ク固マルコトアルモ之ヲ除クヲ要セス

第百六十八

革具ニ微ヲ生スルトキハ漸次革質ヲ損シ遂ニハ使用ニ堪ヘサルニ至ルモノトス而シテ濕氣多キ季節ニハ殊ニ微ヒ易キヲ以テ之ヲ豫防スル爲屢拭淨シ且塗油ノ量及其ノ回数ヲ減スヘシ

第百六十九 革具ニ微ヲ認メタルトキハ直ニ之ヲ拭フヘシ而シテ此ノ際微ヲ他ニ傳播セシメサルコトニ注意シ特ニ此ノ手入ニ用キタル布片ヲ其ノ儘他ニ用ウヘカラス

第百七十 革具ニ黒キ斑點ヲ生シタルトキハ揮發油又ハ「テレピン」油等ヲ其ノ部ニ塗り之ヲ溶カシ布片ニテ拭去リタル後脂油ヲ施スヘシ

金物ノ取附部ニ生シタル垢ハ布片ニテ之ヲ拭フヘシ

第百七十一 革具ノ縫目ニハ動モスレハ餘分ノ脂油ヲ殘シ爲ニ絲質ヲ變シ綻ヒ易キヲ以テ之ヲ拭去ルコトニ注意スヘシ縫目ニ蠟ヲ塗ルトキハ絲ノ腐朽及磨損ヲ防ク效アルモノトス

三 麻製品及毛類

第百七十一 濕氣ヲ含ミ又ハ塵埃等ヲ被リタルモノヲ其ノ儘放置スルトキハ地質ヲ害シ或ハ蟲害ヲ受クルニ至ルモノトス

第百七十二 麻製品及毛布類ハ能ク日ニ乾シ刷毛等ニテ塵埃、汚垢ヲ除クヘシ若甚シク汚レタルトキハ清水又ハ石鹼水ニテ洗ヒ日ニ乾シタル後要スレハ之ヲ揉ミテ軟ラカクスヘシ但シ麻製品等ニ附著セル革具ハ成ルヘク濡ラササルコトニ注意シ且日乾前稍多量ニ脂油ヲ施スヘシ

第百七十四 毛類ニハ通常「ナフタリン」ヲ用キテ蟲害ヲ

防クモノトス

第七十五

蟲害ノ徵候ヲ認メタルトキハ特ニ殺蟲法ヲ行フモノトス

四 木部

第七十六

木部ハ濕氣ニ遇フトキハ自然ニ變形又ハ乾裂シ時トシテ蟲害ヲ受クルコトアリ

第七十七

塵埃、泥土ヲ除クニハ乾キタル布片ニテ拭フヘシ若甚シク泥土附著シ容易ニ拭去リ難キトキハ兵器ノ種類ニ依リ布片或ハ束藁ニ水ヲ浸シテ拭フモノトス但シ塗料ヲ施シタル部分ハ強ク擦ルヘカラス

銃床、木被、柄木、柄材等ニ附著セル污垢ノ除キ難キトキハ揮

發油或ハ「テレピン」油ヲ僅ニ含マシメタル布片ニテ拭ヒタル後

乾キタル布片ニテ十分油氣ヲ除クヘシ又木部ニ亞麻仁油ヲ塗リ

タルトキハ其ノ吸收スルヲ待チ乾キタル布片ニテ拭込ムヘシ

第七十八 木部ヲ乾カスニハ日光ノ直射ヲ避クヘシ

第七十九 木口ハ動モスレハ乾裂シ易キヲ以テ紙ヲ貼

附クルカ或ハ適宜塗料ヲ塗り置クヲ可トス

第八十 檜製品ニハ「クレオソート」油又ハ樟腦油ヲ塗

リ蟲害ヲ豫防スルヲ可トス

第八十一 手入上ノ注意

第百八十一 手入ハ成ルヘク塵埃ノ飛揚セサル場所ニ於テ行フヘシ又革具ニ在リテハ日光ノ直射ヲ避クヘシ

第百八十二 手入ヲ行フニハ成ルヘク布類ヲ敷キタル臺上ニ於テスルヲ可トス但シ車輛等ニ在リテハ地上ニテ行フ

第百八十三 手入ハ順序正シク丁寧ニシテ遺漏ナキヲ要ス殊ニ格納品ニ在リテハ手入ノ回数少ク且検査容易ナラサルヲ以テ一層注意セサルヘカラス

第百八十四 手入ニ用ウル器具、布片等ニハ塵埃、土砂ノ附著ヲ避クヘシ

第百八十五 手入ニ用キタル油布類ハ必ス規定ノ場所ニ

置キ火災ヲ豫防スヘシ

第二章 格納

第百八十六 格納品ヲ列ヘ又ハ吊リ或ハ托スルニハ其ノ保存、取扱竝重サヲ顧慮シ落ちサルコト、倒レサルコト、擦レサルコト及托架等ヲ損セサルコトニ注意スヘシ

第百八十七 格納品ニハ覆ヲ施シ戶外ヨリ來ル外氣ニ曝スコトナク且塵埃ヲ防クヘシ

第百八十八 塗油セル鐵部ハ油ヲ吸收スヘキ物體ニ觸レシメス且油ノ剝ケサル如ク格納スヘシ若鐵部ノ木部等ニ觸ルル場合ニハ豫メ其ノ部ニ防錆用油ヲ塗り十分吸收セシメ置クカ又

ハ油紙、[「]パラフィン[」]紙或ハ亞鉛板ヲ挾ミテ發錆ヲ豫防シ又他ノ金屬ニ觸ルル場合ニハ傷ツケサル様注意スヘシ
 塗油セル小金物ヲ結束スルニハ成ルヘク^ア亞鉛^{エンピキ}鍍鐵線ヲ用キ若麻絲ヲ用ウルトキハ金物ト同シ油ニ十分浸シタルモノヲ用ウヘ
 シ
 第百八十九 革條類ヲ吊^フ下クルニハ成ルヘク之ヲ曲ケサルコト及遊環革ヲ落ササルコトニ注意スヘシ但シ遊環革ハ別ニ纏メテ其ノ附近ニ置クモ妨ナシ
 長大ナル革條類ヲ吊ルニハ時時上下ヲ換フルヲ可トス
 麻絲又ハ紐類ヲ以テ革具ヲ吊ルニハ成ルヘク之ヲ附屬金具ニ通

スヲ可トス若金具ナキトキハ重サノ爲絲又ハ紐ノ革ニ喰込マサル如ク加減スヘシ

第百九十二 毛布類ハ「ナフタリン」ヲ插入シ通常箱内ニ密

閉格納ヲ爲スモノトス又革具類ニ在リテモ此ノ方法ニ依ルヲ便
 トス

密閉格納ヲ爲スニハ空氣ノ乾燥セル季節（概ネ十月ヨリ翌年三月ニ至ル間）ニ於テ綿密ニ手入ヲ行ヒ「サリチール」酸ヲ混シタル糊ニテ確實ニ自貼ヲ爲シ外氣ノ侵入ヲ防クヘシ
 毛布ノ格納替ヲ爲ストキハ舊折目ヲ避ケテ折疊ムヘシ
 第百九十一 長キ柄ヲ有スルモノハ成ルヘク架ニ托シテ

吊ルカ又ハ水平ニ置キテ其ノ屈曲ヲ避クヘシ
塗料ヲ施シタル木製品ハ通常枕木ノ上ニ置キ且成ルヘク積重ネ
サルヲ可トス若已ムヲ得ス積重ヌルトキハ相互ノ間ニ挾木ヲ置
キ且時時上下ヲ置換フヘシ

第百九十一 蟲害ヲ受ケタル毛製品、木製品等ハ殺蟲後

ト雖一時他ノモノト隔離シテ格納シ害蟲ノ撲滅ヲ確ムルヲ可ト
ス

第百九十三 格納倉庫ニ關シテハ概ネ左ノ事項ニ注意ス

一 庫内ハ常ニ清潔ナラシメ塵埃及濕氣ノ侵入スルヲ防クヘ

二 庫内ニ於テハ手入ヲ行ハサルヲ可トス若已ムヲ得ス手入
ヲ行フトキハ塵埃ヲ他ノ格納品ニ被ラシメサル爲幕等ニテ
手入場所ヲ區劃スルヲ要ス

三 窗戸ハ乾燥ノ日特ニ換氣ヲ行フ場合ノ外平素之ヲ閉チ入
口モ亦出入スルトキノ外之ヲ閉ツルモノトス

四 鼠ノ侵入ヲ防キ鼠害ヲ豫防スヘシ

五 日光ノ直射ヲ受クル窗戸ニハ日覆ヲ用ウヘシ

第三章 分解及結合

第百九十四 手入、檢査及修理等ノ爲兵器ヲ分解スルニハ

能ク其ノ制限ヲ守リ必要以外ニ他ノ部分ニ及ホスヘカラスニ
第百九十五 分解及結合ハ順序正シク行ヒ損セサルコト、
汚ササルコト、混セサルコト、失ハサルコト等ニ注意スヘシ之
カ爲分解ニ方リテハ各部品ヲ順序良ク列ヘ又結合ニ方リテハ上
下、左右等ヲ誤ラサルコト肝要ナリ

第百九十六 螺子ヲ緊ムルニハ右ニ廻シ之ヲ戻スニハ左
ニ廻スヲ通常トス而シテ手力ノ及ハサル場合ニハ螺廻、螺鑰等
ヲ用ウルモ過度ニ緊ムヘカラス
數箇ノ螺子ニテ螺著ケタルモノヲ緩メ或ハ緊ムルニハ相對スル
螺子ヲ交互ニ同量ツツ廻スヘシ又螺子ヲ脱シタル場合ニハ其ノ

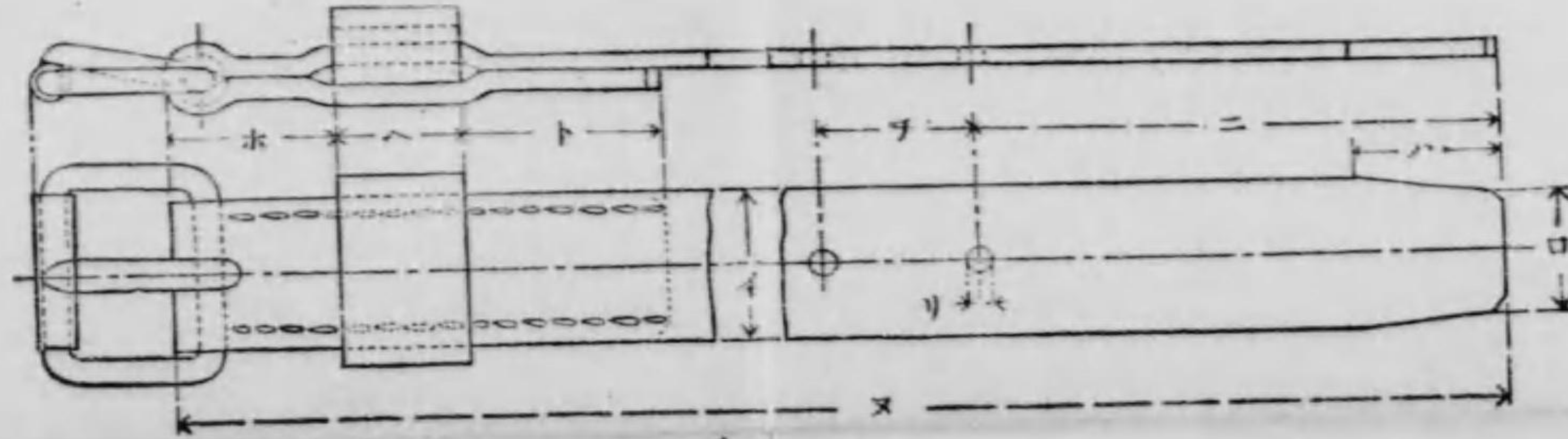
孔ニ相當セル螺子ヲ他ノモノト混セサルコトニ注意スヘシ
螺子ヲ緩メムトスルニ方リ固クシテ抜ケサルモノハ少量ノ油ヲ
滴シ暫時ノ後之ヲ廻スヘシ

第百九十七 割栓ヲ箆メタルトキハ其ノ端ヲ開キ置クヘ
シ

第百九十八 分解及結合困難ナルトキハ強テ之ヲ行フコ
トナク工長ノ指揮ヲ受クヘシ

第百九十九 分解及結合ハ成ルヘク布類ヲ敷キタル臺上
ニテ行フヲ可トス

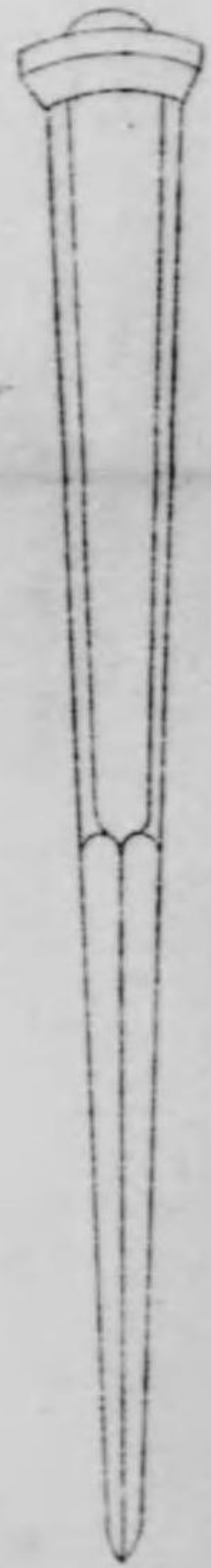
革 條 寸 度 表



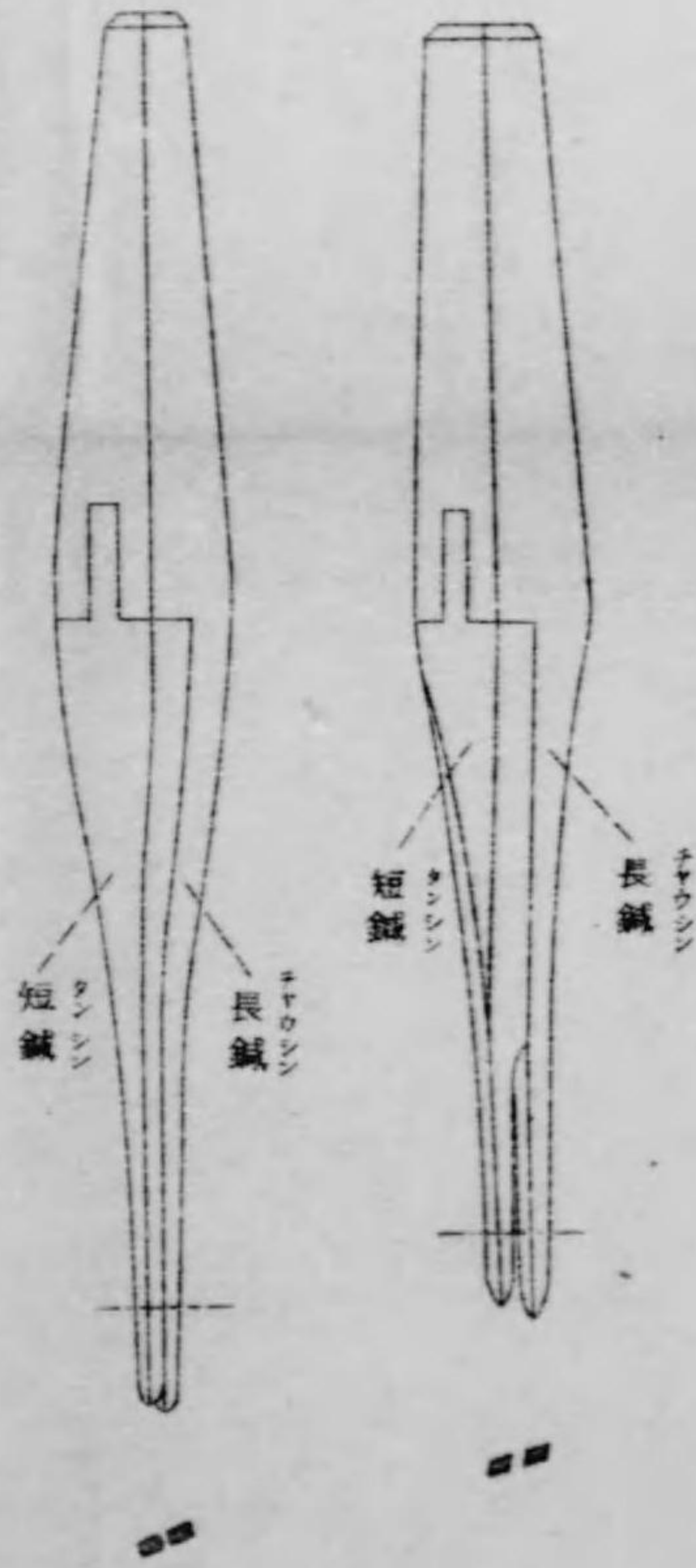
イ	11	13	15	17	19	21	23	25	26	28	30	32	35	38	40	45	50
ロ	9	10	12	14	15	17	18	20	21	22	24	26	28	30	32	36	40
ハ	11	13	15	17	19	21	23	25	26	28	30	32	35	38	40	45	50
ニ	38	43	46	52	57	62	66	73	74	78	81	89	95	100	104	116	123
ホ	12	13	13	15	16	18	18	20	20	21	21	24	25	26	27	28	28
ヘ	9	10	10	11	12	12	13	15	15	15	15	17	17	17	17	20	20
ト	14	15	15	17	19	20	21	21	22	23	26	26	27	30	30	34	40
チ	11	13	15	17	19	21	23	25	26	28	30	32	35	38	40	45	50
リ	2	2	2.5	3	3	4	4	4.5	4.5	5	5	6	6	7	7	7	8
方形簞鍔	十二 耗	十四 耗	十六 耗	十八 耗	二十 耗	二十二 耗	二十四 耗	二十六 耗	二十七 耗	二十九 耗	三十二 耗	三十四 耗	三十七 耗	四十 耗	四十二 耗	四十七 耗	五十二 耗
備 考	〔ヌ〕ノ長サハ100耗以下ノモノハ10耗ノ差100耗以上300耗以下ノモノハ20耗ノ差300耗以上700耗以下ノモノハ 50耗ノ差700耗以上ノモノハ100耗ノ差トス 〔リ〕ノ穿孔ハ革ノ厚サ6耗未満ハ正圓6耗以上10耗未満ハ長徑〔リ〕ノ一倍半ノ橢圓10耗以上ハ長徑〔リ〕ノ二倍ノ橢 圓トス																



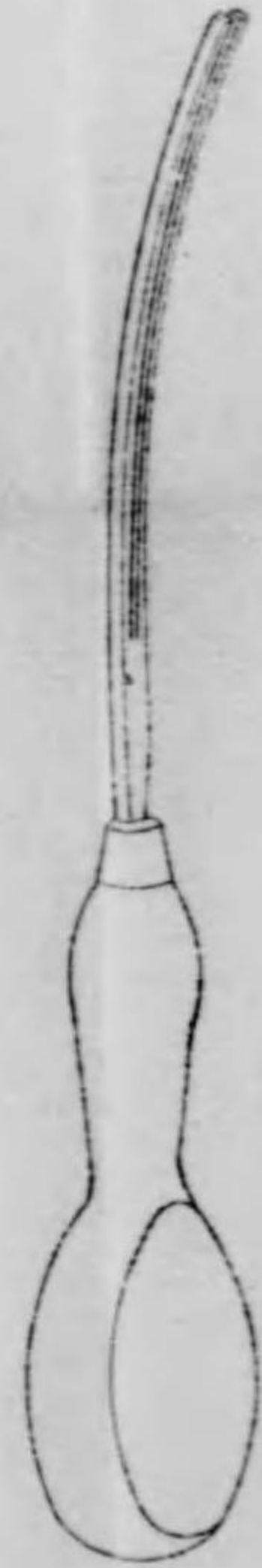
第 六 圖
單 鉞 目 打



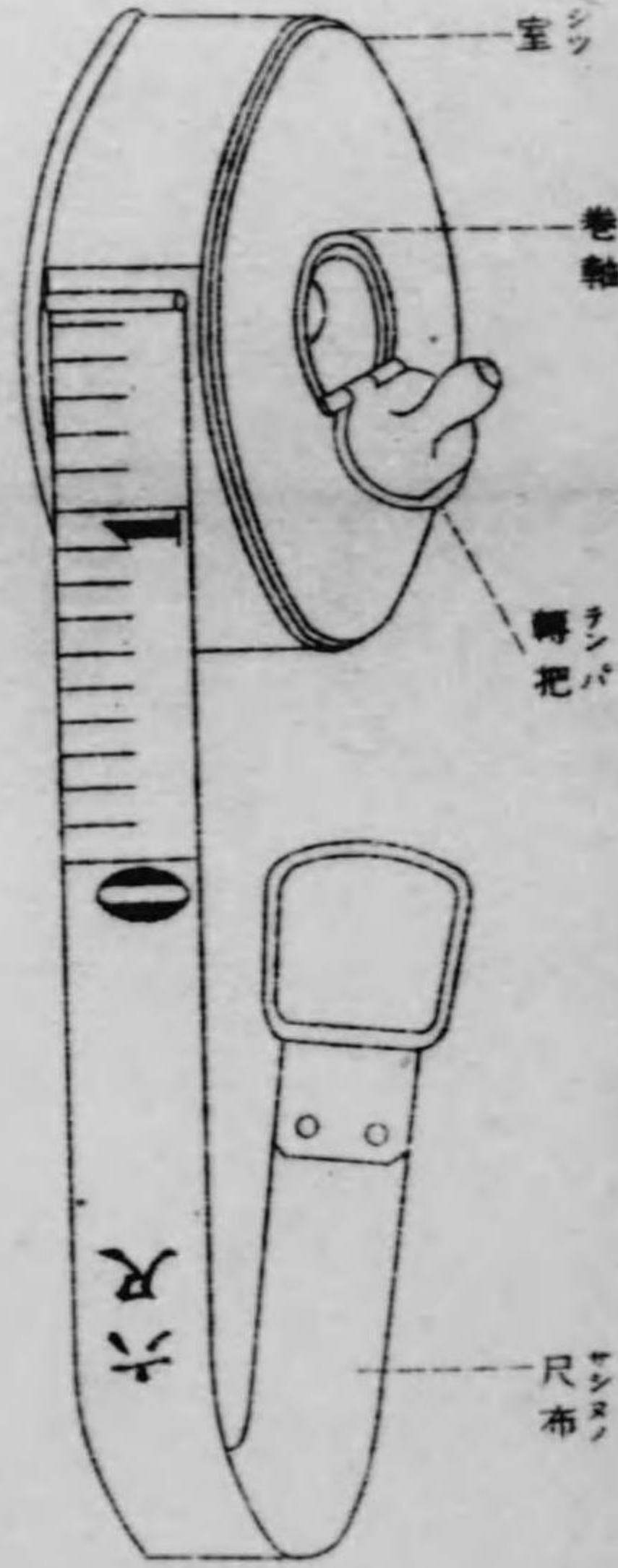
第 五 圖
菱 目 打 角 目 打



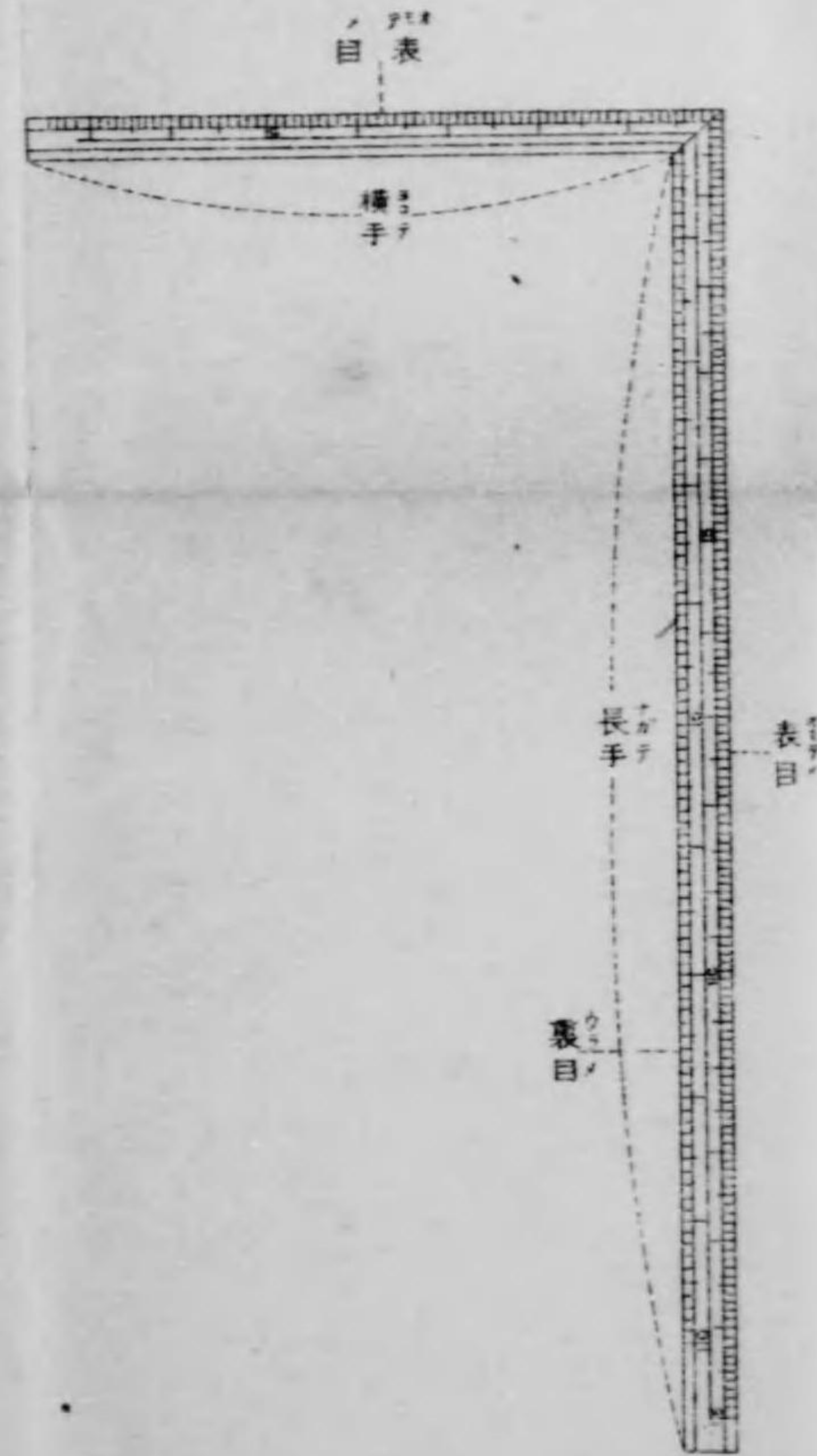
第 四 圖
削 稜 子



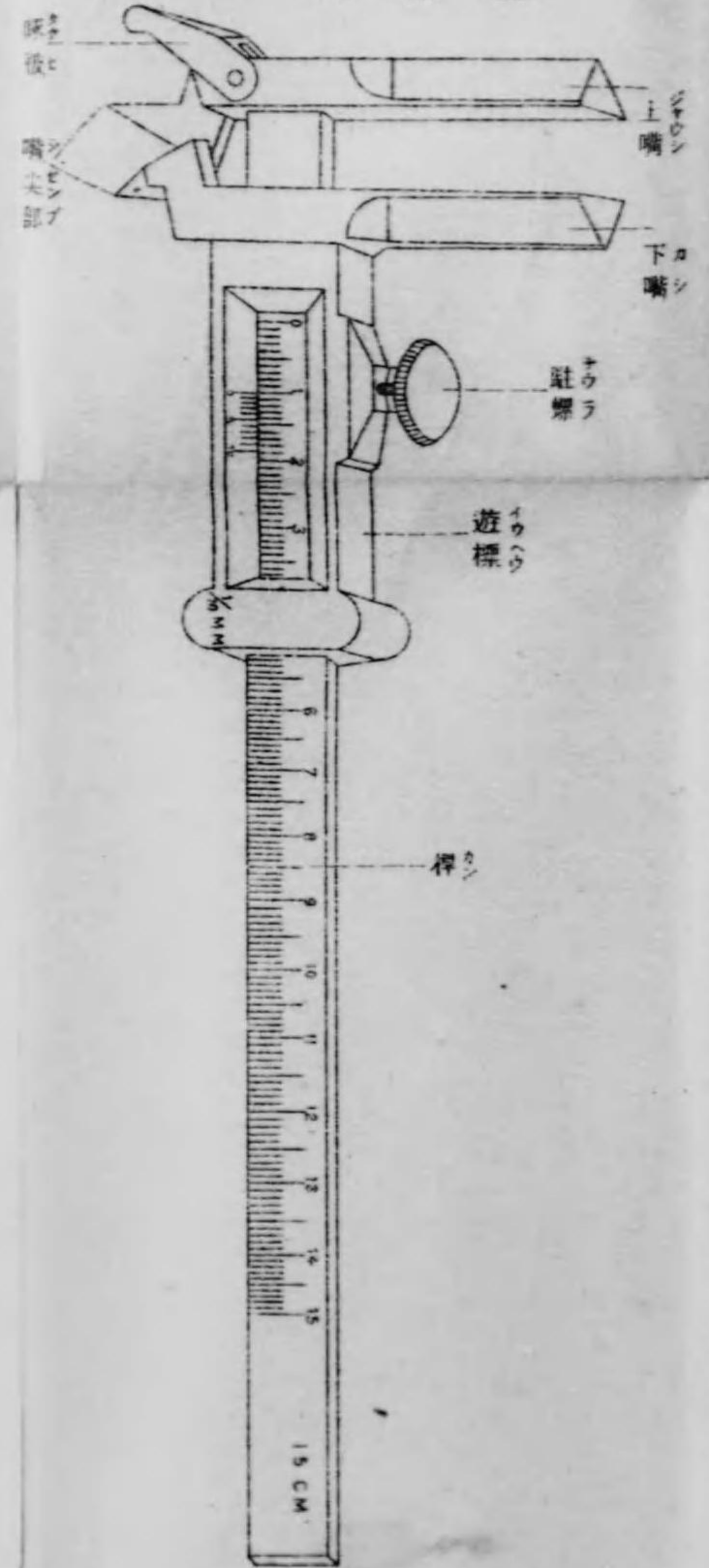
第 三 圖
二 米 卷 尺



第 二 圖
曲 尺

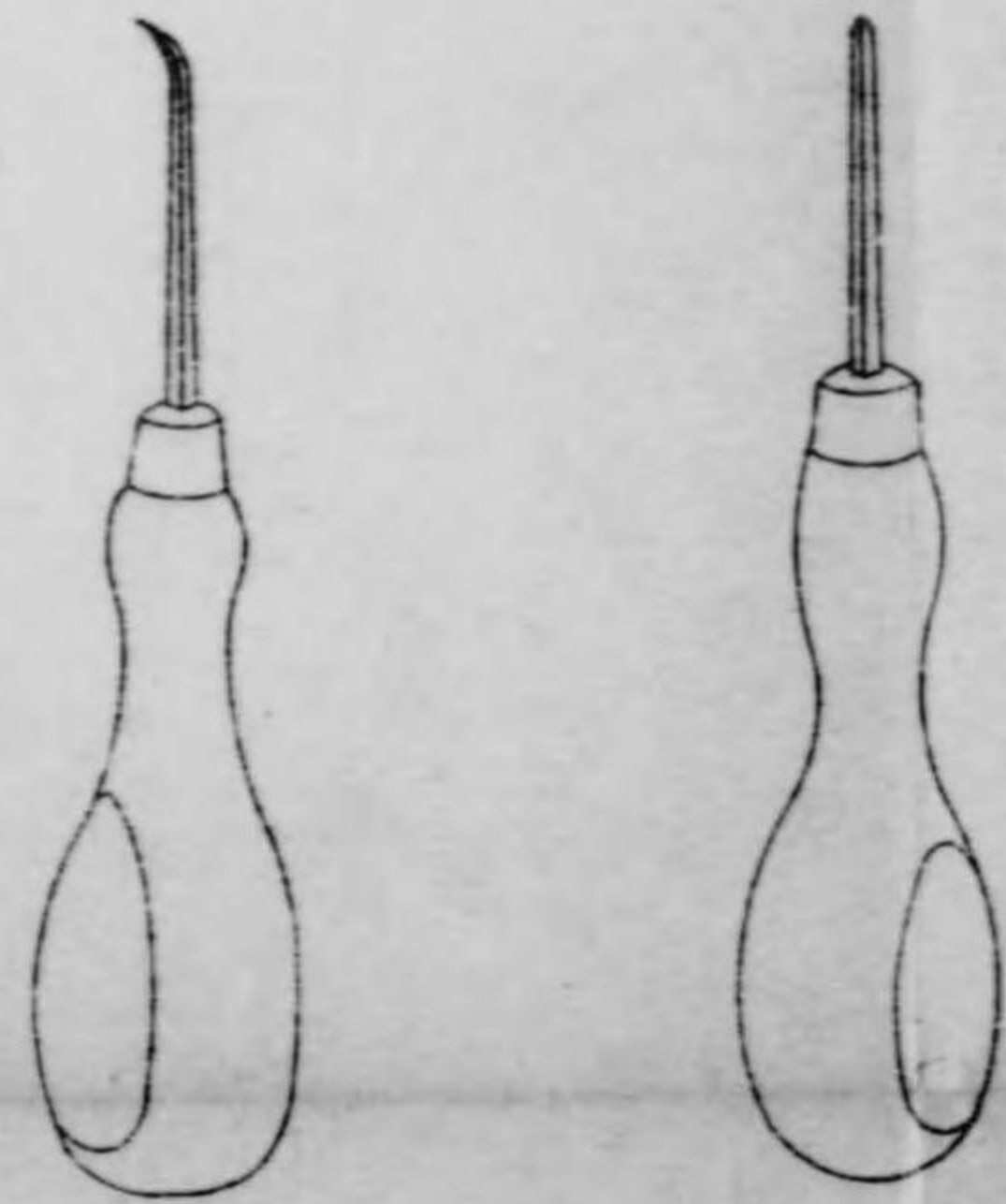


第 一 圖
遊 標 尺



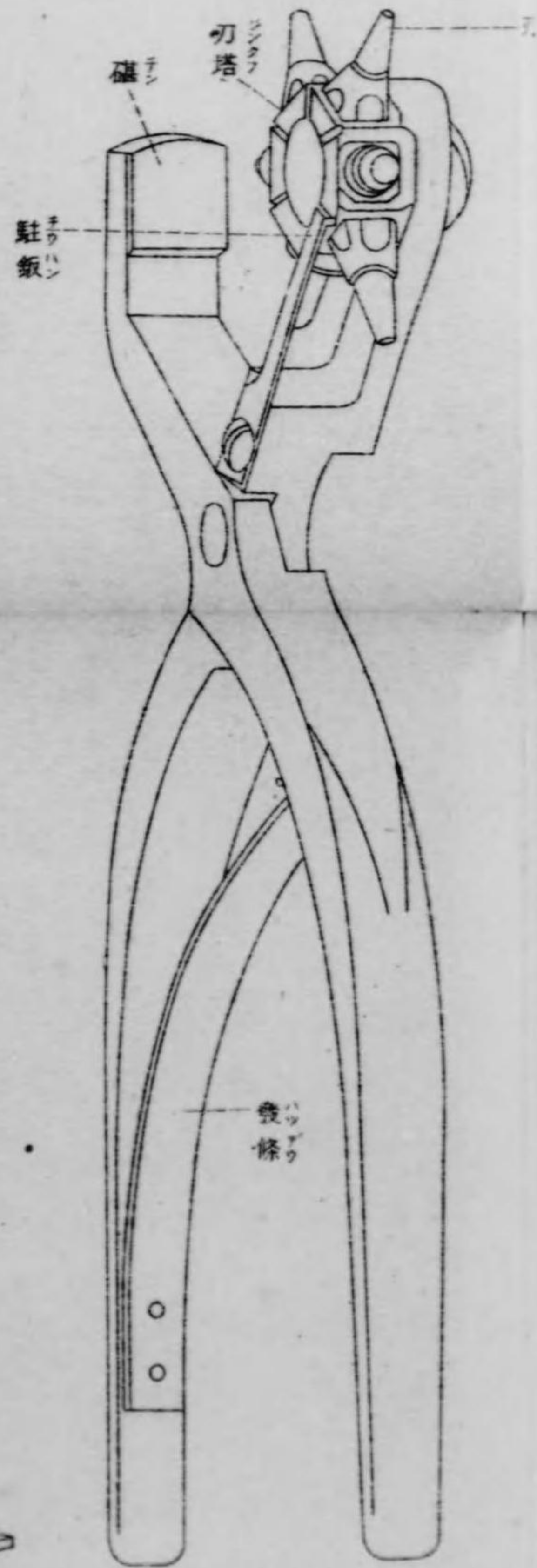
第十圖 第十一圖

リギ 錐
ヒクス 榑
リギ 錐
レヒ 菱



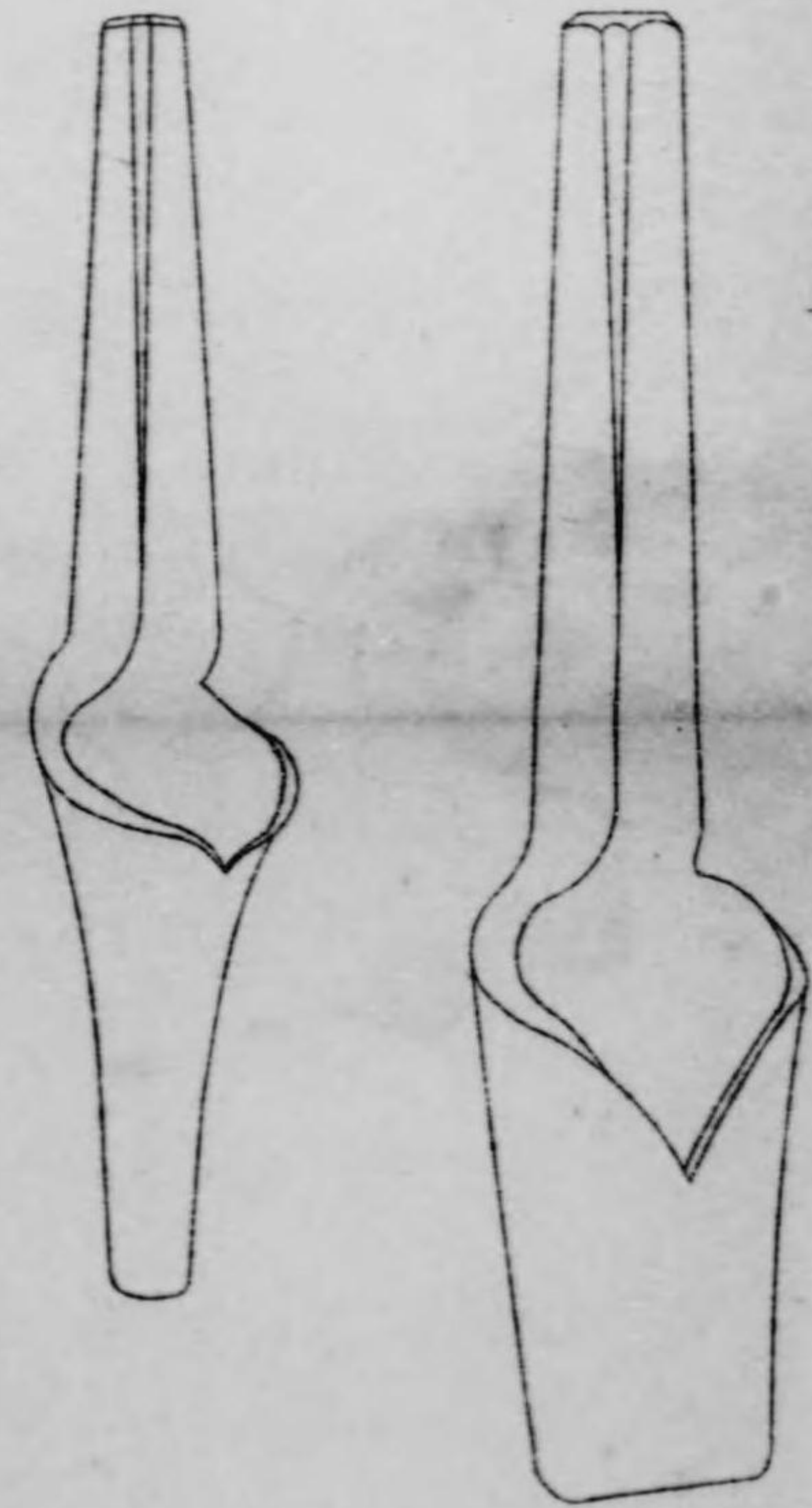
第九圖

キマ 抜
ノ 目
トハ 旭



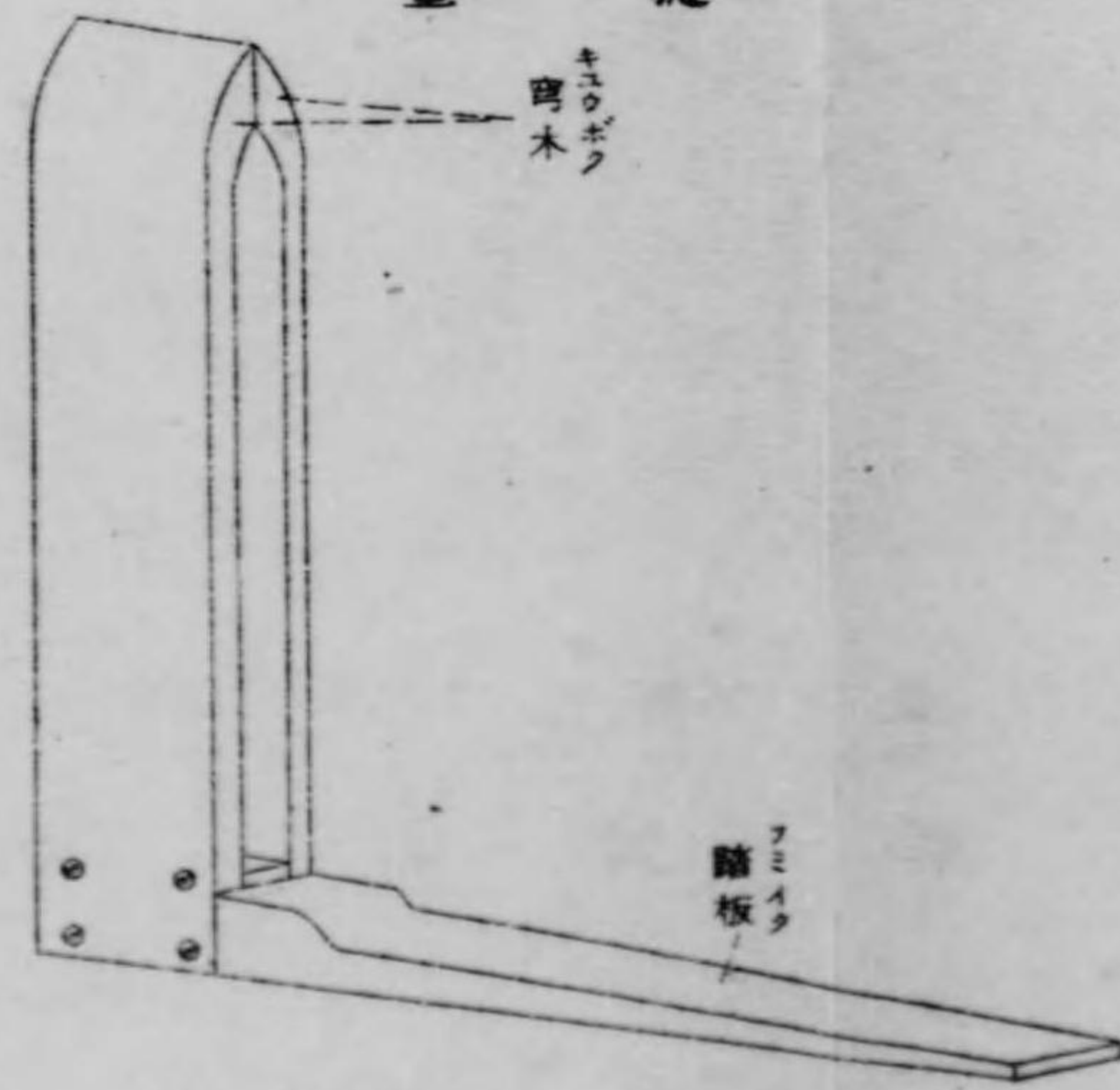
第八圖 第七圖

キマ 抜
チウ 打
メ 目
トハ 旭
チウ 打
メ 目
ンバ 判
コ 小

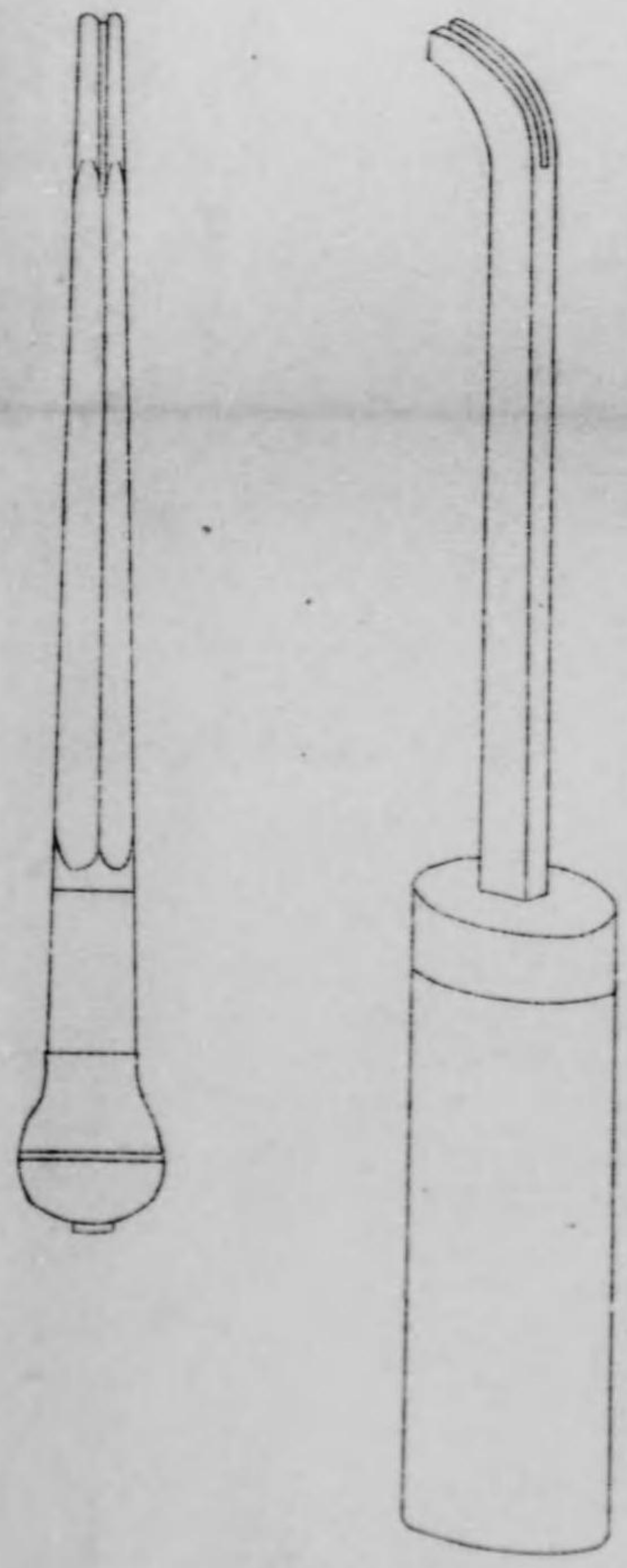


第二十圖

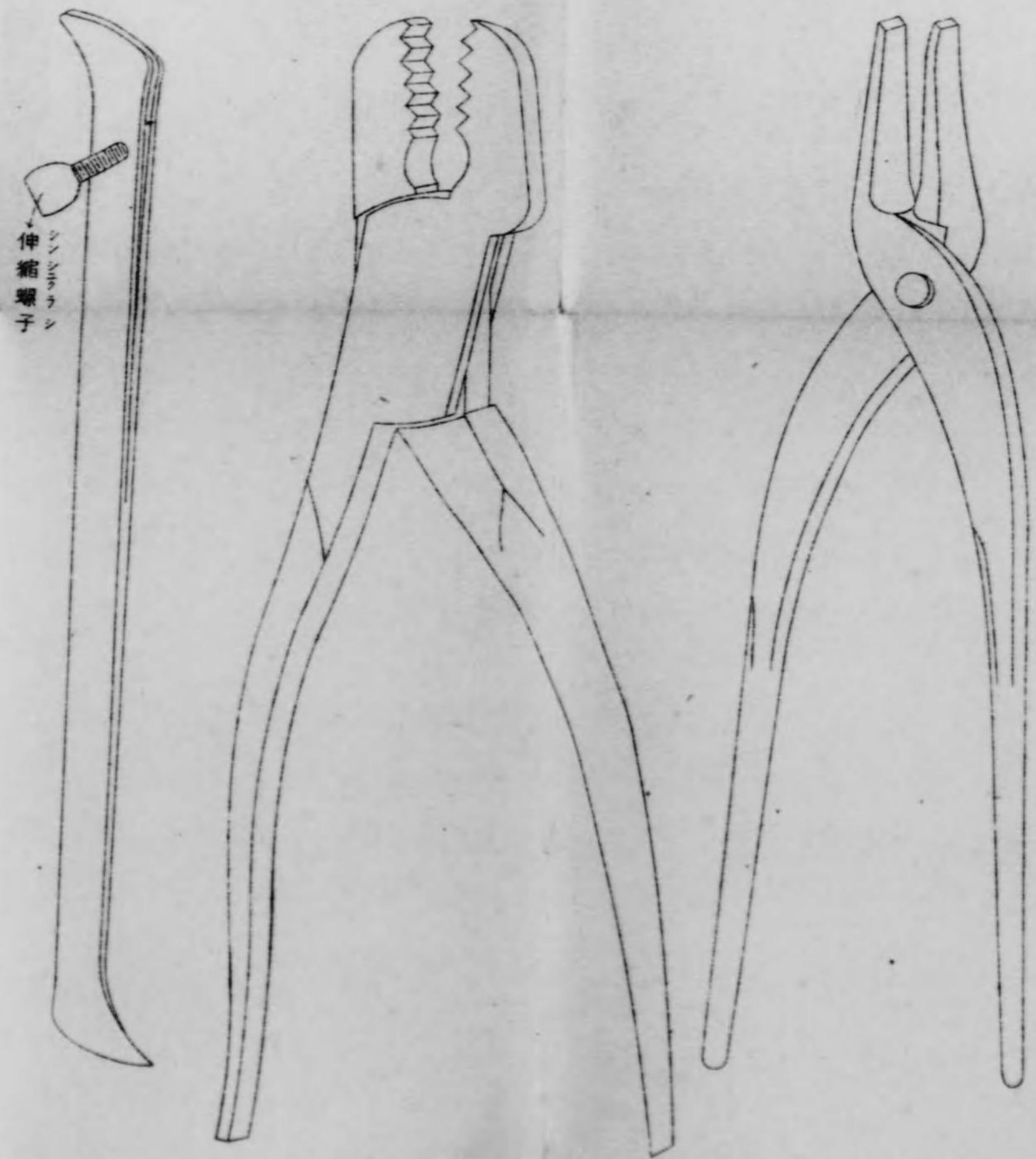
イダ 臺
ヒメ 縫



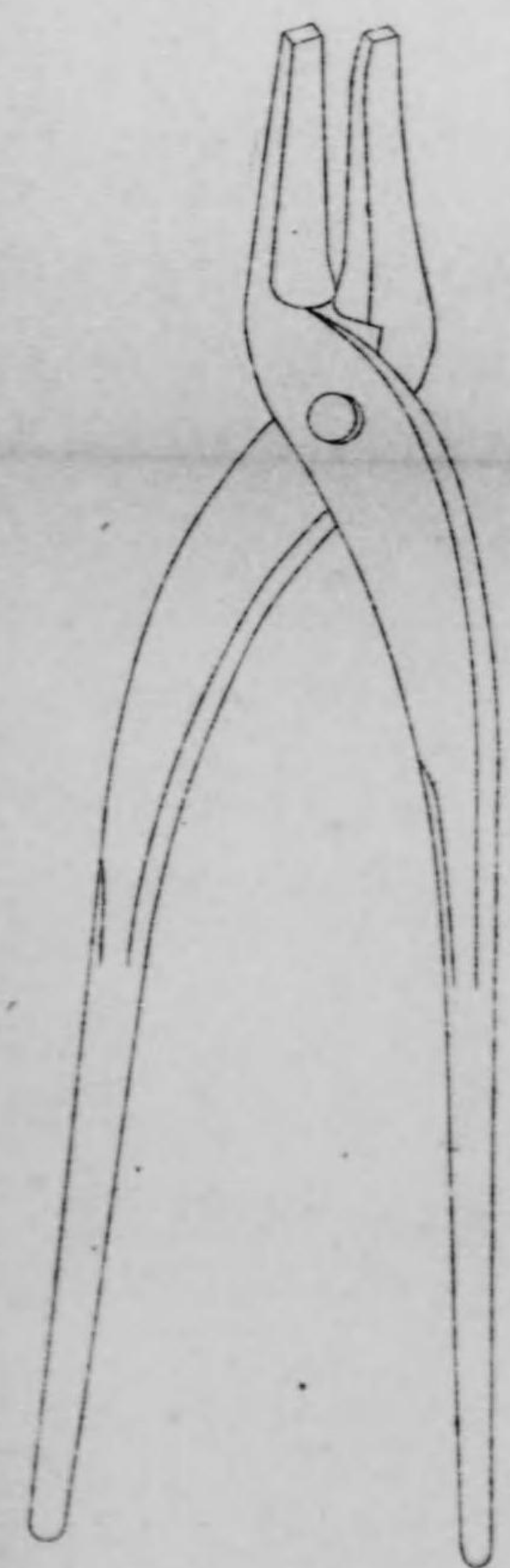
圖八十第 圖七十第
 シ子 毛 填 ンテ ンテ ンテ
 子 毛 填 鍍 線 畫



圖六十第 圖五十第
 ラベ ンセ フツク シバ ハ
 篋 線 畫 鉗 齒



圖四十第
 シハ ウコ ンア
 鉗 工 鞍



圖三十第
 方シ通ノ絲ニ針



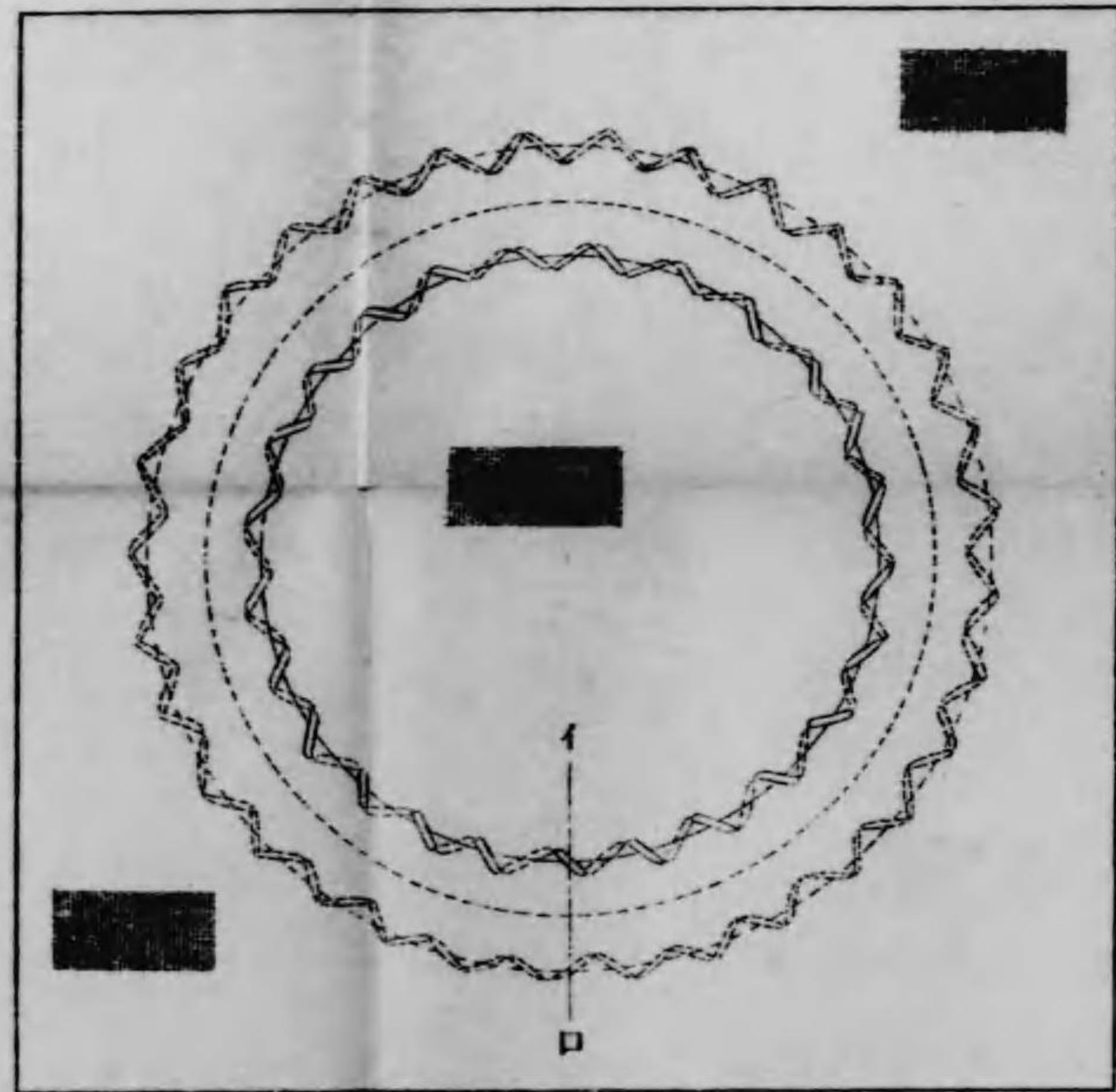
伸縮罐子

(二) 絲ヲ針ニ通シテ
 根元迄引ク

(三) 針ヲ下方ニ引出ス

圖四十二第

法一第縫膝 ヒメツガ



面断ノ(口イ)



圖三十二第

(口)

方綴ノ襷板



襷ノ裏ヨリ見タル形

(イ)

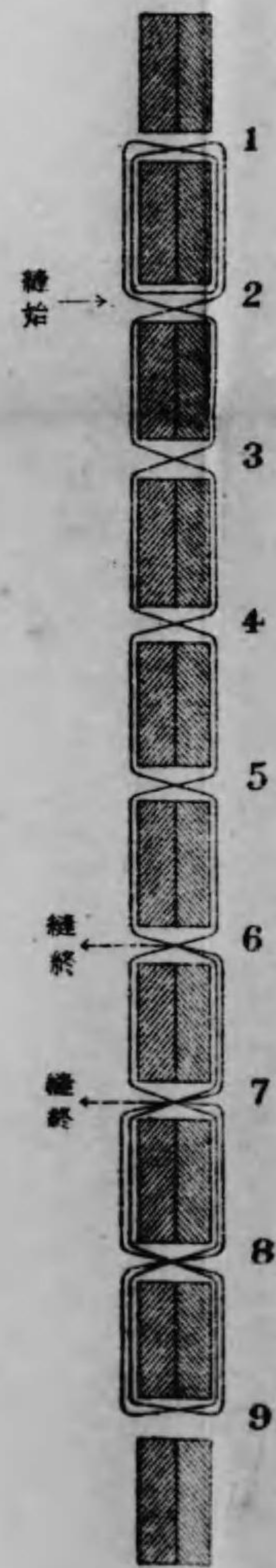
方綴ノ襷鞍



襷ノ表ヨリ見タル形

圖二十二第

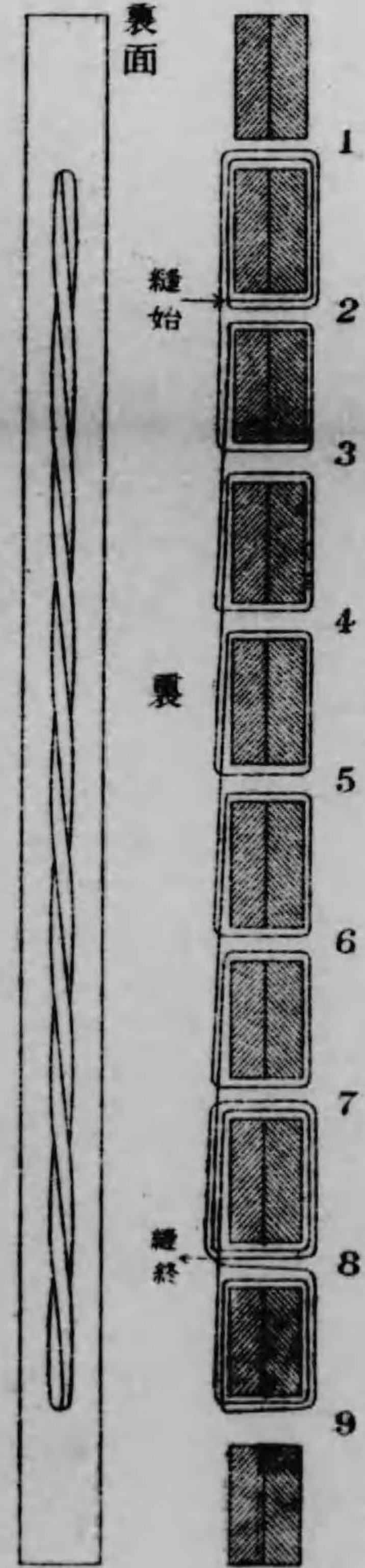
縫針本二



圖一十二第

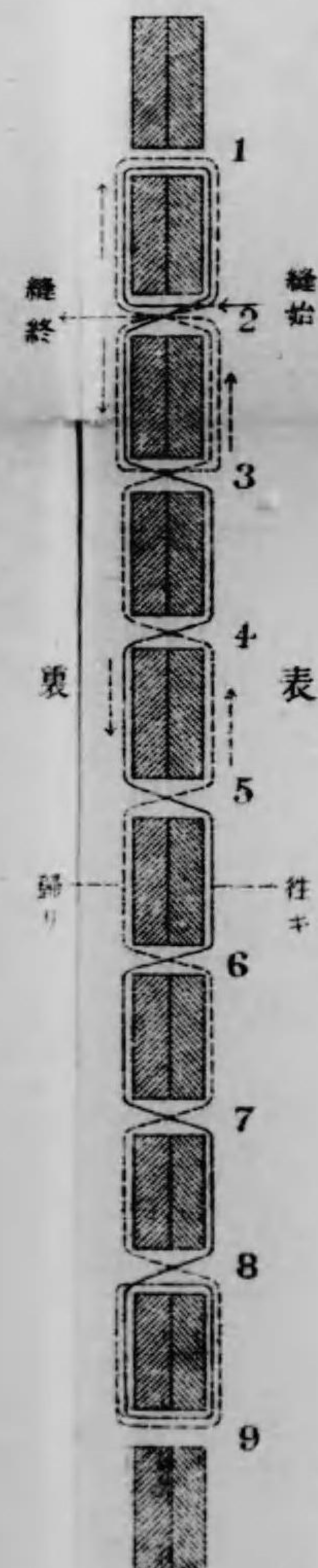
法二第縫針本一

(縫返)



圖十二第

法一第縫針本一



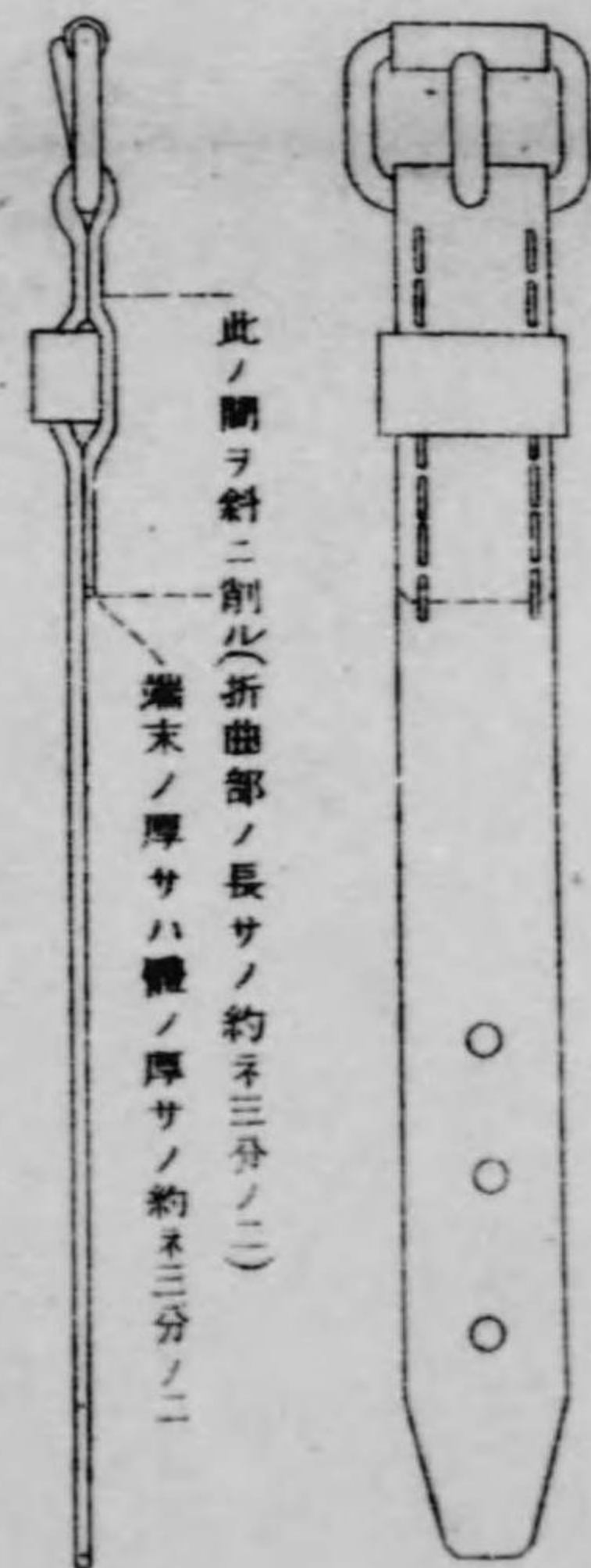
圖九十第

襷 ヒメツガ 板 ツギ 鉸



圖七十二第

方削ノ部着附銀簪ノ類條革



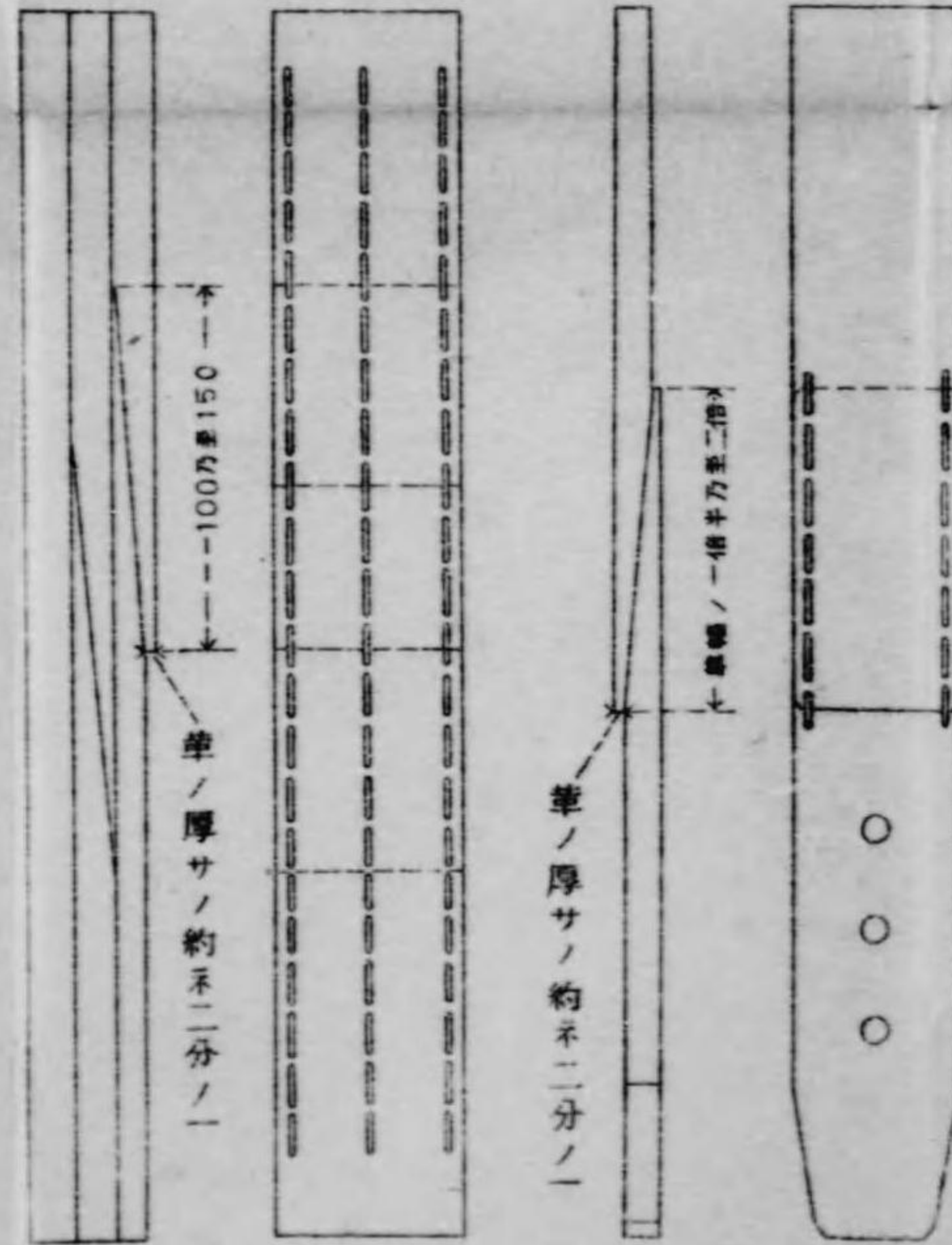
此ノ部ヲ斜ニ削ル折曲部ノ長サノ約三分ノ二
 端末ノ厚サハ體ノ厚サノ約三分ノ二

圖六十二第

方合繼ノ革

(口)

(イ)



150
 100
 1
 厚サノ約三分ノ一

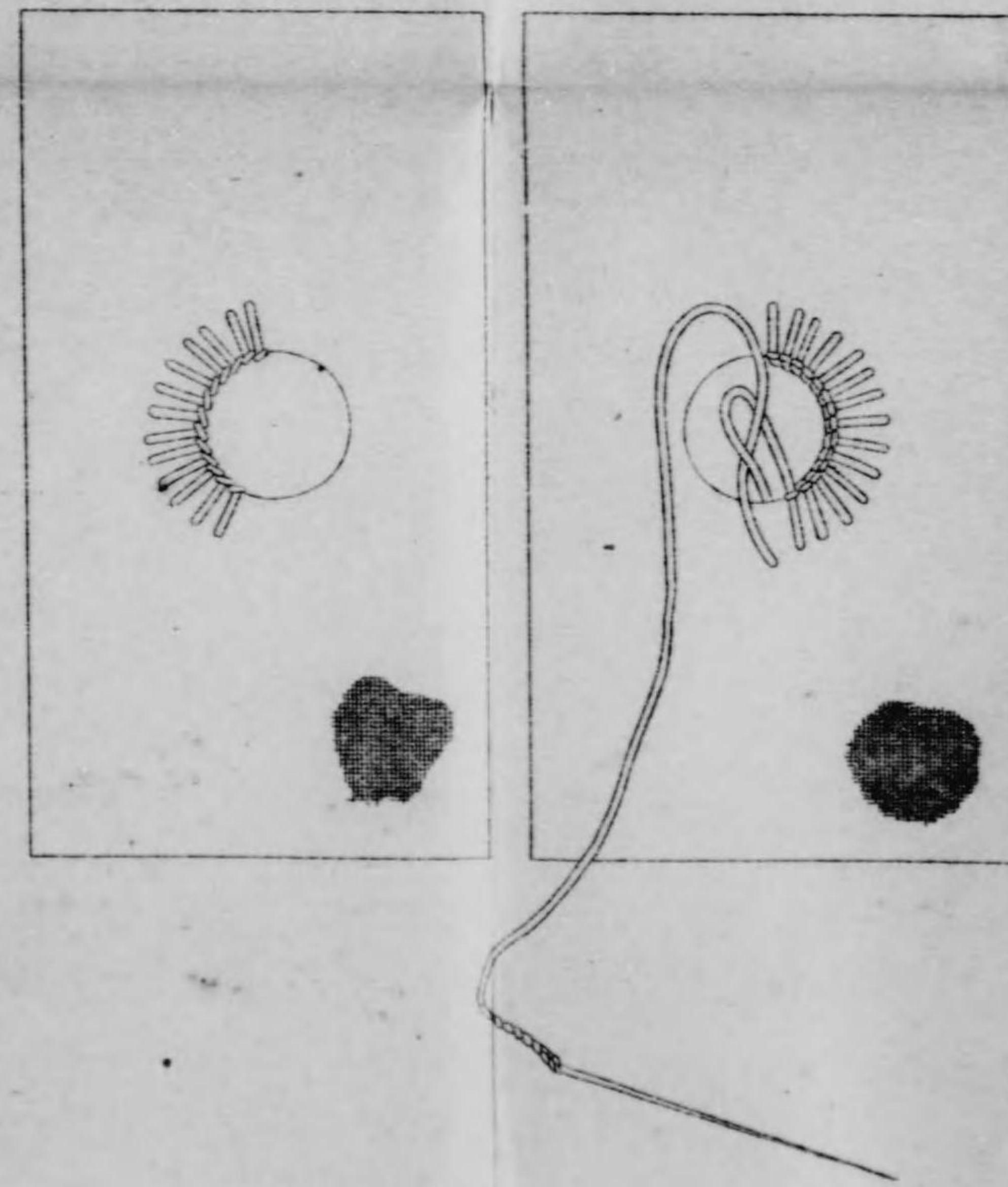
二
 厚サノ約三分ノ一

圖五十二第

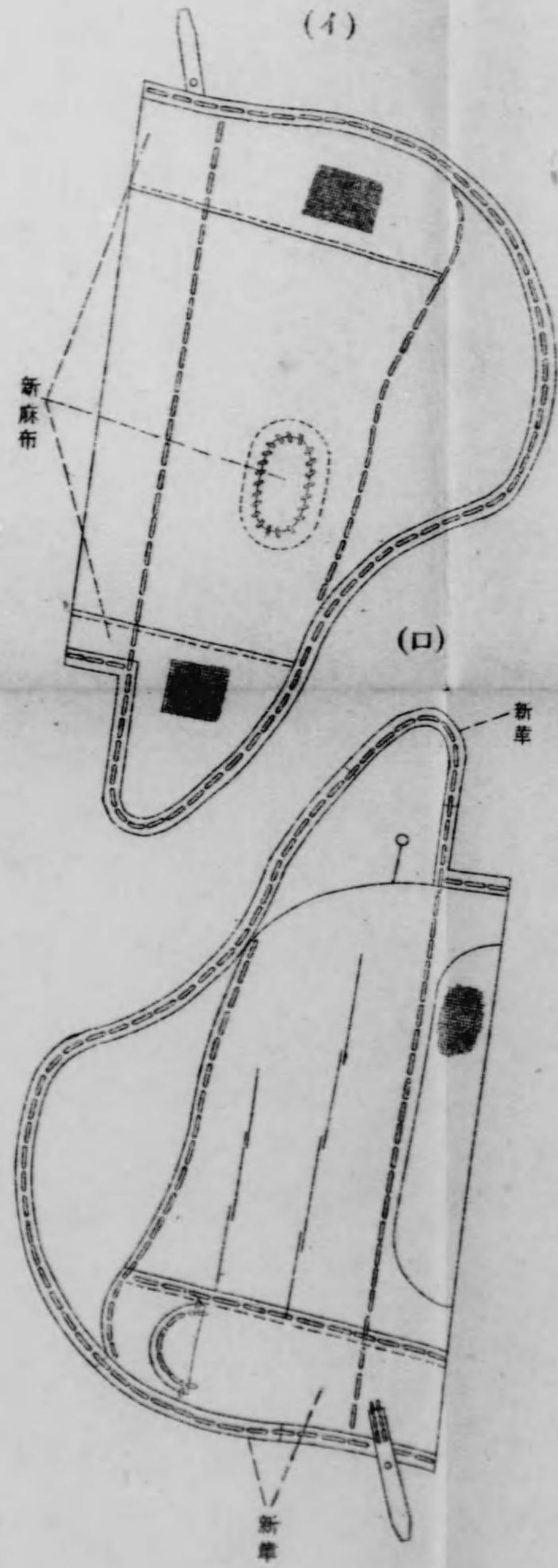
法二第縫藤

面裏

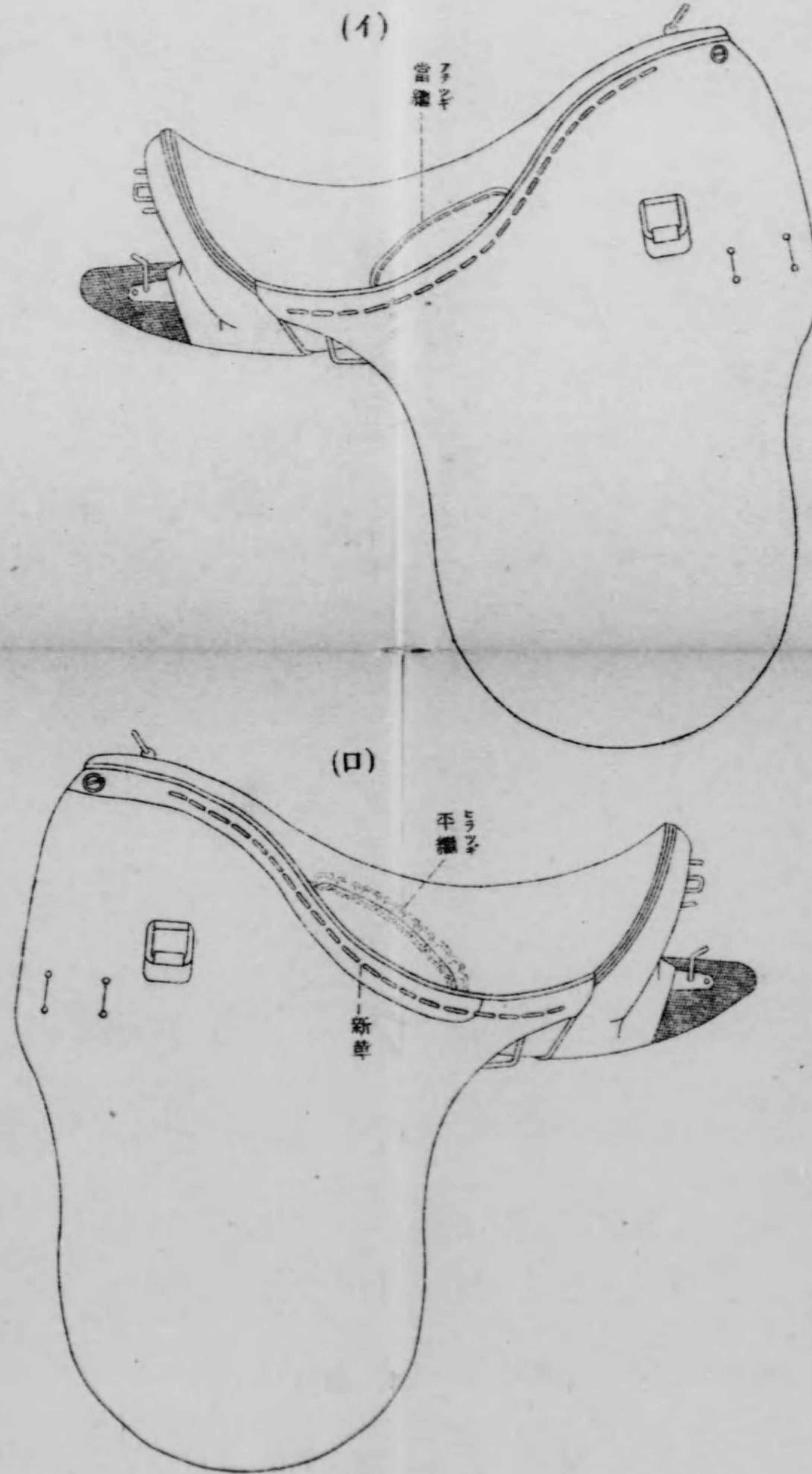
面表



圖九十二第
理修ノ褥鞍

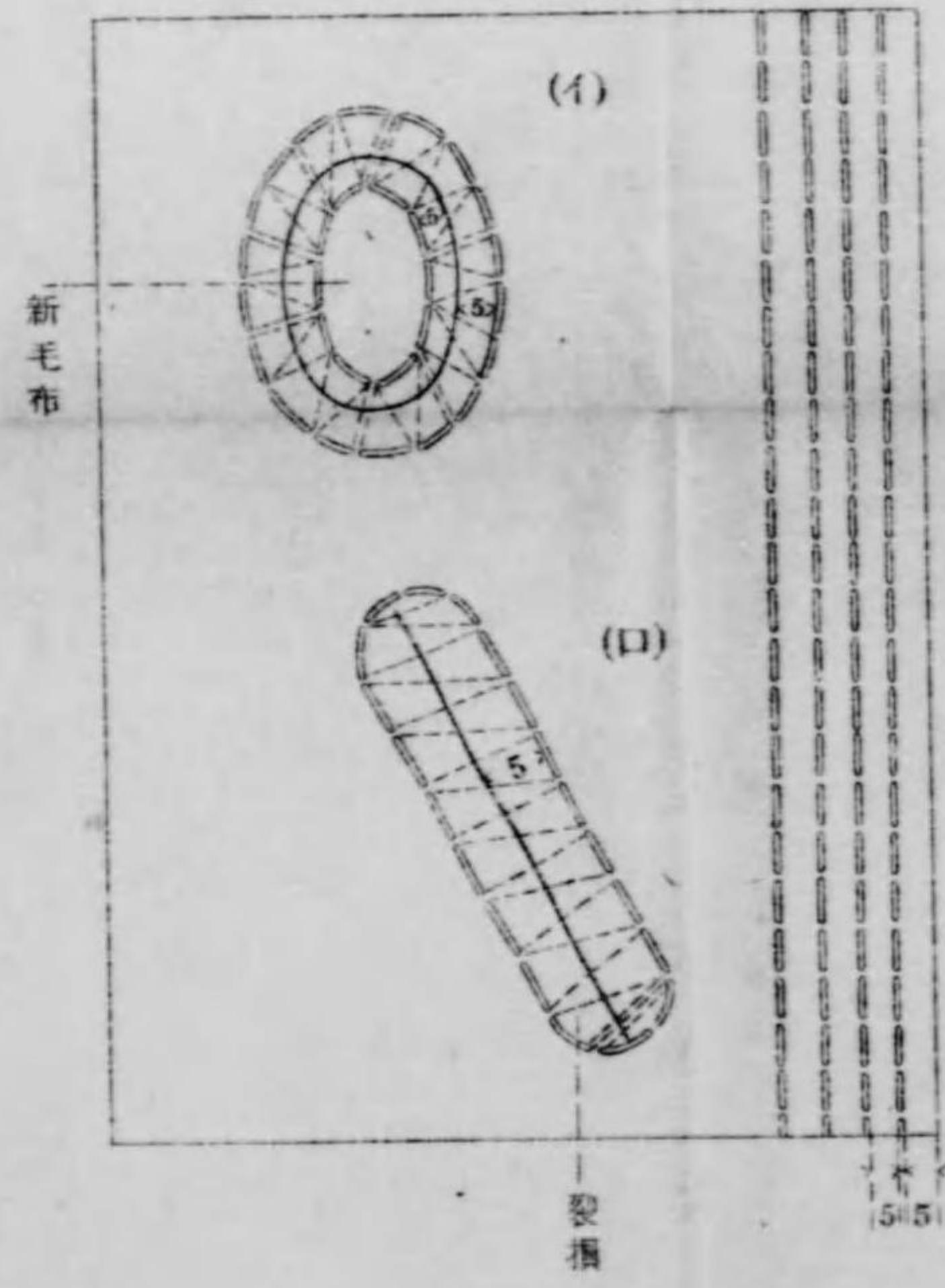


圖八十二第
理修ノ鞍



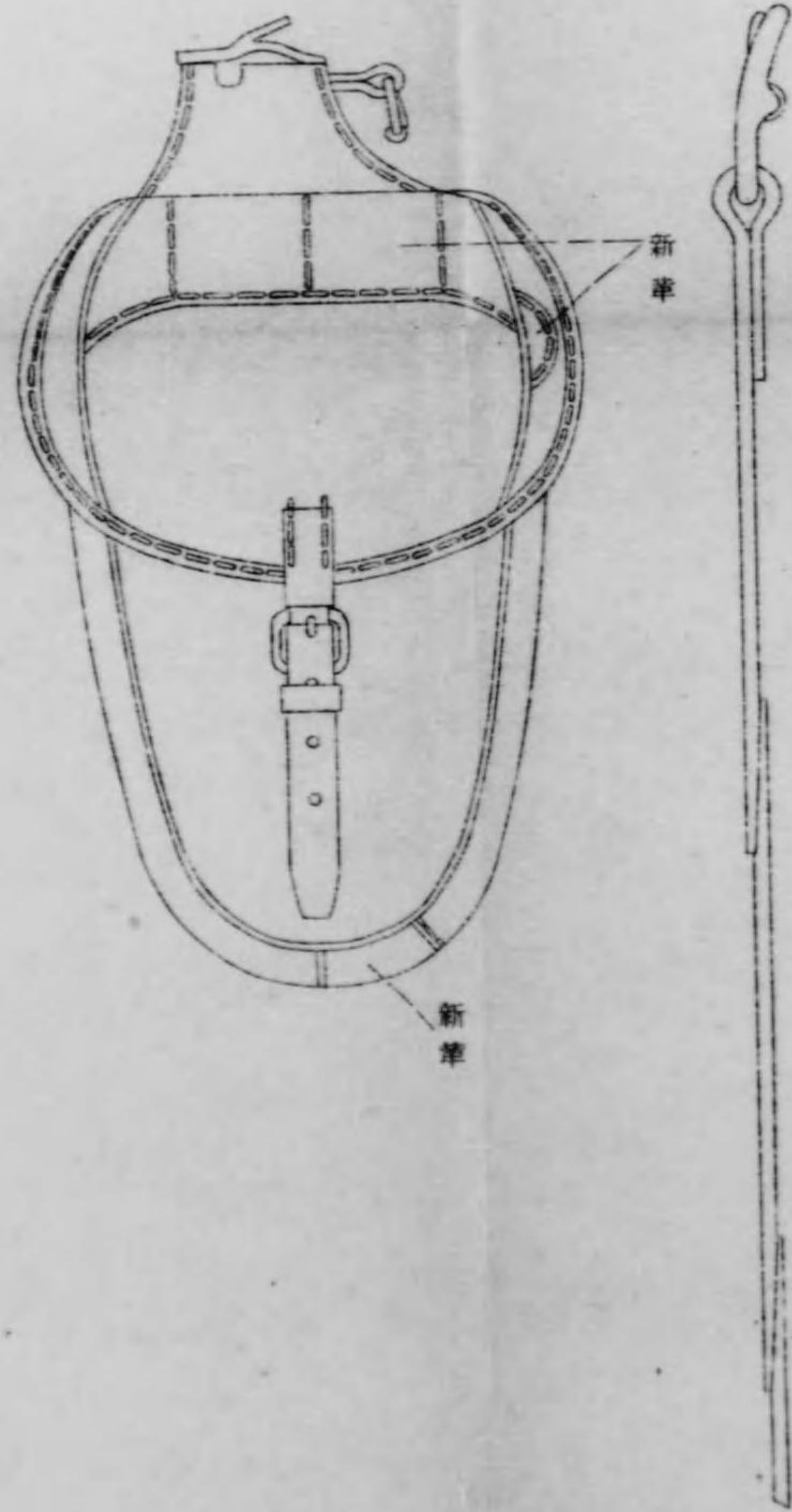
圖三十三第

理修ノ布毛下鞍



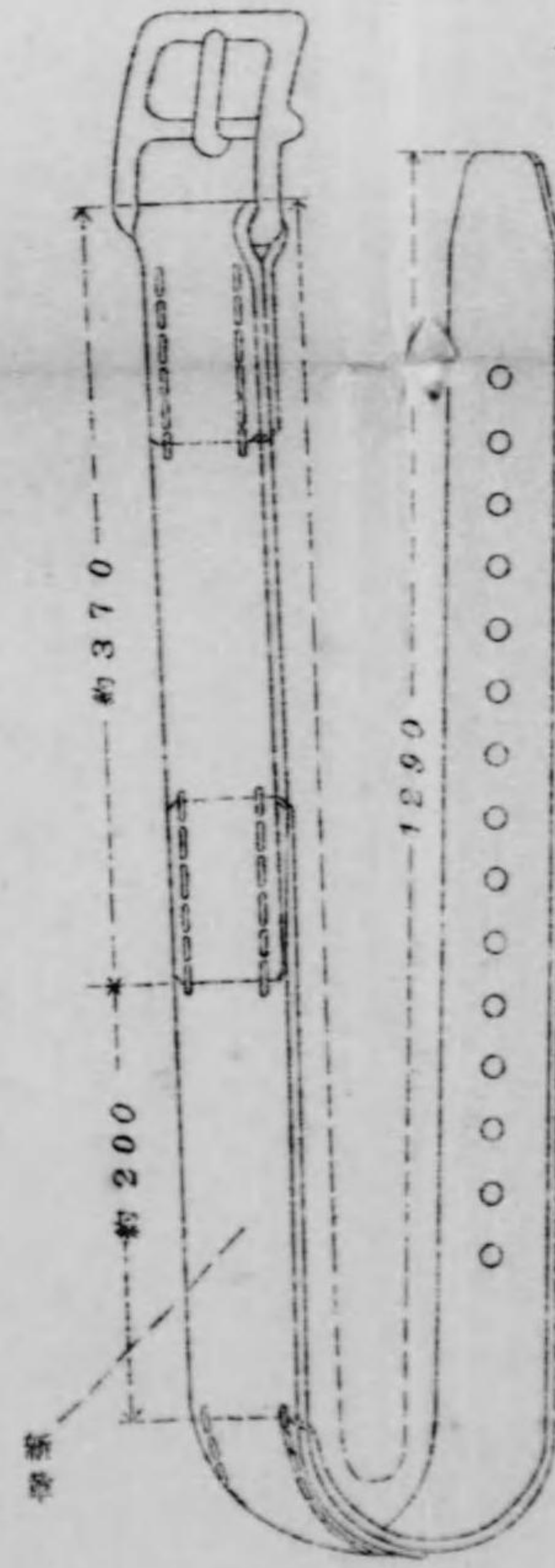
圖二十三第

理修ノ鞍轡



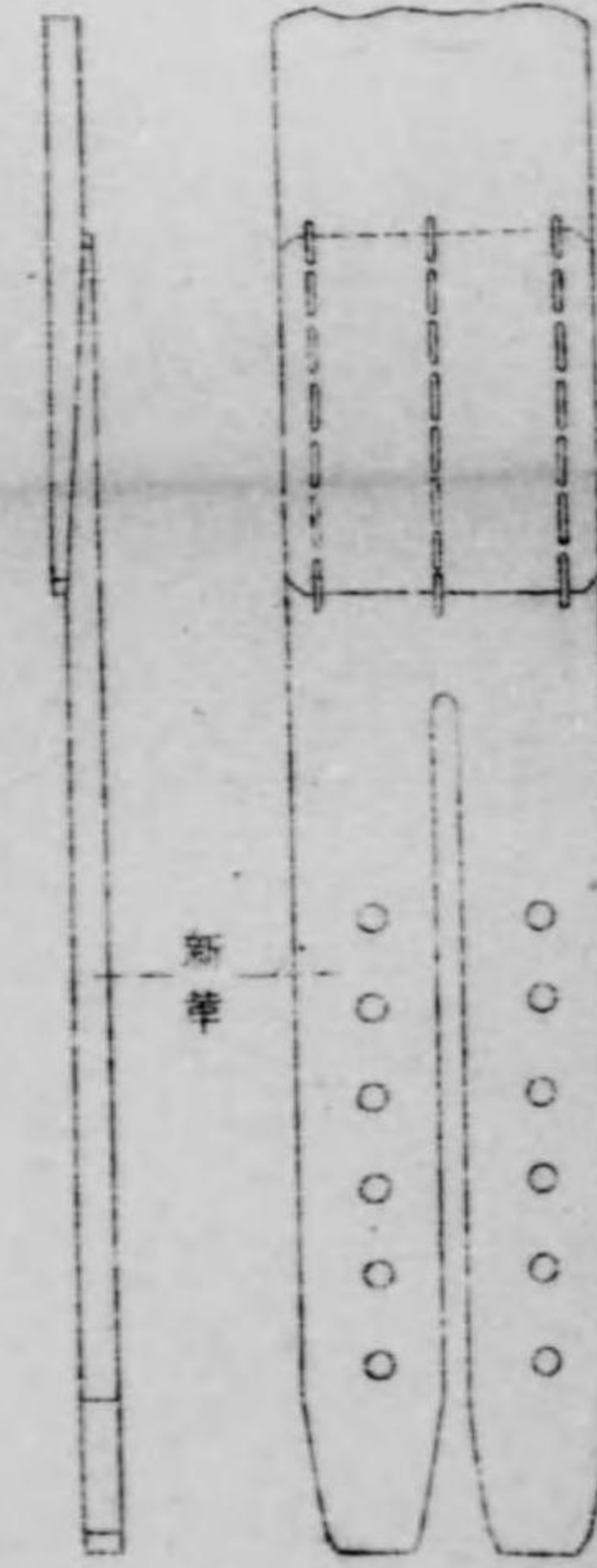
圖一十三第

理修ノ革籠



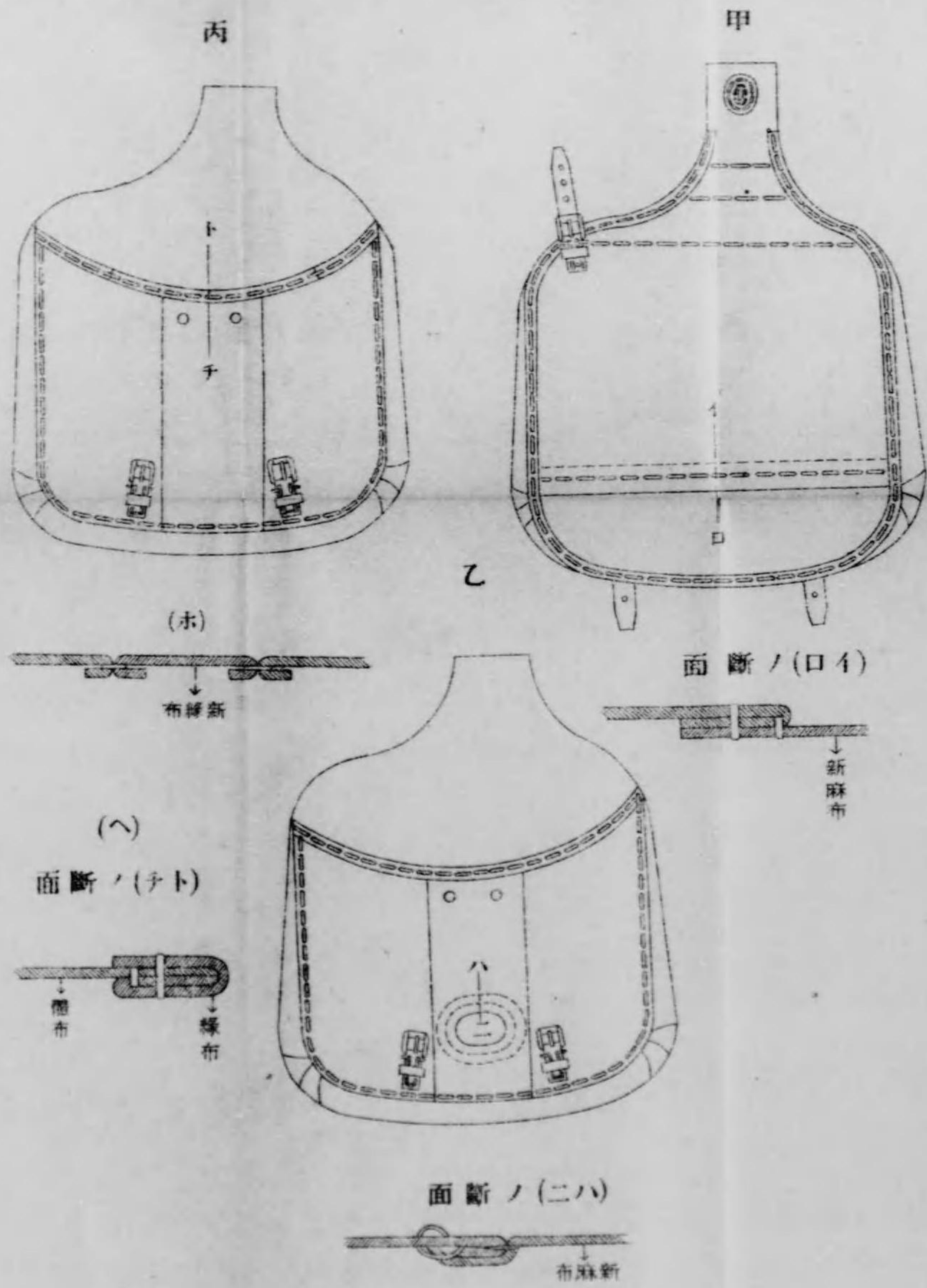
圖十三第

理修ノ革頂絡頭



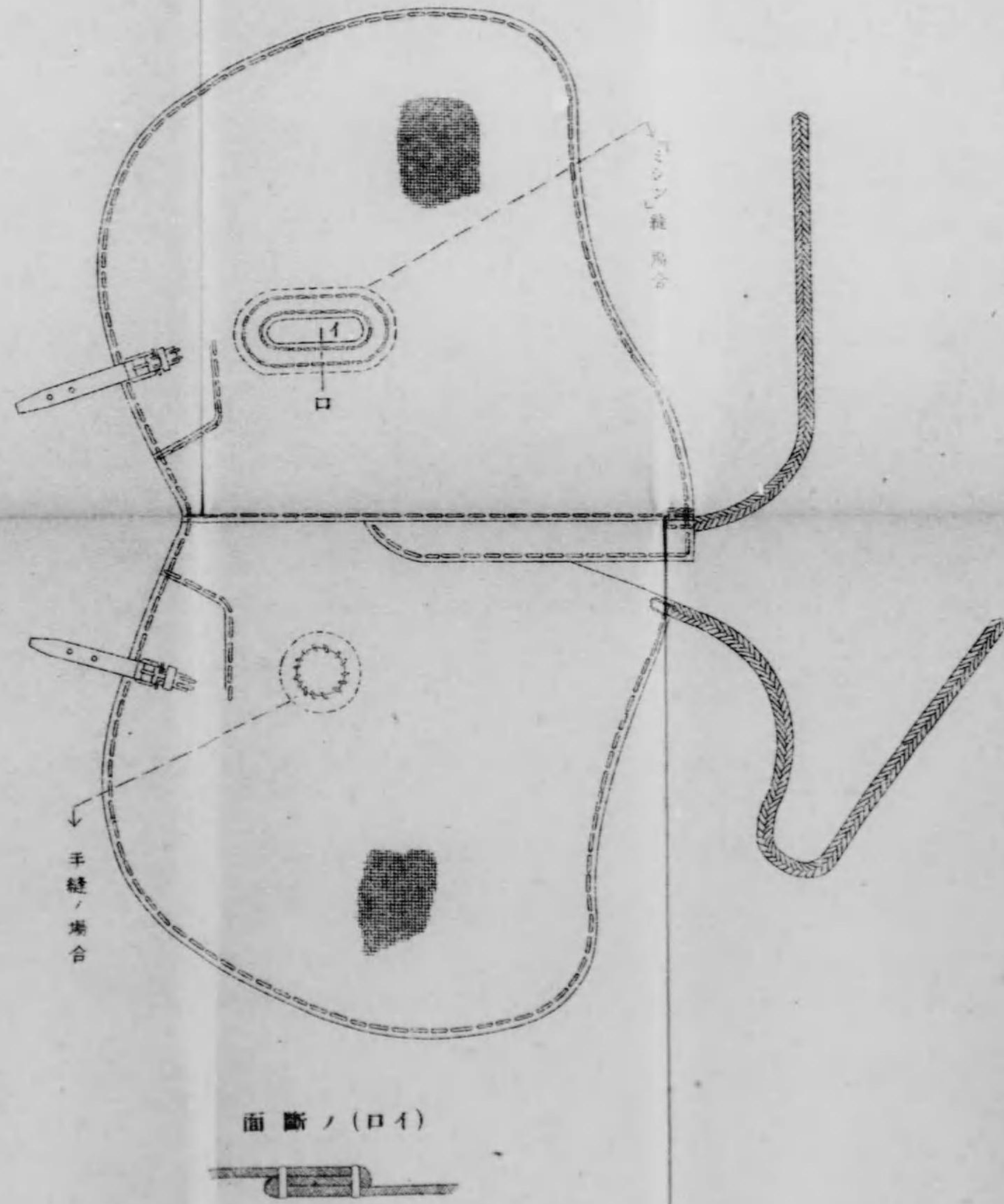
圖五十三第

理修ノ囊旅



圖四十三第

理修ノ覆膝



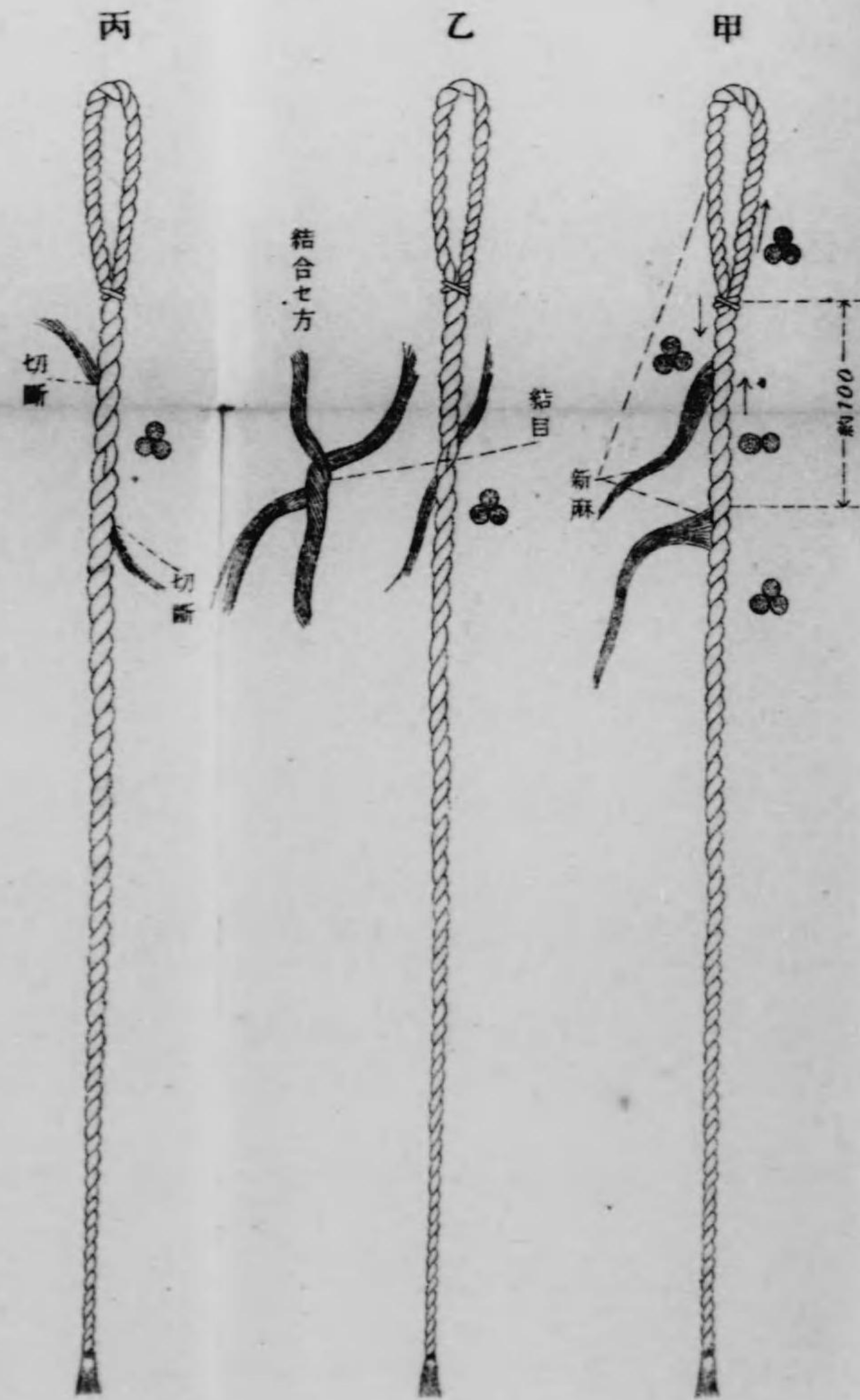
圖七十三第

(部 央 中) 理 修 ノ 繩 繫 野



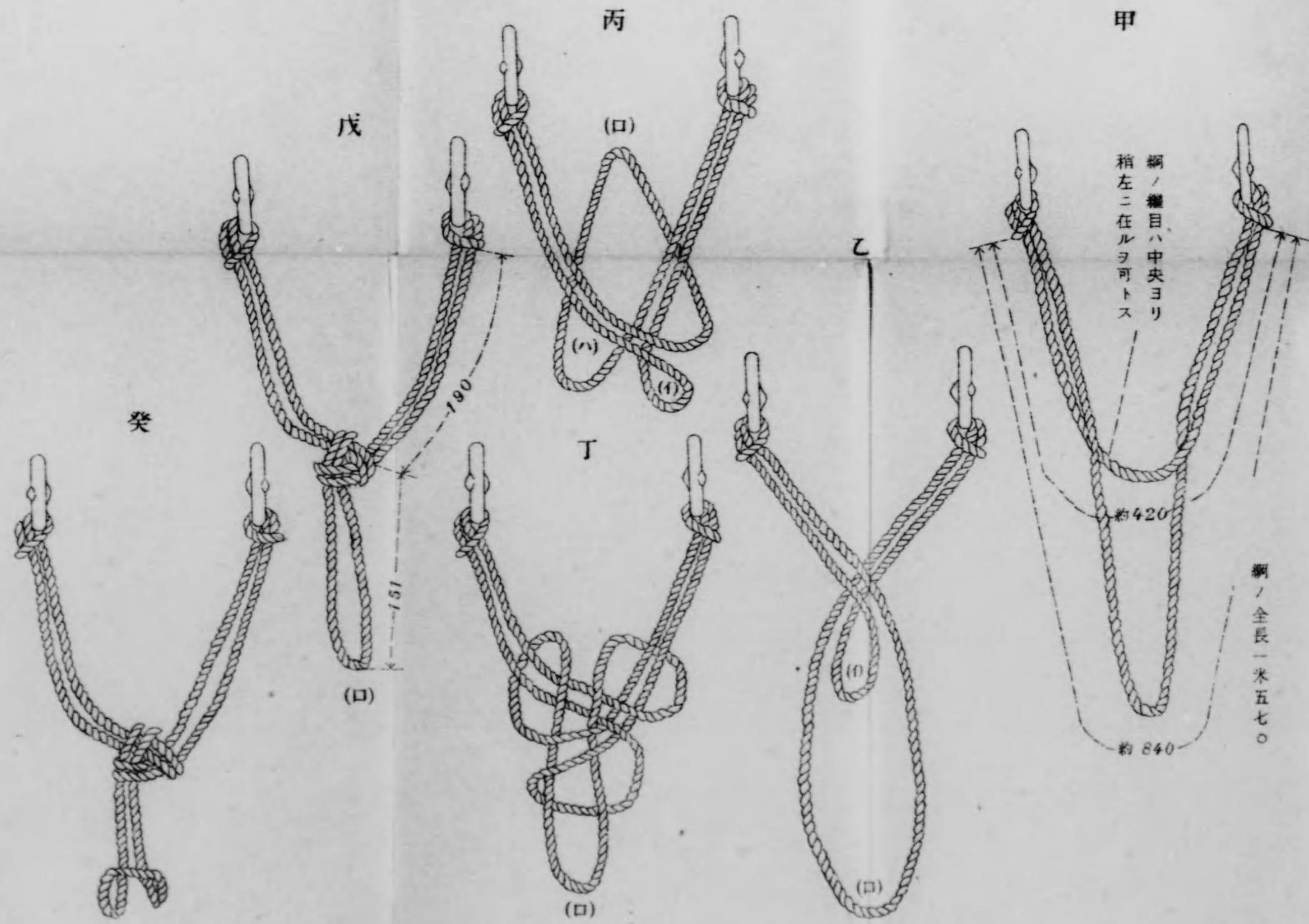
圖六十三第

(近 附 口 蛇) 理 修 ノ 繩 繫 野

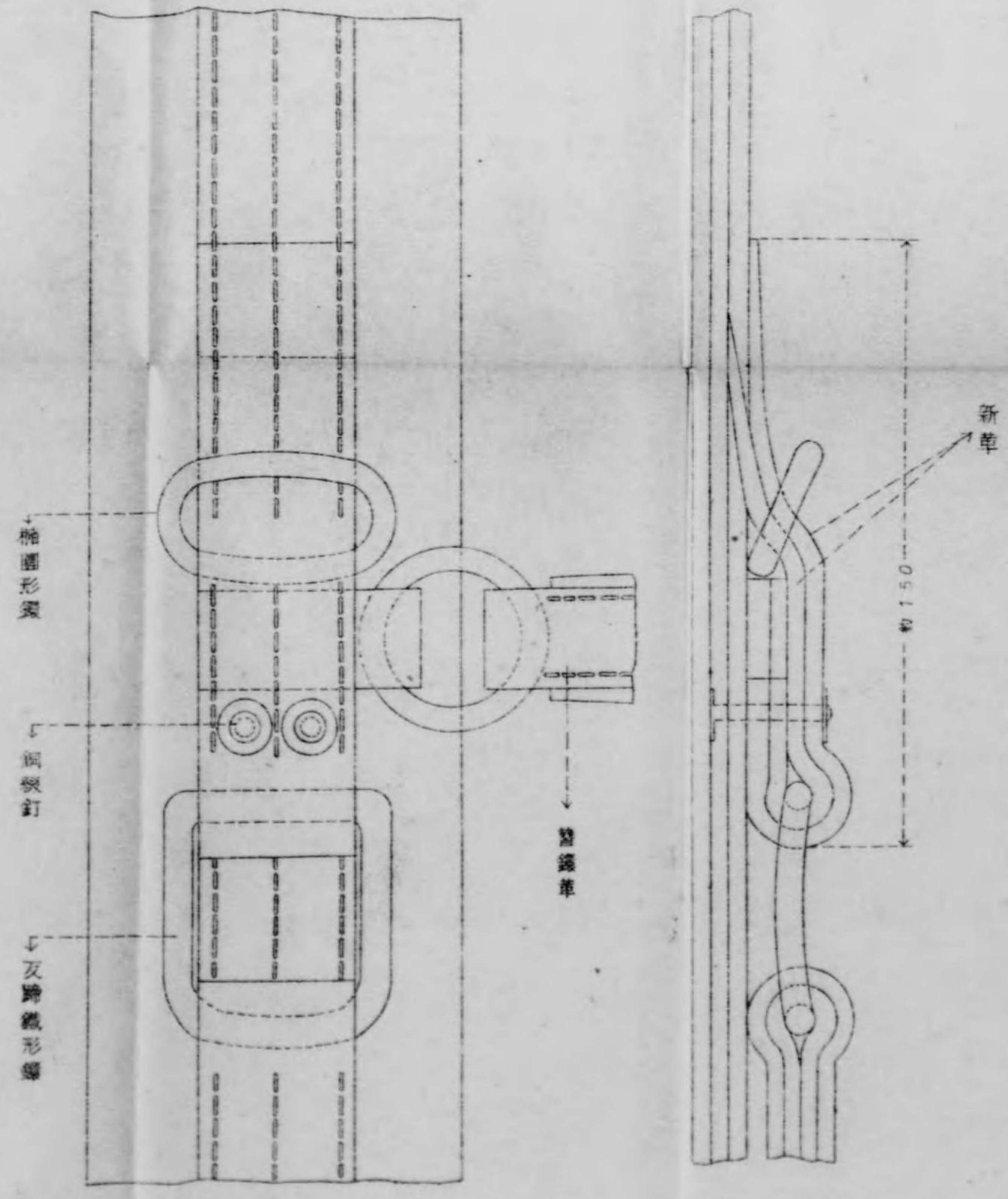


圖八十三第

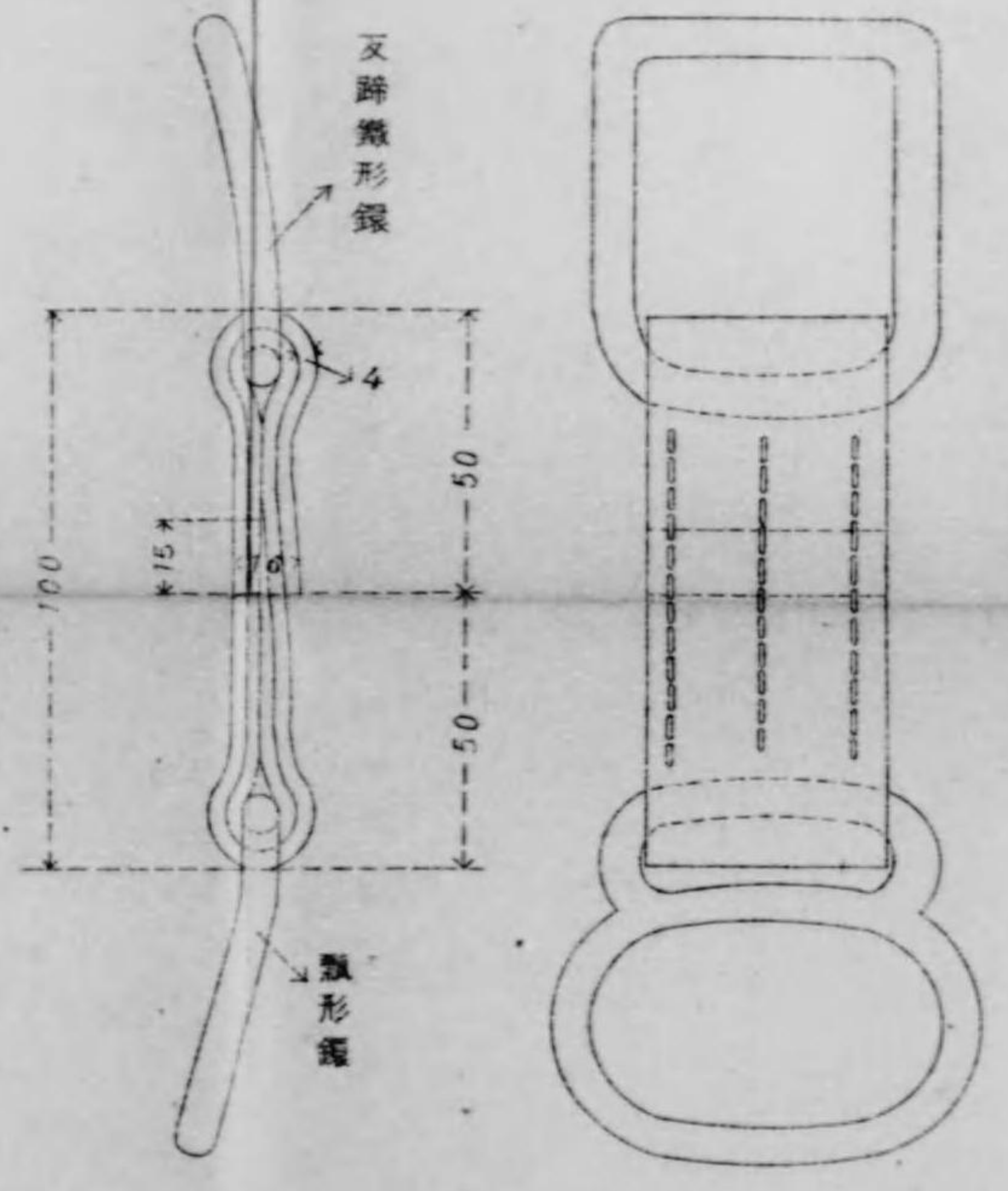
法合結ノ紐頭絡野エトガキ



圖一十四第
理修ノ革喉緩



圖十四第
革著附銀形瓢



圖九十三第
理修ノ革首

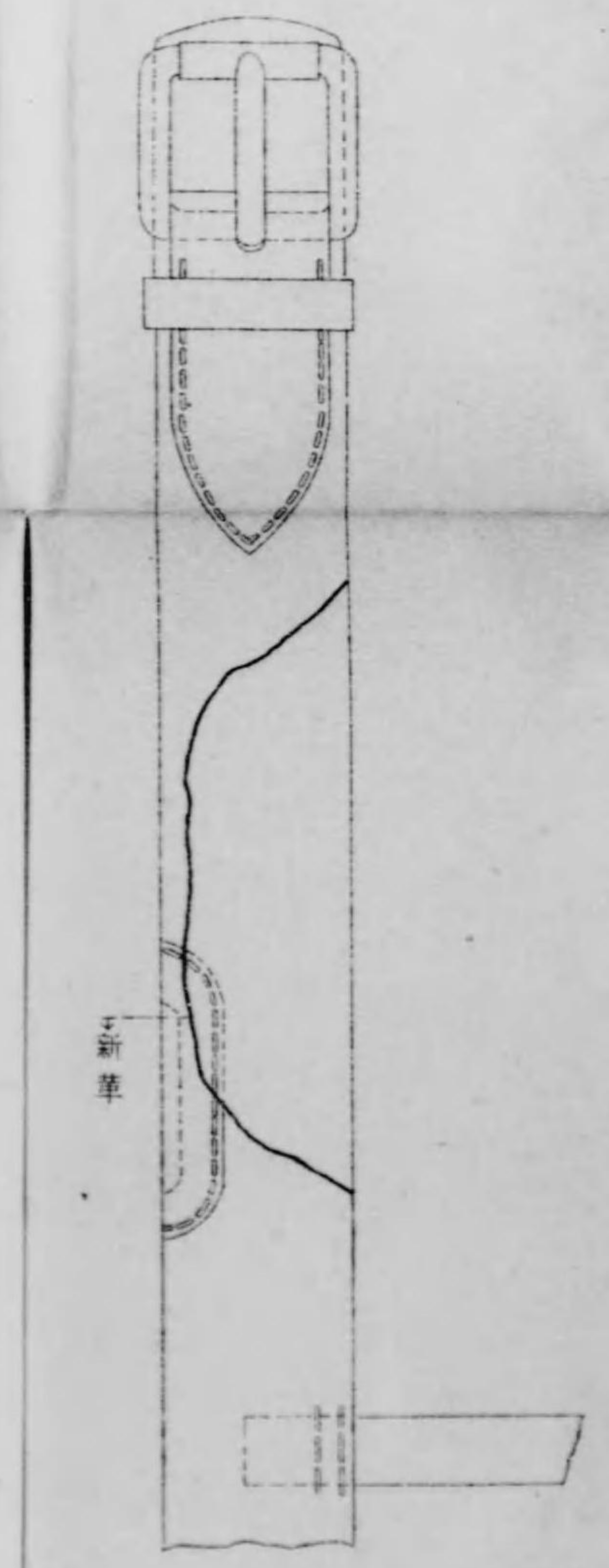


圖 四 十 四 第

理 修 / 革 . 袴

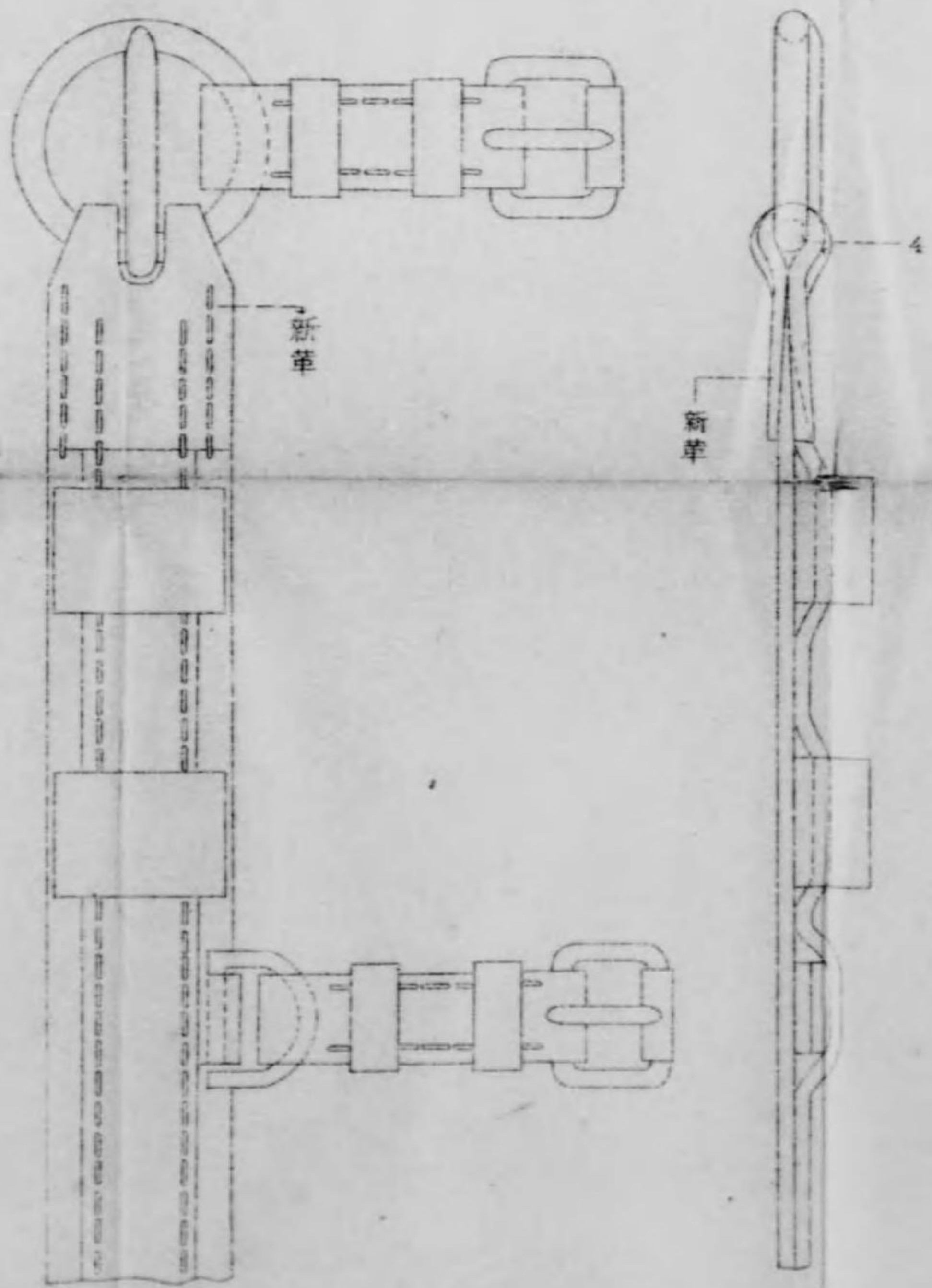


圖 三 十 四 第

理 修 / 革 靴

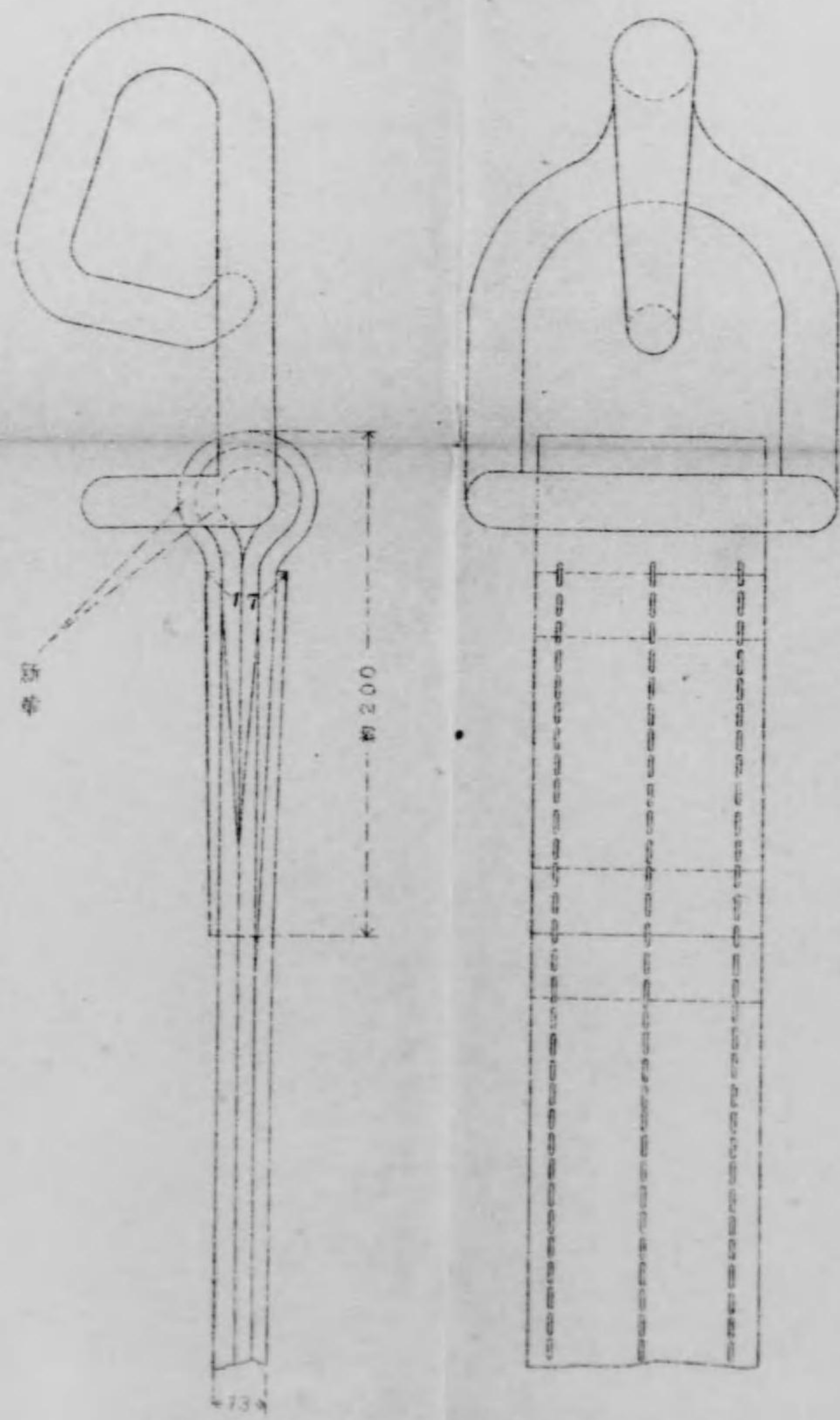
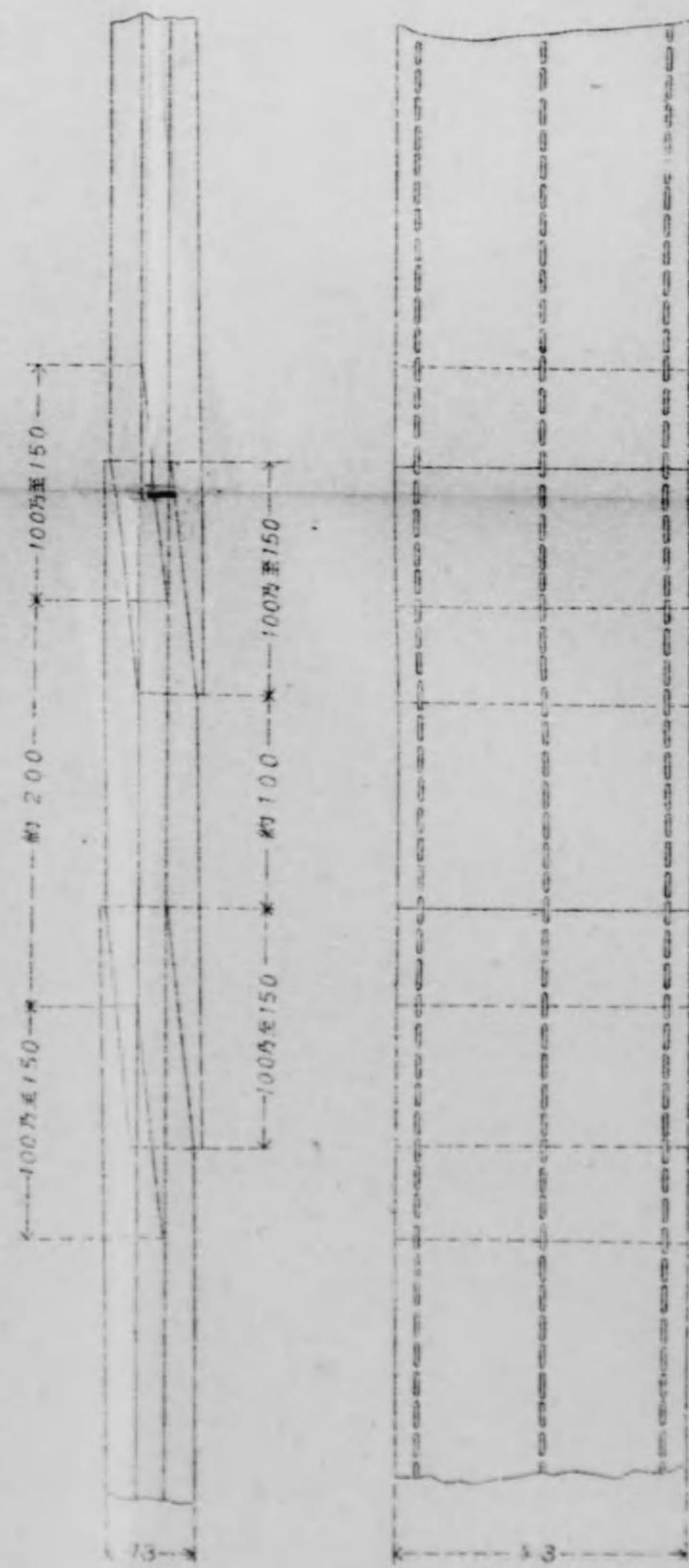
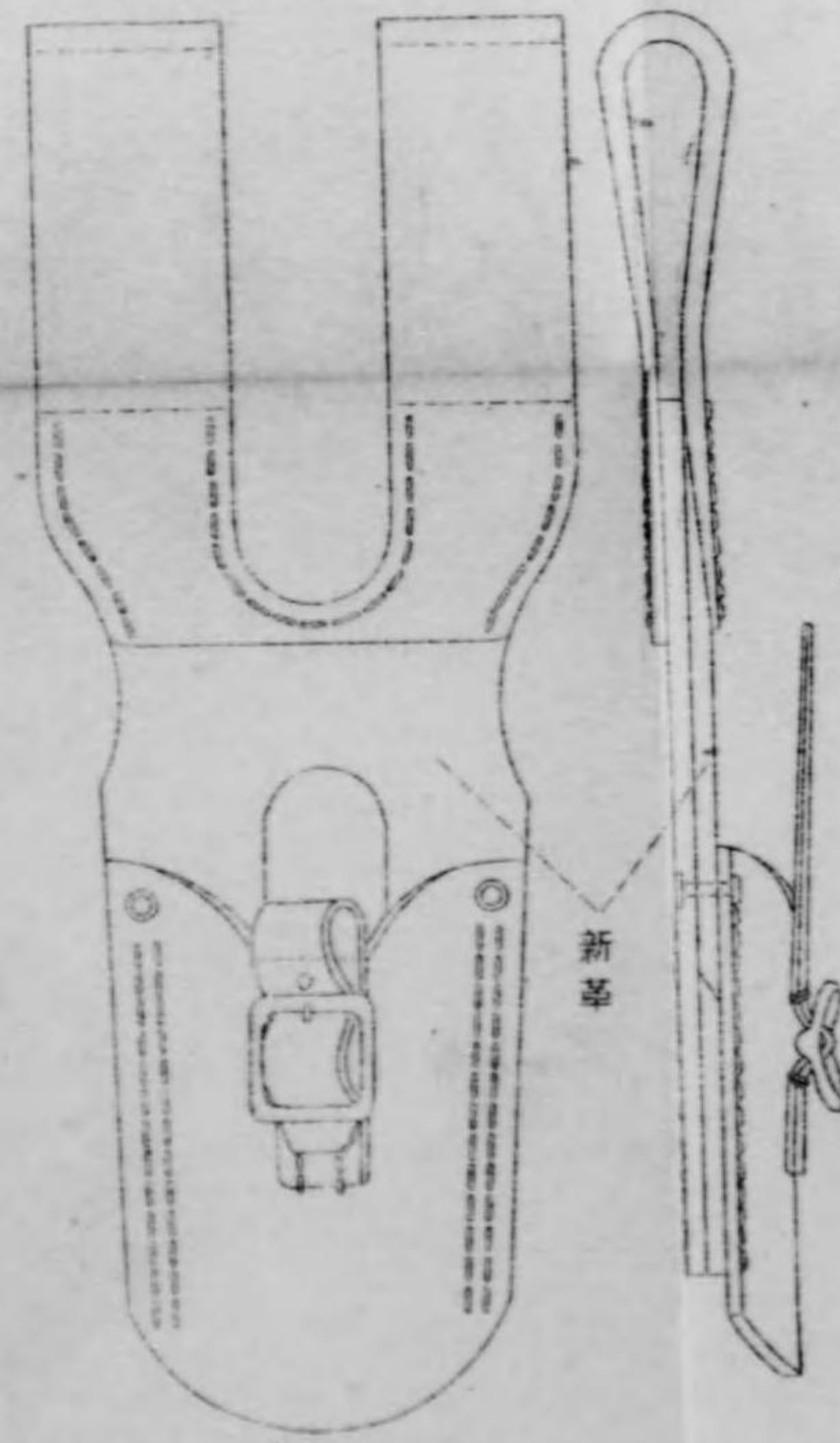


圖 二 十 四 第

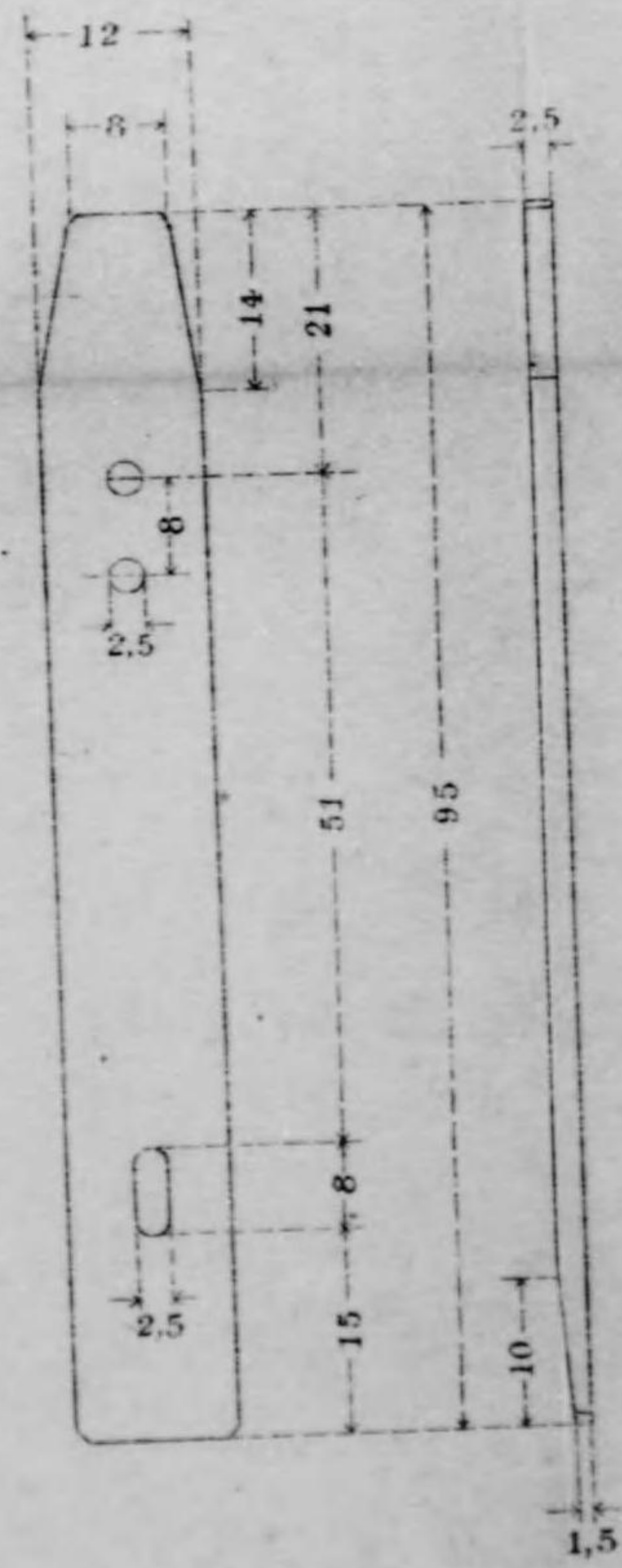
理 修 / 革 長 平



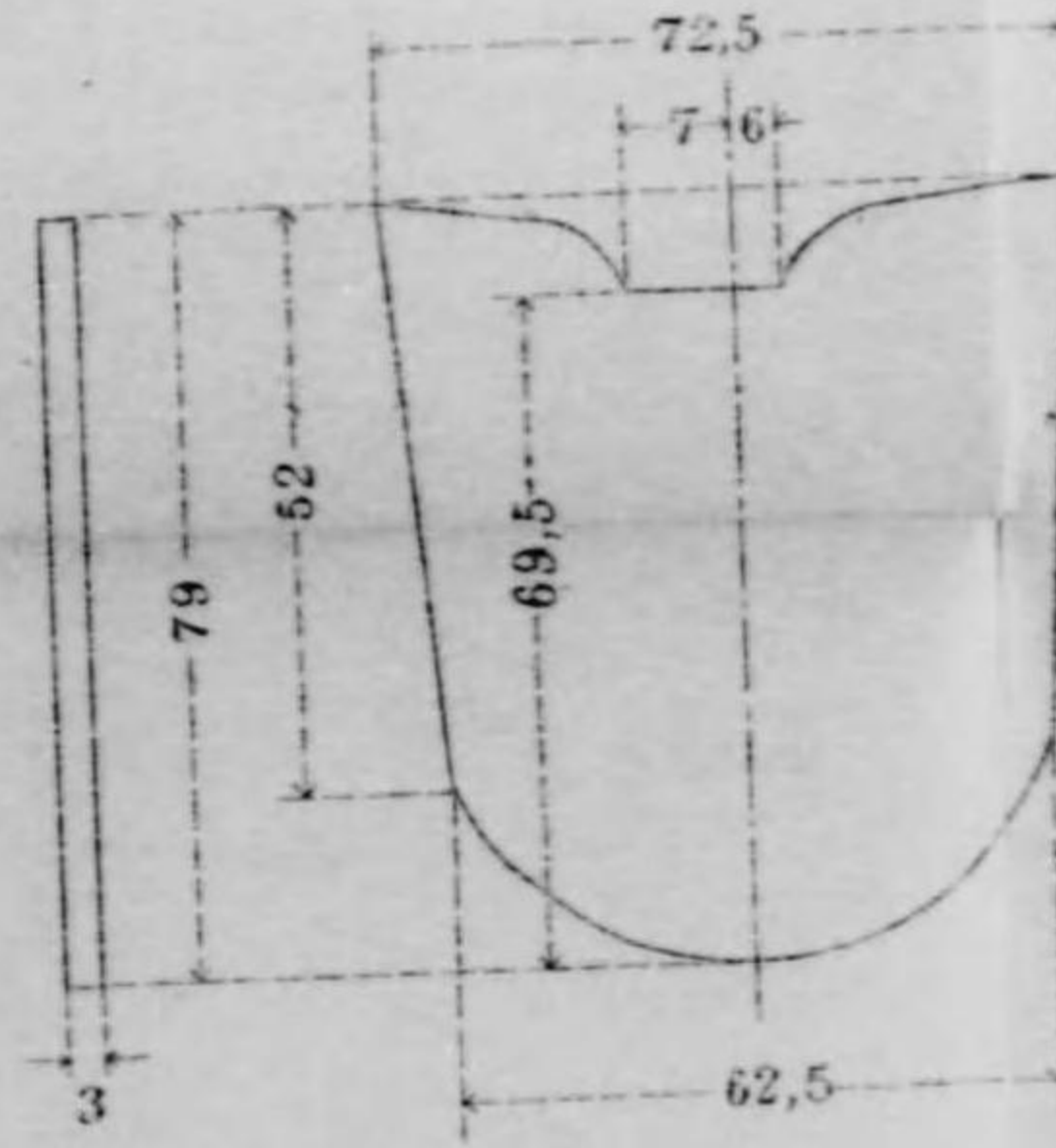
圖八十四第
理修ノ差劍



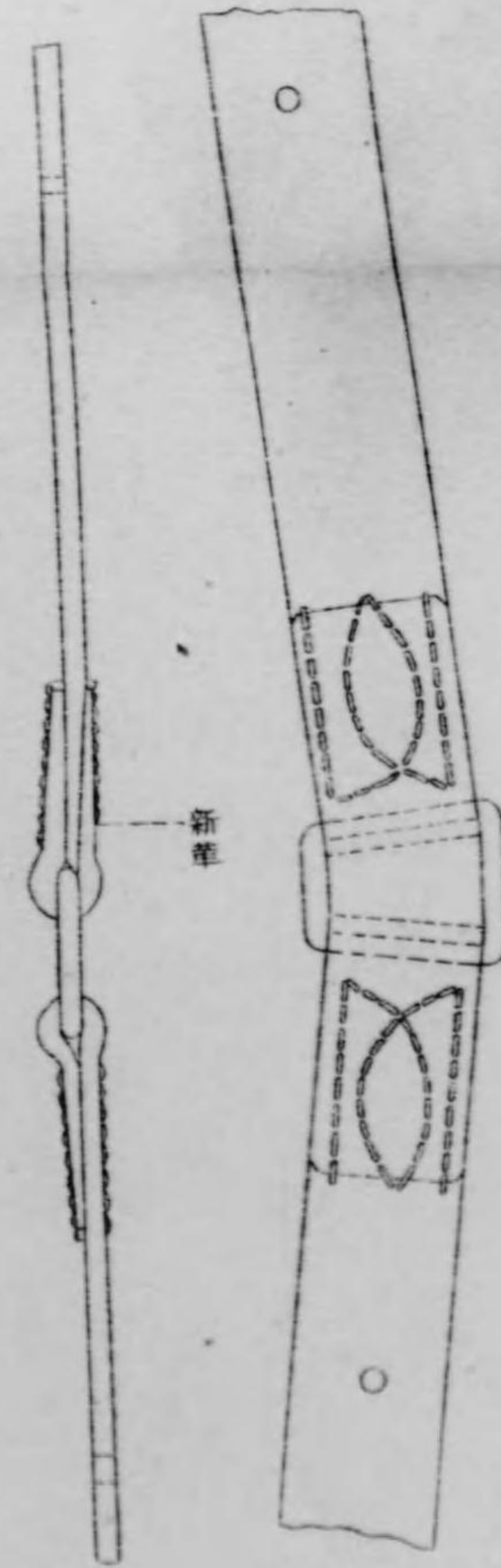
圖七十四第
條革細差劍



圖六十四第
革表差劍



圖五十四第
理修ノ帶刀



大正六年十月十日印刷
大正六年十月十三日發行

(鞍工教程奧附)
(定價金貳拾五錢)

翻刻
發行者

印刷者

東京市麴町區準町四番地

兵用圖書株式會社

代表者 小林 又七

東京市麴町區準町四番地

小林 又七

電話番町三九八〇番
電話番町一六二九番

陸軍省構內

小林 出張所

電話新橋九四一番

東京市麴町區準町四番地

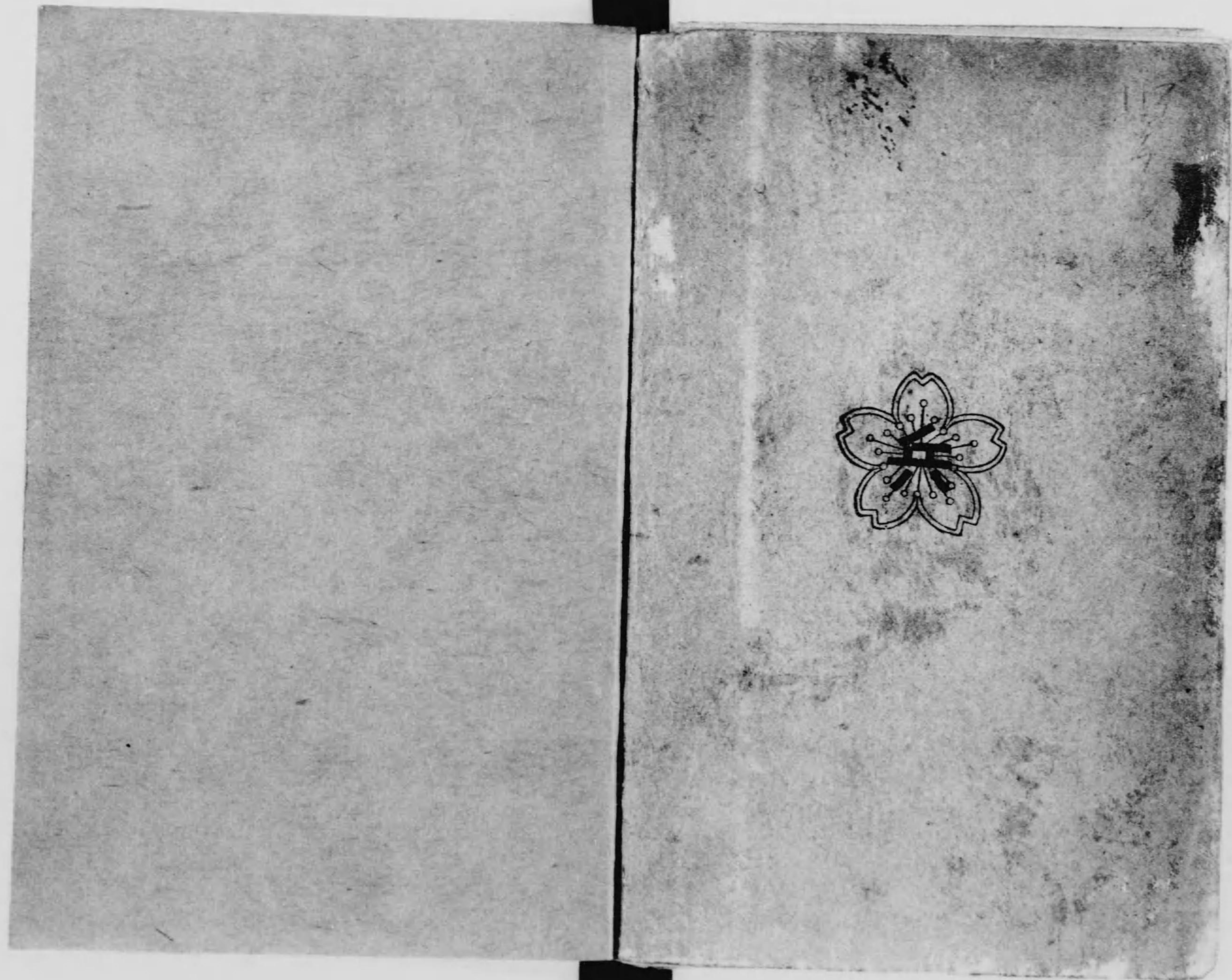
兵用圖書株式會社

電話特番町三七七四番
振替東京一八〇八八番

陸軍省
檢閱濟

發行所之證
兵用圖書株式會社

364
367



364
300

終